○料理代直段附合印　常の仕舞の外朝直し別につく　ご橋わか町舟宿よび一つ多く附く

和歌町	よびだし 銀七十二匁 一切 八ツ迎へ附 十二匁	新市場	朝直し別につく 一つ二朱 金二分
茶橋	よびだし 銀六十匁 一切 朝直し附 十二匁	眞地	金二分 一つ一分
表神樂	よびだし 晝じまひ 金三分 一つ二朱 宵どまり 金二分	裏神樂	晝夜一分
曾蘇次	朝直しとも 一つ二朱 同斷	宇美	晝六百 夜四百
古市場	朝直しとも 一つ二朱 右同斷	船打場	一つ百文 泊六百

年中月次もん日は粗北國に準ず、但し山開キ祭を大紋日とす。

玉の幞

關東米

第一齣

○古市場の朝直しと新市場の朝歸りと　いづれ

明の鐘ボオン、烏カア〳〵〳〵。古市場のみかげ屋夜あけのてい。下にはとまりの船頭枕ならべて寢て居る。船頭「コウあけたぜ。おきやな。」いま一人の船頭「夕はやみと蚤がくらやがつた。」船頭「ちよつと見通しへいつて見や。筑田沖へへしと繩舟が出た。いいなぎだ。お客を乘せこんで、三牧洲へ大鱚をとりにいきてえナア。」船頭「ウ、おらあけさ、舟をたでに出ねえきやアならねえ。いま〳〵しい。」船頭「遊んでゐるもていぎだよ。おらが親方などは、上乘をしてきても、いつこくをいふもんだからお客がおちて、此の頃ぢやアずでいひまよ。コウろぐひを一ツ本貸しやな。大繩をつけてくんねえ。」起番の女「ハイ〳〵、恐ろしい蚊だナウ。ゆうべはよひきつてて、道具をふいてしまつたら、ちやうど七つさ。いつそねむいよ。」料理番「昨日はいつ山だつたがの。」出人の肴屋「けさはおめへ、ゆうべの南でからつちけさ。見なせいし、此の小鯛が五十

五文だあな。」料理番「三十位ならいいが。吸物はむすびざよりにしておかう。なま貝をよしてト。車海老を長蓋のつみあはせにしよう。」香屋「けさはべたに銚子びらめさ。」料理番「けふ日の野締ぢやァ二階へは使はれねえス。總菜にとつておかう。二百の位か。」香屋「二百五十のかひ出しさ。」料理番「二十。」香屋「チョッまけろ。」かしば、門口にし「畜生め。」犬「ワン。」女郎「お舟が出來ましたよ。」手すりへ手をかけていふ。扨お客はゆうべもてたと見えて、うれしさうなかほで二階を降りてくる。女らうはねむたさうな顏で、あとからおくつておりる。女、札を見わけてはきものをなほしながら、「ハイお近いうちに。」女郎「おさらばえ。」ト、いふより早く二階へかけあがつてねる。か「おあぶなうございます。」舟を突出す。女、あがり口に立つて見て居る。「せんどん、いつて來なよ。」是れはえんぎに、船頭へ「あばや。日傘でもかさねえか。」ト、みざをを取直しながら「きせる手に持ちひざ立てなほし、これま聞かんせ無理なこと。」ト、いたこを唄ひながら、ろと、客、あとをふりかへり見へ早をかける。舟河中へ出るて、ほゝかぶりをしながら、「ゆうべは妙だつたよ。」ト、はなしあつてゆく。又向うから二人船頭のちよき一艘きぬ間に、朝まゐりの顏でぬけて出る、是いそいでくる。是れは店ものゝまだ青い客にて、見世のおれをあさ參りといふなり。舟かしへつけ、船頭「みかけ屋ァ、みかけ屋ァ、。」よぶ故、かしば、さんばしへ「お客だよ。つれ申しな。」女「オヤ丈介さん、とんだお早いねえ。」ト、はしごをあし申しなせいしたよ。おさかなの出來るうち〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、寢てお出でなさいましな。」がりながら、「アノ子は今お客をひ客「さうしてもよいかな。ちくるゐめ。」ちくしやうめがあさつばらからういてゐる。女郎はおほとしまにて、たわいなく寐てゐるとこへ、なじみゆゑすぐにつれてゆき、おこす。女「モシおきぬさん。モオシ丈介さんが來なはいましたよ。」女郎「ウ、ウ、、、何だな、ねむくつて

ねむくつて。」ト、いひかけてのびをしながら目をさますと顏へ日があたる。女郎「オヤだうりで、今夢に見てゐたよ。〇〇〇〇〇〇。」客「えらいあじか樣ぢやな。」ト、と嬉しさう女「うつとしいねえ。蚊屋をまき上げていかうねえ。」ってあるに〇〇〇〇。盡四隅を卷き上げてゆく。客「昨夜のお客は、むまい中ぢやと見えて、ひよくござがよぢりもぢつてゐるさかい、トツトモ氣があぢいになりくさるわえ。」女郎「そりやさうとの、ソレとうからさういつておいたものはどうしたな。」客「もつて來たぢや。ちくるゐめ。」ト、ふところから白ちてやらうもいいぢやねえか。尺はいくらあるえ。」客「大はゞくぢらで四尺ぢやから、下帶丈たつぷりみんな色がしろいねえ。」客「土龍のじんきよしたといふもんで青いぢや。」女郎「尺兵衛さんはどうしなはつたえ。出番にも來なさらねえネイ。」客「役がへをして、帳場になりやした。」女郎「わつちやあまたあしが近過ぎたから、かぶんなすつたらうと思つた。」客「わしらが店ではな、一人どううちがあるとな、それ一人にみなのをかぶせてしまふわいな。そのかはりもとで位は、よつてこしらへてやるわいな。」女郎「いいさんだんだねえ。モシ今朝は、ゆるりとるなつちやあ惡いかえ。」客「さよぢや。いつものお急ぎぢや。」ト、何もかも急ぎかける。女郎「アレサ、マアびやうぶをひいておくれ。いつそ恥かしいよ。」ト、袖を口にあてて、〇〇〇〇もあつかまし。

▲扨このまいら戸の一重となり六疊は、旅人客の牀にて、この頃こゝの内での一きやくなり。女郎も内でうりつめる奉公人故、よほど高みなれど、此の客爲にもならうと、ゆう

べ〇〇〇つとめておいたゆゑ、となりの音に氣をもめど、よくねて
ゐて〇〇〇〇〇故、客はすねて手をたゝく。女、下からくる。
「お呼びなさえましたかえ。」　客「歸る。舟をこしらへさしてくれろ。」　女郎「用があるわ。」　女「お出でなはいましたをあき、日「よしかな。」　客「問屋の仕切をとらねえけりやならねえ。いかう。」　女郎「いかうも氣がつええ。だが歸すものか。」ト、客の肩へ〇〇ついてて、　客「そんなら火と茶とおがいをもつて來てくれろ。こけが翁蕎麥へいつはんぶんまだ眠つてゐる。　ト、しつたかぶり　女「すきなことを云ひなえエますよ。」ト、云たやうに、手ばかりたゝかしやあがる。」きいた風をいふ。　ひすてゆく。入り代つて出入の按摩、朝　あんま「おれうぢはよろしう。」　客「ひとあんまいかう。」　あんま「ハイヘイ直しときいてもみ手をしながら、あんまりむごいどうよくなツ。」ト、日合をいひながらはひあがる。　女郎「あんまさん、落しばなしをしな。」　客「おしやうは色氣よりくひけだらうの。」　あんま「むごいことをおつしやる。是れでも女には目も鼻もござりません。オツト鼻はあり〳〵。」　女郎「をかしいあんまさんだよオ。オヤ湯が出來たらう、はひツてこよう。モシイ、おとなしくもませてゐなせいにしえ。」ト、はな紙をもつかへりてくる。〇こゝに又氣に入りの江戸がみ、是れぞくしたるりこんの合羽を、降りもせぬに著て、芝居の樂屋じやれをいふ。　てたつてゆく。　かみ「サアモシ、さじきがわたりやす。」ト、びやうし「よつぴていでんほふ　芝居でぶう〳〵を　をいひの、今はね　はねとは打出云ふ通言なり。　しの事なり。やした。どうでござりすどうでござりす。」　客「昨夕すつぽりと大わかり〳〵。」　かみ「それでもアノ子が、刺青を消さねえけりやア、むまりやせんぜ。」　客「それも如才なし。諸事解つたよ。」　かみ「解つたといひなすつ

てよも、どうだか。」ト、せきこまされ、此の客いつたいうぬぼれつけて貰つたいき身へ、疵をつけるが悲しいといつて泣いたを、ぜつにかけてのつぴきさせず、消してしまつたよ。」　かみ「けせばきめう〳〵。茶ぢやアねえが、よくうそをつかつしやる。」　客「うそぢやアねえよ。ソレ公が話した通り、左のわきの下のはうに、朝三とほつてあつたを、ぐつとするゑきりしたわさ。おれもすぐにあれにほらした。ソレどうだ。」ト、じまんらしく、うでをまくつて見せると、成程かみ「がうせい〳〵。しかしおめへばかりきずをつけなすつても、あの子がほらねえぢやア、金を出すもあんまり智慧がねえネイ。」　客「あいつもほらうとは云ふがの、いぼつたから膏藥をはつてから、そのわきへほらうと云ふよ。」　かみ「みれん〳〵。消したもすさまじい。」　客「さううたぐるなら、大勢よんで、お石が腕をまくらせて見せよう。」ト、見せたがるもきついみえばうなり。時に起きばんの女　は、朝直しの客を納めてからねる事故、とぼけたかほで、女「おまんまをおあんないまし。」かみ「おまんまはりのれうぢ。オツトさしで一ぜんかつこまう。」女「ちつとこゝをはきませう。みとほしで一つおあんなはいまし。けさはいつそよくうみが晴れましたよ。」客「海が見はらしたけりや、嵯峨町の火の見ばんのとこへかたづけ。」女「なんとかおつしやいますね。」客「ア、あれ〳〵。よせ場の前に立ツて、やうじを使つてゐるは、權八ぢやアねえか。オ、イ權こう。」ト、大きな聲でよぶゆゑ、笑ひかけてじぎをする。爰の權こう。」らうかの格子から明地をのぞくと、見番が見えるなり。　女「朝だからネイ、えんぎにネイ。」　客「權

をよんでしやれようか。」女「モシ権八さん出ますよう。」されば、あさなほしの二階のけしき、あさひうみにやくわんも来て蔵のやねじつくひをはじめ、からざしきはからりと明けはなし、内の大かみさまとお針と、ゆかたの引きのしをしてゐる外に客なきゆゑ、おんば内のかんのむしの出た子をだいて、堀の内さまの御ふうをだまして呑ませながら、廊下をあそばせて歩く。ゆうべの起番の若い者は、ざふきんをもつてらうかをふく。

かみ「アレ〳〵あの人がほつたて尻で、跡ずさりの身は、ひきがへるの田植といふ身でござります。」客「こいつはいい、コウひとつ呑まねえか。」若い者「ヘイ。」ト、しりをおろしてすわる。江戸がみ南一やらせる。若い者はもらふやいな、用がないゆゑ立つて行く。かみ、硯ぶたをはさみ、おんば「ハイちつときい〳〵がわるうござりますから。」かみ「そんなら梨子はよからう。」ト、いふところへおきて来る。船頭「モシ、権八を呼びにやんなさいやしたか。」あいし、候次ういて来り、権八「ヤアこれは。」かみ「こりやド、ン。」権八「ブウブウ、。」候次「ジヤン。」船頭「遠寄せにせめる氣だな。」客「権八ネ、お石ももちつと手があるといいな。」権八「こつちでのたてものでござります。おまへさんがたのやうなお客でなくてはむきません。」ト、もち上げかける。か「さうさ。形がちよんときまつて、もちものやなにかが五み、おひやりかける。分もすかねえで、ソレ。」権八「氣まへがよし。世事があつて男もよしか。金が有るさ。」候次「これでほれねば、さきが無理と云ふもんだ。」客「コウ、ことしは女郎がやすいさうだが、みんな蟲ツくひだの。」権八「なアるほど。」客「おらアなぜか、一雨々々に色がへるよ。」候次「はてね。」ト、合はせながら三味線箱をあける。客「ひかずとものこつたぜ。」権八「これも御祝儀。」ト扇を「上畧、その種まきの種まきて、なるはえき

ろのすゞのねも、盡きせぬみよのことぶきを、うたうてやがて扇を納めけり。」候次「チヤン。」船頭「ヤンヤア。」客「此の女郎はなけい湯だ。とけやあしねえか。笊を持つていつて、すくつて來てくれろ。」女「髪結さんが來て、待つて居ますからいつてさ。今おいでなはいますよ。」ト、いふ折から、女郎「お針さんなんだと。その手をくんべいか。」ト、いふ聲がして、勇んでくる。権八「ヤアけいこまけあざやかく。」かみ「まくをひつぱりなさるから、見物が手をたゝきやす。」女郎「をかしな。」ト、いひながら、氣を起番ぢやアねむからうがの、鹽留へ行くなら、此の手紙を内川屋へ届けてくんねえ。」客「見せや。なんだ内川屋にて波さま、どんなやつこさんだ。」女郎「色男さ。しかけをしてもらふつもりさ。」客「しかけも氣がつえ。せりあけ、しやち、がんどう、ぶん廻しと云ふ道具立の算段なら、しかけの地は黒まくにやぶだゝみのもやうで、捨鐘忍び三重で出るのぢやアねえか。あさぎは裾幕ヨッちよんく〳〵だらう。馬鹿な面な。」女郎「ばかにつらがあれば、あさりや蛤は、木場へ下屋敷をかつて隠居しやす。」客「あさりだの蛤だのと、てめへむきみ賣の娘か。道理で水をしほつて、いくらとあてがつて賣るぜ。」権八「やかましい。」候次「モシゆうべのお話の山の趣向は、どうでござります。」権八「山のでもござせいせんぜ。」ト、しやくる故　客「お石、その手を出して見しや。」女郎「なんだえ馬鹿らしい。わ

つちやア知りんせん。」かみ「ソレ〳〵うそ〳〵。」ト、いふ故、客は見せたがりて氣をもめど、平氣でしらぬかほするゆゑ、いよ〳〵せきこみきたりて、客「インヤ、消したよ。」かみ「ナニけしたえ、こいつア大わらひ、きつい譃だぞ。お石さんどうだ。けす氣はさらになしぢの重箱だらうが。」お石はゆうべせかれて、色客のほりものをさんだんで消したれども、みんなへかくしてけさぬ振をしてこの客をじらす。女郎「可愛い男の名だものを、めつたに消しちやアならねえのさ。ナウおとらどん。」女「表かぐらだの芳原だのと、お出でなはるものにネイ、おへねえちらしなお客だよ。」註に曰く、買ひちらすものをちらしな客といふ、このごろのはやりことばなり。かみ「此奴は立たねえりくつだ。」客「ほりものさへ消したら、立たねえことはあるめえ。」かみ「これを消せば、とんだはなしだ。」權八「消すのけさねえのと、じふのうと火消しつぼの夫婦げんくわぢやアあるめえし。」候次「どういふりくつだの。」ト、三味線箱へばちを頬杖についてわらつて居る。あぢにお座がしらけて、此の客こたへかねてお石が手をとらへ、客「出して見せてくりへ。」女郎「なにをえ。」客「コウ見せてくれねえけりやア、なんぶん立たねえ。」女郎「エヽもうひつこいよ、わつちやアいやだと云ふのに。」ト、いひながら女郎はたつ。客はこれをひきとめて、腕をまくらんとす。女郎は是れをみせまいと、おくばしごの口までにげてゆく。あとからおつかけて、出るはずみに、てうしをひつくりかへしてころび、大さわぎになる。客「いま〳〵しい。いけふさ〴〵しいあまだ。けへるべい。」女「お石さんえ、おけへりなさるとさ。」ト、よぶゆゑ、見通しに牀花をいけるを見てゐたるが、へいきで來り、女郎「なんだえ。よく世話をやかしなさる。」客「けへるわ。」ト立ち掛る。女郎「けへるもいい。」ト、ぐつとうしろからだきすくめられ、客「いやらしい。コレよせえよせえ。」ト、いひながら、べつたりとよこにふんぞりかへる。女郎「寢なはるなら、牀の上へお上りなせえしな。サア合羽をとんなせえしよ。モシイもめやすによ。」權八「とんだだゝつ子もあるもんだ。」かみ、あしをゆすりながら、「モシゆらの介さん、モシ氣をかへて、えびすの宮へ麥飯をくひにいきは。」候次「いてふ屋のうなぎといふところはどうで。」船頭「すさきのよし田屋へいつて、そばとしやれやせう。」權八「大將がねちやアはじまらねえ。」候次「雜兵どもいつたんひきとりとしやせう。」ト、箱をしまひ、兩人「お石樣、よろしく申して。」ト、いとま乞ひして歸る。女「後までお出でなはるだらうなう」船頭「されば、表かぐらへお客が來なすつたさうだから、かほだしをして來ねえけりやアならねえ。」ト、二人もしやうじをひき立て下へ行く。○女らう、やう〳〵牀のうへへひきずりあげて、「よひなはつたか、萬金丹をあげようか。マア此方をむきなせいし。じやうがこはいよ。」ト、丸藥を○○○し、客「べらぼうめ。」女郎「それにべらぼうがいるかえ。」客「なぜうでを見せてくれねえ。」女郎「といひなせえすが、おめへでもございやせん。わたいがよしわるいにしなせいし、あゝいつてくんなさる事はごぜいせん。みんなのめへへもかつかうがわるうごぜいす。なんのじよせいもなくつて。」ト、たしなまされてもろくへこみ、客「いいわ、あやまるからよからう。」ト、○○○○○○○○○。女郎「エヽもきついことをしなはるよ。アレサくすぐつてい。」客「あやまるよ。」女郎「マア聞きなせえし。わつちやアあのけさ、行水になりやしたよ。」

傳　かういふ遊びの高い客を、だゝら大盡といひ、やすい客をてうさいばうといふ。右の旅人客は、相應に金も手廻る故、場所の流行唄も、金を遣はぬ荏土者よりは早く知り、氣のきいたやう

なれど、どこやらに畑くさい所があるなり。けいしやの買ひ過しなどして、舟宿で勘定の時、書附の数が違つたなどと、きたなびれるたちなり。さて同じやうなれど、古市場はふせ玉にて、なじみの舟宿でなければ、四明から初會をあげず、新市場は初會まはしをとると心得べし。但しふせ呼びだしといふ。

第二齣

○表神樂の宵泊りといづれ
會蘇次の晝仕舞といづれ

客伴頭、年は四十餘り、酒ぶとりにでつぷりとして、諸事大ふうなしこなし。三筋立のたうざんに、花色七子の帶らしやのかぎぶくろをさげ、見通しの牀柱により掛りて、もつたいらしくあげあぐらの、毛だらけなもゝから、こんもめんのもつこうふんどしが、ちらりと出てゐる。いつもはおりずきのげいしや買ひにて、いきなり三組五組づつよんで、料理番にも折ふしはずむ故、出し物もどんとにぎやかにて女ども寄りたかり、見通しをひつくりかへしてさわぐ。

○娘分、あねおなんどふとりの羽織を、「モシ、皮太夫もかけてやりやせうねえ。」ト、いふ所へ、女郎おもて、わざと遲く來り中あづかりて、袖だゝみにしながら、舟にけぬきがござりやした。コウ、だきらふそくとしねえ。」ト、いふ所へ、船「モシりのかう者にて、口が掛ると、女にとほして、病氣で引込んでゐるといはせておいておまへなればこそ出る、と云ふ顏で見通しへ出る。あとから船頭の肩をりやう手でおさへて、「きのふつれまうしてくるとつて、よくうそをついたの。」ト、せなかを一つくらはせて、世事をつとめにつこりとして、伴頭の膝へくづすぢりぶたのかまぼこを杉ばしで燒い「アンと口をおあきよ。サア。」伴頭「馬鹿をするな。けむいわ。」ト、火のては、ばん頭の口へやしなつてやる。こゝらがなじみはありがたきものにて、火ばちを引きよせて、つゐてる箸を、灰の中へつつ込む折から三絞箱をさきへつん出してから來る。皮太夫「イヤアー、これはお久しぶり。先づ御きげんよう。時にかうぶせいぢやア、いい女郎かひにはなれえめえ。」ト、もうち伴頭「あいしなしか。こさア小二朱半ばらひだぞ。」皮太夫「又惡口を。絲藏よつてぶつたふれてをりやす。」伴頭「大呑みとしようぜ。」ト、道くわん山で氣で、杯をはふりなげる。皮太夫「ふさりましたが、膝をいとふ故うけはづし、伴頭義太夫「戀は女子のしやくのたね。」ト、一口じ皮太夫「イヨえらい。大將うまいこと。」船頭「いつけんいきやせう。」皮太夫「一番ころきりだよ。」船頭「チエイサイ。」皮太夫「リウか、リウか〳〵。オレトどうだどうだ。龜井戸のやほけんさまめが。」女、ちひさな聲で、「むけへだよ。どうせうなう。」船頭、つゝ茶わんで「直してやりませうか。」伴頭「ウ、。」ト、いつた許り、是れをきかぬふりで羽織藝者、皆々三絞箱をひやうしに叩き、はやりうた「麥ついて小麥ついて、お手に豆が九つ、九つの豆をかぞへ見れば、おやのさいしよがこひしや。」伴頭「いけさうぐ〳〵しい。」はおり「たいかふ記〳〵をめるりやせう。」伴頭「それもふるい。」皮太夫「此のお客はなにをいつても聞きあいたと、湯屋の伴頭さんぢやあねえか。」しをとをけや節、「わしがおきせをほめるぢやないが、チウワイナ。」船頭「モシをどりを一ばん。ちつとふるしくさいが、しもじんくをうたつてくんねえ。」皮太夫「義太のうちは、おれがやらう。ソレよしかいより、かたきのやうすこま〴〵と、女の文の跡や先、テテン、ちり〳〵ではかどらず。チ、トチチン。」是れをきつかけに、船どう立「さつさおせ〳〵下の關までよ。おせば新潟のさままるる。チヤ〳〵チヤンつて、をかしみのをどり、

チャン。」女郎「オヤ〳〵、したおびがはづれたよ。」ト、伴頭の膝へ　皆々「ワハ、、、、。」どつと、をどりをわらひこける。
伴頭「一つしめろ。」　皆々「シャン〳〵〳〵、きまつて三度シャン。」　皮太夫「ハイかんなりもおちました。アハ、、。」　娘分「一つあげて、ちつとあちらへやりまうさうぢやあねえか。」　かくて皆々箱をしまひ、伴頭が小べん所へ行くともをして胴へ廻り、暇乞してどや〳〵わや〳〵、ちやほやといつてかへる。船どう「そがの五郎さんや小林のあさひもこゝのうちではばぶりがよく、よつてらうかを字あまりのいたこでくる。」　女「ふなさんではあるめいし、とめたやらぬもすさまじい。テツレッテチャン。」ト、口三み線、後から　女「ふざけなさんな。不景氣な。」　船頭「さういつてもいほじりまきにした所は、がうせいなもんだぜ。」女「ウウ、大きに。」　船頭「承知か。しようちならまきろやへあゆびやちら〳〵と。」　女「あきれらァ。」ト、雨をいひ〳〵来り煙草盆の上へ　伴頭「諸事お丸でなくちやあ、胴がきれねえス。」　女郎「お丸殿、あんくわは茶椀を二つならべて置く。
あげられねえかなう。」　船頭「モシお丸は顔にやア遊びがあるが、からだにやあひまがねえやうだねえ。」
女「しやれらァ。」ト、せなかをつついてにげて行く。▲是れは扨おき此の一件、見通しに大騒ぎの時、となりの見通しに跡から追ひかけ行く。▲初會の一人客あがり、しよくだいと船頭と三つがなわで、つまらぬかたちでさみしくして居る所へ女、杯を持ち来り、「お一つおあんないましし。子どもしはおこのみでも。」　客「なんでも美しい所がいい。」　女「にぎやかでござりますから、いい子どもしは皆きれました。お氣の毒だねえ。」　船頭「はやく聞いて来ねえな。」　女「はおりしでも呼ばうかねえ。」　客「ナァニ、となりの三絃を、からかみごしに聞いてゐるが、いきなものさ。」ト、いふゆゑ、をんなは、このきやくをやすくふんでよせ場へ行く。はじまりはあたまからしれ、あとにて船どうとくだらぬりくつをいひあふ。

客「變ちきなばんだぜ。」　船頭「ぜんていおめへさんが悪うございやす。障子の二三枚もふみ折んなすつて、みんなにあんなに骨ををらしてさわがせなさる。あそこの内へ氣の毒でならねえ。やつぱりきけんを直して、曾蘇にお出でなはればいいに。やけをおこして、こつちへかけ出して来なはつた所が、土地違ひだから、曾蘇からあやまりにやアこず。こつちぢやア初會なり、よかアしやせん。むだといふもんでございますわ。」　客「あいつらは、おれがかけ出した時、はだしでおつかけて出て、とめさうなもんぢやァねえか。畫仕事をしておいても、遅くいつたから、暮迎へをかける事アねえ、アノ女郎も亦ぬすみを賣りやアがる事はねえ。」　船頭「そりやァおめへさん、ねつから分らねえ、ぬすみといふもんぢやァござりやせん。曾蘇はふせだから、まはしをとりやす。暮迎へはあたりめへさ。所詮そのことをこつちへ来ていつた所が、初まりやせんから。恰好のわるい。」　客「そゝつぎぢやアおれもあかるいよ。先づとつつきのよろ地屋、かつ葉屋、うは島、さはら屋、釣屋、花村、こんだの新見世まで、一度づゝはみんな上つた。表神樂へ来るには、畫はむかう裏を通りぬける。夜ははさみ横町へあがる。茶屋にさしがあれば、大ろぢを廻ると云ふ事まで知つてるらァサ。」　船頭「紙くづひろひか、木ひろひを見るやうな事を云ひなさらァ。わるい酒だ。」ト、此の客なにか云ひさうにする所へ、「ちつとおすひなはいまし、おめへどうも見たやうだよ。」女、吸物を二ぜん重ねて持つて来り、船頭「ばくれんん船頭だからそのはずさ。こつちも檜のあづかり

處が出來て、船頭のほねが折れねえでいいよ。」ト すこし話の所へ、女郎、出か「お丸どん。」女「お出でなはいまし。」ト、いふをきつかけに見通しへ通る。尤もしくた玉出るしゆをかせぐ女郎にて、耳のねからまくらだこのはげた大年増なり。壁をこすつて通り、遠くへ坐り、ぶにんさうにたゝみをひたひで見つめて居る。女「ハイおさかづき。」ト、女郎はもぎだうにひとさしゆびでさかづきをちよつとはねかへしたばかり。つまらぬゆゑ、船頭「おいそぎだから、すぐに牀へやりまうしねえ。」ト、いふ故、女郎はつんとしてたつ。客、子供も「アノとなりの客は、鍵袋をぢやらつかしてさわぐが、どこの伴頭だ、ていさいらしい。鍵袋が見えになりやァ、越後屋、白木の伴頭は、馬につけてあるかァ。」女「こつちらでございますよ。」ト、先に立つて、煙草盆を持つて牀へつれ行く。尤も玉をさげぬ内は子供を廻さず。○客かはさんどのしたべらから、ありぎり南一をなげいだす。船頭「コウおつとめ。」女「おたまさんの厭みにて、この頃はやるばかに長き枚締のきせるづゝをねまき帯にして、へはさみ、たゝんであるしまぐんないの夜著の袖に入れてある、あづち枕を二つ出してならべ、たんの札をよく見ておく。是れはたつた一度買つた女郎を、はなしの種にする氣なり。傍輩女郎「となりはお玉とかいてあるゆなしがあるよ。」傍輩「いつてもよしか。」ト、こちの牀へくる。伴頭傍輩「あてて見せよう。隱居さんだらうが。モシなまゑひさん、じぶくりさん、じぶくり三年きやく八人ツサ。」ト、伴頭の鼻の孔へアックシヤミ。」女郎「アイモシたばこ。」ト、あいた口へいれてやり、すひつけたけむを屏風のすみ綿の布袋へ吹きかけながら、女郎「おたまさん、お前買込みか。」傍輩「ナァニ、あいてけへると、すぐにこつちへ初會に出たのさ。とまりつぱうだらう、はやくけへしていよ。」ト、小伴頭「お玉ばう、呑まねえか。」傍輩「アイサ、のむから今夜わつちをたいこにかつて、寢かしておくんなせいしよ。ヨウ〳〵。」ト、耳を女郎「そりやァさうと、モウ祭だなう。つれえよ。」傍輩「おめへなざァいい。かういふをぢさんを持つて居るから。」女郎「どうだか知れてこそ。おめへ仕まひは銀介さんか。」傍輩「マァ聞きねえ。その銀介さまは、チヤンとかぶつたさうだわな。」女郎「ほんにかはいさうだなう。」傍輩「是れにやァわつちも、血道をあけたなァ、取りいい客で目鼻をあけてすることはしてくれたわな。それだからいつそをしいよ。そんなに遣ひすごしもねえさうだが、傍輩の内に胸氣ものがあつて、ついしつぽが出たとよ。」女郎「あんまり足がちか過ぎたからだの。そんならカウト、せんど一座ァした金兵衛樣とやらか。」傍輩「ナァニ、ありやァおへねえすつほかしなお客だわな。せんどの晩恐ろしくいやみをいつてけへつてから、ふつつり來ねえわな。さうでもねえとおもつて、舟宿まであやまつて手紙を出してやだが、わかつてはゐるのさ。手紙をやつたら、返事に承知したといつてよこしたと思ひなせいし。女郎「フウそりやァ惡いなう。」傍輩「それだがの、このごろ五六度くるお客があるのさ。チトやかましこん夜あたり來るはずさ。」女郎「ソリヤァ、それでもおめへは心あてがあつてうらやましいよ。わたいらはとんだ苦しいわな。ソレあの山さん、男はよしもずゐぶんよくしておいたのさ。こつちへ出る時分からのなじみと云ふもんで、ソレ心安だてをして

ついしくじつたと思ひなせいし。このごろぢやァ福清から出る。ソレ上方の新子の子を、折ふし來てはよぶさうさ。わつちやァしみしんじつ腹が立つて、思ひだすと泣き出しさうだよ。それからの、インニヤもう云ひやすめえ。あとくさらしだ。」伴頭「何又うぬがやうな狼に。」女郎「ムウ、お前にいやァしねえ。だまつてゐなせいし。」ト股をつめり上げながら、「といふものだから、はかなく仕舞ひでもなけりやァ外聞も悪し、冬牀も中の上にしても、しかへねえけりやァならず、いつそ生恥をさらさうより、死にていわよ。どうせ此の祭にやァひどい法を出さねえけりや、ならねえといふもんだ。」伴頭「白木稻荷の狐が、しやくがおこつたとさ。」ト、伴頭心の内では、かけるなとをかしく思へど、流石不便なれば、からもしてやらうと、むなざん用をしながら、いびきのこわいろ。傍輩「オヤあつかましい、たぬきさんだよ。モシおもてさんがいつそ氣をもんでゐなはるから、夜札をはつてやんなせいし。マァうんといひなせいし〳〵。」ト、こそぐる。伴頭「八まんの橋のやうに、みづけのねえものは厭だ。」女郎「オヤきついしやれさ。」傍輩「いいしやれてのふりをして。」ト、どうとせなかを一つおもふさまくらはして立ちのきながら、「アイたんとさましておあんなせいし。おもてさんおやすみ。」ト、出て手前の牀へはひる。客は寂しく待ちかねてはらを立て、帯を締めかへて出かかるゆゑ、傍輩「はやいねえ。」ト、口ではいへどおくり出す故、客はとめられようとおもつたあてがちがつて、牀の理窟もなくぐにやら〳〵とかへる。伴頭「おれものだよなう。」女郎「アイサ、そのはずさ。アノ子なざァ手があると云ふもんだからね。」伴頭「お玉ははたらきもまんざらぢやァねえ。」女郎「ヘエイほんにか、よかつたねえ。」伴頭「どこのかものがひきまゆを、びんと一の鳥居の冠木のやうに、八の字なりにしてかんがへてゐるやつさ。いいきびだ。」ト、五十貫目もする輕石で、こすつたかゝとをもつて來て、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、少し身もんだいをすれど、平氣にて、女郎「もしさつきのことわえ。」伴頭「なんのこつた。」女郎「何をさ。」伴頭「馬鹿ァいへ。此のふけいきにいやだ。」女郎「いやだぢやァねえよう。ヨウ〳〵。」ト、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇。伴頭「おへねえきちげいだ。」女郎「そんならばいい。ふけいきな。」ト、ぷんとすねてあふむきになる。〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇。伴頭「しやくがおしてやらうか。」ト、〇〇〇〇〇〇〇。女郎「なんだかいつそ悲しいよ。」ト、またうつむきになりて、ひたひをふとんへおしつけ、はなごゑにてなくまね。伴頭「いつそくたばつてしまへばいい。コウこつちをむけ。」女郎「アイサ、むくから今夜おいそれと、きげんよくいつて、おちつかせて寐かしなせいしな。」伴頭「そんなら先づウンとさへいへばいいか。」女郎「エ、モにくいなう。」ト、伴頭の〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇。見こほしにて聲色「金がなければなんのいなう。トッテッツ、ツントン。」

傳　一夜に五十兩つかふも、二朱でしまふも遊びなれど、右兩人の取扱ひを見るべし。この伴頭はひふきのさうぢしたり、そろばんであたまくらはされたなりあがり故、やはらかなやうでしんねりつよく、いぢが悪く、女郎の身には取りにくき客なれども、げいしやなどは嬉しがり、娘分や女が心安だてをして、今からよぶと五ッむかへになるからむだだよ、まつてとぼしてからよび

やせうなどといふ、勘定高いことが承知かと思ふと、いいやうにされることがあるなり。又右の獨り遊びのごとく、南一許りでは茶屋と子ども屋と山割で玉をおとすと、損のゆくものなれば、舟宿もきのどくがつて、はおりの一つもすゝめたがるなり。且表神樂は、「一華表」に委しければ買つて見るべし。曾蘇次の普請のよきことは後篇にのする。

第三齣

○和歌町の迎へと棊橋の送りといづれ

舟宿河竹の亭主千ごばんじまのどてらの下に、てつぱうしぼりのゆかたを著、だららくなるこしらへにて、みせばなにあぐらをかき、ひげぬきながら、かんばんかきの與惣兵衞とはなす。亭主「二八と大蒲燒は、おめへのかいたのでなくちやア、あかるくねえやうだ。」與惣兵衞「山奥屋のあんどんばかりは、紅葉と牡丹があるから、わたしがかきやせん。」亭主「かんばんがくすぼつてると氣ざサ。お梶、だいを五十六文。」舟やどのあんどんは、張りかへて五十六文が定直段なり。○女房おかぢは、つとめあげく娘分となり、座敷をして居るとき、色でもつた女房ゆゑ、たがひにやきもちぶかく夫婦喧嘩とやきしやうがは、いつも茶づけのさいなり。○火繩賣、かど口から、「おや方しめへだ。おいてきやせうか。」ていしゅ「まだあつたよ。ぢいさん、ぬしもひさしいものだなう。茶を呑んでいきねえ。」此のおやぢはひとりで、江戸ぢうの舟やどをかぶにして賣り歩く。女房「おらん内の千さんのやうななまけてはねえよ。若イ衆がいそがしいなら、ちつと目はしをきかせて、かんてらでもさうぢをしておきなさればいい。」亭主「てめへこそ物前だといふに、三味せんばかりかじつてゐらア。おたふくめ。コウ帳は附けたか。」女房「たくあんと小遣帳は、つけたこともなくつて。」ト、いふ所へ古市場の茶やの若者、かけ取りながらあやまりに寄り、「をとゝひのばん、こつちらの若い衆がお客をつれ申して、遲くて戸をたゝきなさいやしたが、聞きちがへてお座敷がないと申しまして、跡で帳場でもおかみさんが、氣の毒がつてをります。よろしく」女房「ナアンサ、かつてを知らねえ船頭をやつたからの。」ト、客へ見せる判とり帳を出す。若い者は金の請取をしてかへる。又表神樂の茶やのばんとう女きたるを、亭主「どうだ掛か。道樂もんの内に、さつまいもと錢金はねえわ。」女「オヤ〳〵。おかみさん、又此の御手紙を。」ト、出すをとつて、大森細工の狀差に、したゝかある中へさす。深川では文と云はず手紙と云ふ。女房「あだにつくりかけて出たの。カウト、小介さんのきてゐるよ。大さんはかぶつてゐなさるさうだから、ちつと待ちねえ。」女「ハイおたのん申します。」ト、右の金を請取つて歸る。ていしゅ「大きなけつだ。」こゝに和歌町の女郎お仲と云ふは、あだに人がらよく、美しきことはお照、お縫に似て、お作が達引あり、尤も色客かけがたまりて、茶やにせかれて居るゆゑ、ないしよで舟宿へあひに來てゐる。客の内を見せにやつて待つてゐる内、かべにもたれてしよんぼりと、じゆばんのぬきえりをながめながら、何やら物おもひなるそのすがた、わか町でのたて者とみえたり。ほどなく歸つて來る。船頭「モシエ、長さんはお見えなさいやせん。」女房「こんたア氣の利かねえ。帳合をしてゐなさるだらう。お見世のめへをあつちへいつたりこつちへいつたりして、よび出し申せばいいに。」女郎「ぜつぴあひまうさねえけりやア、はなしえひがわからねえ。惡いねえ。ふさぎやす。コウお前の、憚りだがの、酒をちよつととつてくんねえ。」ト、帶へ挾んでゐる紙入から一角を出すを、女房「ナニサ、長さんにつけておきやすわな。」女郎「きなさりもしねえで、それぢやア惡うごぜいす。

モシをぢさん、若い衆を相手に、一つ呑んでもよからうねえ。」ト、扨かの色男といふは三十二三にて、女んにて、勿論男もいきにて、よき商人屋のかぶしきをあふりつけたお仲ゆゑ、來たと聞いてとびたつてじらしておき、跡からそつときて上り、中仕切の葭すだれの陰へはひる。女郎もほれた男の顏見ればにことなり、「とんだばけ物が來やしたらうネイ。」客「客まはりのついでがけか。」女房「アレあんなことをおつしやるよ。せつかくあひに來なせいしたものを。じやけんだねえ。」女郎、跡をいひさうにして、遠慮していはんがへながら、小ねこを膝へあげ、女房は二人の氣をかてどうこ火鉢でちやをはうじる。○亭主、ひざつモシ此のかな物をごらうじやし、心と云ふ字に錠前をおろした所、仕出しださうで、堀の内樣の額に も上つてござりやすが、ぴんと心に錠前おろしサ、通り者の女房と、三味せん箱の錠前のやうに、しまりがなくてはいけやせん。これがつゞはたちのお客ではなしさ。お前さんがたが料簡のねえ事をなさるもんでもねえが、このごろのやうに氣まぐれなさつちやァ、茶屋子ども屋でもあぶながります。内の御用もかきなさるやうでは、第一世間がすみやせん。それだからさんばしの霜で、すべつたことのねえきもつぶしや、屋根舟で小便をすることを知らねえやほでえへは、わるく評判をいたしやすのさ。」ト、はひふ「おなかさんもまうし悪いこつたが、主人のからだでござせいす。めつたな氣を出しなつちやァ濟みやせん。おふたりながらるもりの道行ぢやァあるめいし、くつつきたがるもあこぎは悪い。細く長くなさりやし。モシわたいらがしよたいで金をかけたものは、太神宮樣のお棚と總銅子ば

かりだが、長さんの内の鐵漿壺には、とんだ金がかゝるぞ、トまじをいふでもねえス。いい所へ酒が來た。おかんをしや。」女房「サア、、二階へお出でなさいまし。」客「のろくさうしてもゐられめえ。」女房「夫れでもちつとは、おはなしもあるもんだから。サア、モシイ。」ト、煙管たばこ入をもつて、色男をんじやう、つりどこいきにしつらへ、牀をとつて屏風引廻してあり。女郎はてうづをしてから、黒ぬりに定もんをおいたうぬぼれかゞみを出し、懐中おしろいうつすら顏を直して二かいへあがる。あとから内の船頭二人、さけさかなをもつてあがり、ミしまの船頭「只今舟のあかをけへてめりました。」いさみの船頭「こゝの内の出し物は、どうでござります」女郎「あれがとこへでもいきな。」ト、二人へ一つ宛祝儀を出す。

した。」客「なぜに戸橋をあひるといふの。」いさみ「一百のことをガアと申します。ガアを二つで一本になりますから、泊りが出來ます。ガア〳〵といふものは、家鴨より外ござりません。そこでやらうがのろくなつて、八もんじやの湯へはひりの、葉橋の傳が牀でかづらをつけて、わうらい橋をちよんと渡りの、つけうらにめゐりやした。あそこで遊ぶにやァ、そばをかつて中の字をきめねえければ、お客らしうござりやせん。コレエイ、なんぼうぬらが羽ねつぱたきをしても、おいらが足もとへ及びもねえといひましたら、はだえひな女で、そんな事をいはずと、家鴨の玉子でもうむめえもんぢやァねえ。〇〇〇〇もつとこつちへよれとか、ソレなんとか。」ともしま「ソレたばこがこほれらァ。てめへせつこみきつてゐるぜ。おへねえ氣ざもんだぜ。」女郎「あだなきせるづゝだねえ。」ともしま「ひぢりめんの

きせるづゝを持つ風か。氣のつえゝ。」いさみ「あれに貰つたのよ。やほからぬおきせるづゝの。」ト、ふさしま「おぢいなざァ、女と廣い帶はきらひさ、そのかはり商賣にはあかるうござぃす。此のお客は舟蟲のよごしもくつて見たから、枕木だこが出來てる。此のお客はこべりへ手を出して、渡舟でしからぬたなどいふ事は、乘るめへでぢきさま知れやす。夫れ乘りつけねえ客衆は、もやつてあるよその船を、あゆびにしてつたはるに、はき物をぬぎなさいやせん。さんばしのあがりおりや、みよしへ手をかけて飛びこむ身などが、ぶまにぶる〳〵しやす。又乘りつけたおかたは、豬牙で檜垣を大廻しにのつきるとき、つつかけてぶち上けたり、寒かつたりすると、前のうすべりをとつてかけなさる。汐さきとそこりとに、梶をきかしてかしがねえやうにしなさるから、大きに舟も早うござぃやす。やねぶねのすだれも、やほにまきあけずと、手輕く屋根へはふりあけなさるのさ。」客「稻荷がしへつけて、ろぐひを買ふなども穴だらう。」いさみ「檀那、何とかおつしやる。」ときしま「時にお座敷がなけえ。チツト屏風をひいてめるりませう。」いさみ「あつち氣どりに、硯蓋はおまくらもとへおかう。」女郎「コレサ、そこの戸をたつていつてくんなよ。」ときしま「ぴつしやりとかえ。」いさみ「とんだにつしよくだよ。」ト、兩人氣を惡くして下へおりる。あとはうすぐらくび　客「何しに來た。」女郎「何しにきたえ。金ができたから持つて來やうぶの中に、しつぽりとさしむかひ。たのさ。」客「いらねえわ。うぬが金を。」ト、いひさま何かふつとかんしやくを起して、枕をとつてせなかへなげつけ、ゆひたてのてんじんの髮をはりくづして、足でけたふす。女

房は、この物おとにおどろいて下からかけあがつてきたり、「なんだえ。オヤお仲さん、どうしたのだエ。長さん、見てお出でなさる事はござえせん。」女郎「何もいはずといいわな、あとでわかりやす。」女房「そんな髮をしてかへられるものか。ちよつとわたしがむすんでおかう。」ト、たもとつて髮をほごし、切つてある前髮の中を兩手で掻きながら、女房「おそろしいふけだよ。」女郎「いつそのほせるからね。」女房「ア、〳〵、お前樣がたは困つたもんだぞ。」ト、すき櫛で「呆れてものがいはれねえ。」女郎「髮にくせがつきやしたよ。」女房「ホンニ、つきものでもしてるなさるだらう。」ト、がくや結び「これでもいいかえ。」女郎「はゞかりだねえ。」ト、たばつけてやる。女房「をしいうしろざしを折んなすつた。」女郎、かぶみを見て、ほゝべたのすこしあかく「ひり〳〵するよ。」女房「それでも疵がつかねえでよかつた。するきやうな。」女郎「わたいは氣ちがひじみて見えるだらうねえ。」女房「どうともこれから御勝手しだいさ。」ト、あぶら手をぶら來なすつたことを、けふこつちで聞きやしたが、わつちをなんといつて出さなんだえ。」客「病氣だといつてよ。そんなら用もあるから、けいしやばかりで歸らうとかへるふりで、そつと隱れて三軒ながらにはひつたが、『病氣でひつこんで居なせいす。』と、どこも同じさうばだから、名代氣どりの子をよんで、座敷ばかりで直に絲藏が所へよつて、譯をはなして見番へ聞きにいつて貰つたら、これも、『病氣

にちけひねえ。』といふからの、よもや絲藏がいふ事に、おれには謊もつくめいし、若しほんの内へでもいつたかと思つたが、おふくろの病氣もぶさたにしておいたからいき憎し、とんだつまらねえ目にあつて歸つた。きのふぜひ〳〵こいといふ手紙を出して、よくつりよせやァがつたな。」女郎「それで分りやした。それぢやァ腹の立ちなさるも尤もだ。かういふわけさ。きつと今夜おまへが來なはるはずだからと、賴んで通しておいた理窟さ。それにチヤントあいつらは水をさしやァがつた。わつちやァゆうべひまで、内に待つて居やしたよ。」客「ウ、、それでよめた。又お針のむね氣だらう。こんだの下まはしも、わか町はうはまはし下まはしとあり。ゆだんがならねえぜ。」女郎「聞けば聞くほど口惜しくつてなりやせんっ。絲藏さんはけいしや衆のこつたから、中にたつてし憎いこともござせいしよが、なんぼ茶屋に居ればとて、あそこの女どもはあんまりけんきんな奴らでござせいすわな。一頃わつちが心づけをしてやる時分は、オハイハイをしやァがつてから。」客「いいわ。おれが都合がちつとなほれば、みんなにやつておいて一番あらつて見る。」女郎「アノあまめらは。」ト、うつくしい顏であくたい混りで、みす紙「これをまければ四枚ぐらゐ總花は四枚なり。」は出來やす。さうしてからあそこの内へ、もういきなさんな。わたいも茶屋一軒はひりこまねえぶんのことさ。」客「さうした所が、おれが顏が惡くうれてゐるといふもんだから、外で手めへは出すめえよ。」女郎「こつちへあひに來やすわな。いかにしてもあそこのやつらが

憎うござせいす。つひぞ世話をやかして、外の茶屋へかけ出しなすつた事もなしサ。是れまで勘定日までには、きつと拂つておきなすつたものを、なんの一トもの前やふたもの前おくれたとて、にんさうする事はねえ。をがんでゐやァがつたがいい。」客「それはこつちの愚癡と云ふものだ。まだ舟宿が通りのいい千といふもので、うけこんでゐればこそ、帳場では不承知な筈だ。」女郎「ほんにねえ。舟宿衆といふものは、お爲ごかし許りいふもんでございますが、こつちの内では、そろつていやみがごぜいせん。けふおまへさんから貰つたぶんにして、お梶さんに祝儀をやつていきやすから、五兩ねだれたとかなんとか、かつかうよく云つておきなせい。わつちやァ是れから歸つて、年季を入れて、なんでも檀那にかりやすから、濟みすましはしなせいし。」客「さう〳〵手前の世話にばかりなつても、おれは本望にはおもはねえ。手めへそのいぢつぱりな氣が、身のふしやはせといふものだ。」女郎「なんの前じりをうる身で、出世しようなどといふ氣は夢さらござせいせん。わつちやァござせいすなら、もしやの末までかなも、すいた事なら本望だと思つてをりやす。可哀さうだと思ひなせいすなら、もしやの末までかなず、あきてくんなせいすなえ。」客「今さらぐちを云ふでもねえが、男見番でも女見番でも、みんなに評判された此のおれが、思へばはかなくなりはなつたぞ。」女郎「ほんにお前樣の氣まへでは、さぞしがなくも思ひなさらうが、なまけたとつて色戀がなるものかな。」ト、男の膝にとり客「ア、、もう〳〵」ついて忍びなき。

ふさぎはやめにしや。」　女郎「モシ、こつちでかうして逢ふも、氣がかはつていいねえ。」　客「それはさうと、傳閒町の客はよくしておけばいい。」　女郎「此の相著はこしらへて貰ひやした。お前の下著にちやうどいい。おいて行くから著てくんなせいし。」　客「著て出ざア、傳閒町のがやかましからう。舟で歸るに風でもひいちやァ惡い。今日でなくてもいいよ。」　女郎「ナニサ、節句には丁字茶の方をうけやすからいいよ。」ト、黑じゆすの帶をといて　客「てめへマア、怪しからずやせたぞ。そしてまぶちがまつさをだよ。」　女郎「ホンニおめへさんも、いつそ顏がむくんでゐやす。氣がもめても無理酒はよしてもくんなせいしえ。」　客「かう苦勞をしちやァ、氣でも違ふか死ぬだらうよ。なぜおれはこんなにつまらなくなつた知らん。」　女郎「今さら氣でもかはんなさると、わたいはほつてもとゐころさねえぢやァおかねえによ。」ト、はぎしりをしてぐつと　ゴオン。亭主「汐さきだから降らねばいいが。」

傳　世話になりたる客か色客に、ないしよで舟宿へ逢ひにくる事、實に蝶中の祕なり。和歌町の子どもならば、客を茶屋へつれて行くにも、知らせずして來ては、河岸から先へあがり、見番へ一寸寄つて届ける。その客は茶屋へあがつて、知らぬ顏で口をかけるが祕事なり。葉橋の女郎は舟で通ると、茶屋の女どもが河岸に出てゐて、見られては惡き故、曾崎の汐見橋へ舟を廻してあがり、舟橋まで送つておいて、歸つた狀遣ひなどといつしよに、見番へ顏出しをするなり。尤もはれての送り迎へ、又は客が舟宿へよびにやるにも、茶屋の女が一人ついて來て、泊つてゐるなり、其の時は舟へ送物をいれる。但し送り迎へは葉橋、和歌町に限る。夏は舟へ日傘をいれ、冬はおこそ頭巾、足袋をはくなど、氣がかはりて舟中趣あれども、是れは拾遺にあらはす。葉橋はくはしく意妓口にのべたれば、參考すべし。さてよくあひほれのじつくらべといふは、右のごとく女郎の方から、苦しい金を工面して、せつかくあひに來たを不足にされて、ゆひたての髮までむしられ、かうがいもおつぺしより、ぶちたゝかれたがけつく嬉しく樂しみになり、客も引にひかれず人にも話されず、馬鹿々々しくは思へど、我が身で我が身のしんまくが出來かねて、つひに株敷と共になけ出してしまふ。嗚呼檜木舞臺をふんで、すれからしたる身の果てに、此の段を悟るべしと云々。

玉の蝶　畢

大抵御覽序

東西々々、是れなるは當世花のお江戸の三景、大抵御覽あられませう。最初かき置きましたるは、三橋亭と名に高き、今をさかりの今戸のおり殿、次なるは中洲の景色、見物、芝居、あづま風呂、すみ屋、四季庵、水茶屋のかけ行燈に火を點じますれば、夜分のていとかはりまする。次なるは高田水いなりに、落髪をうづめてきづきたる、三千丈の新富士山、ちやうど合はせて三箇の勝地、相違あらざる自筆の實景、首尾ようまゐりますならば、作者は喜悦の思ひをのべ、本屋は多くの金をのべ、おば〻氣をのべ腰をのべ、ヨウイのばしてにならしやんしよと、口三味線にのするはたぞ。朱樂館公の御館にて、味噌鹽の世話までやく四方赤良。お釜の前にどつさりと序す。

似山往來

日來避二暑河朔一侍之刻、浮二舟三叉江上一、曳二杖待乳山頭一、藥湯掛湯瀧十尺、織殿高樓庭二坪、是彼相考、西郊新富士、今度無二出來一焉、貴下翺二翔書肆際一、滅多爲レ忙、拙者爲二貴下一敢憂レ之、有二大抵御覽一而、可レ洗二濯詩一、仍遂二吹噓一侍、頓首謹言。

廼時

進上　書林某兵衞殿

返翰しばらくこゝに暑す。

朱樂宿寐

大抵御覽

朱樂館主人

こゝに漢張軒博望といへる俳諧の宗匠あり、このんで諸國行脚をなし、こゝと住居はもとより定めず、此の頃江戸へと志して、殼腹抱へてはる〳〵と、下つふさの國庵崎にいたる。時分もよしと葛西太郎、暫くこゝにやすらひて、鯉の羹飽くまでくらひ、一杯のんだる機嫌にまかせ、鬢があつたら四五日は、髮ゆふ世話もあるまいと、呟きながら都鳥、眞赤に成つて箸と足、いざことと椀をつき出して、河原の方へぞ立ち出づる。藜の杖に笠木ばかり、こゝで晉子が雫を思ひ出して遙拜し、此の里人を呼びかけて、名所々々を尋ぬれば、こゝは牛島牛の御前、あちらに白髭こちらの森、岸へそひしは梅若なりと、時刻うつせばわたし守「もしその、サアとく〳〵。」とせたぐれば、さらばと乘りて向うへ上り、また河づらをふり返りて「水にうかべるあの鳥の、名をば何ぞ。」と尋ぬれば、面倒さうに渡守「何であらうとうつちやッて、沖の鷗で候。」と、言ひ捨てにして漕ぎ戻せば、これさ〳〵と呼び戻す。よし鷗とも千鳥足、蹴つまづいたる河原の

小石、これをとりあけつくゞと見れば、是れにぞ足を縛石、青石にして白き筋、くるりと廻る二筋は、「扨異な石ぢや此の石を、硯にしたらばよからう。」と、捻り廻せば側より、最前一緒に乘合の、山伏ちよつとさつ首さし出して、乾兌離震巽かんがへれば、博望大きによろこびて、「何樣これは故ある石、御考へ下さるべし。」と、頭陀より出す十二銅、首ひねつてぞ居たりける。しばらくあつてかの修驗者、横手をうつて、「これは不思議、こゝらの近所に織殿の、正しく有ると覺えて候。石をとつくり見ますれば、河東美人天帝女、機のおもしに置きたる石なり。機織女に賜はらんと、天より是れを落し給ふに、見當違つて此の河原に、落ちたる物と覺えたり。」と、當りも有り又見通しの法印、暇乞して別れゆく。博望あとにて思ふやう、長の旅行に持ち歩行くも、さりとは厄介捨てようより、七夕つめのはむきもよし、これを織殿へ届けんと、あつちこつちと尋ねつゝ、待乳の山へ至りければ、夕こえくればあやはとり、きりはたり〳〵と音する家を、立寄つてうかゞひ見れば、門たかく高樓かけはしはなれ座敷、玄關構への眞正面、三橋亭といふ額を、高くかけしは故あるさま。おづ〳〵覗いて案内をこへば、「御上りなさい。」と内からいふ。ずつと二階へ通りければ、「これへ〳〵。」と案内し、跡から出るは浴衣に前垂、菓子など出してにこ〳〵と、お茶をと出す素手の白きは、翁心にも少し心をうごかせば、御吸物でも御膳でも、何でもかでもよりどつて、十九ばかりのほつとりもの、あたりを見れば天人の、おとしだねやら麗はしき、娘と一所に三絃箱、あそこに豐後こゝにめりやす、空に花ふり音樂きこゆ。段々座鋪を見物すれば、けに物干でも有りさうな所に、庭とは思ひもよらず、左へゆけば大きな洞穴、千尋の底に人聲あり、聲をしるべに下りゆけば、漸くあかるき所へいづる。「妾は御勝手大取込、お縫の道行見るやうなと、獨語して見あるけば、池の邊にたて出せし、座敷の數々滿座の客、江戸の豪華を感心して、表の方へ立ち出づれば、最初這入りし女關にあらず。五百機たてて織りなす織物、七夕つめもそこのけと、いはまほしけの風情なり。あふけば上にあやはとり、くれはとる手も手際なき手つき、けに手もたゆくぞ見えにける。博望こゝぞと懷より、最前の石とうでて、「これ天帝の御女、七夕つめの支機石とて、織をさゝふる石なるぞや。我諸國行脚の砌、槎に乘りて吹き流され、天の川原へいたりしが、天帝此の土のことを聞召さんと、いろ〳〵とはせ給ふにより、此の織殿の事までも、委しく申し上げければ、御感の餘り、『此の石を、重々と故郷へ持ち歸り、三橋亭へ届けよ。』と、石より重き仰せを蒙り、則ちこれを届くるなり。石の形は人間に等しく、めぐりし筋は帶に似たり。筋ある帶地を織り出して、三橋織と名づけなば、日あらずして巨萬を積まん、努々うたがひめさるゝな。」と、辯舌盡してかたりければ、此の家のあづかりなるべしと見えける男罷り出て、ねんごろに一禮なし、いろ〳〵款待し種々いたはり、「今夜一宿あるべし。」と、ひたすらいへ

ど博望は、かたく辭退に及びければ、それより舟にうちのせて、中洲のわたりへ送りける。これより段々三叉の涼み、吾妻風呂の有樣まで、詳しく歷覽なしければ、次に高田の富士の緣起、一見なしける兩所の由來、日記にとめたる趣を、則ち末にしるすにこそ。

千早ぶる神代のことにやありけん、朝和波夕波尊、新大橋の上より、鍋のぞきの樣に覗き給へば、淺草川の川下、三叉江の川上に一ツの洲あり。則ちこゝを中洲といふ。その洲雞卵のふは〳〵のごとし。尊大きなる銅杓子にて、これを掻き廻し給へば、忽ちふは〳〵凝りて新地となる。「扨廿さうなる地面かな。」と、朝和波尊のたまひければ、夕波尊曰く、「所の地祇に命じて、種々の食物を仕込ませて、たかまの腹のへつた時は、四季折々に天くだらん。」と宣ひしより、四季庵の生簀魚みちて躍り、すみやの乙女袖を飜へして招く。きん〳〵たる衆中は河洲にあがり、ぶき〳〵せぬ麥飯は丸屋でしこむ。唐和の卓子臺は四ツ足の數に入らず。魚飯の臺所は三まいにおろして料る。藤よしへ這入れば松源で送る。あちらが四こくの讃岐屋なれば、こちらは武藏川越屋。樂庵の座敷ふさがれば、福壽は門さして賣切れたり。今を日の出屋だん〳〵福富、松は葉かへぬ常磐屋に、夢に見てさへ三茄子や、丹波やかみ樣いそがしく、常陸や大酒どや〳〵來る。その足もとはよろ萬屋、どんぶり大鉢臺の物、大盡舞を見さいなと、松が門のどつさくさ。いく萬年屋家々の、榮えはしもなら茶見世、さだめて神慮に叶ふべし。さればよ夏も半ば過ぎ、此さを凌がんと、釣をたれてぞ居たりける。

尊御夫婦、この翁をつく〳〵と見給ふに、白髮亂れておごの如し。唯口許りむぐ〳〵と、生きて居るとは知られける。尊、翁の膝元へよらせたまひ、「されば候此の翁、餘りの長生に、年もいくつか忘れて候。しかし蒼海變じて桑田となり、中洲變じて新地となる事、凡そ十四五度までは覺えたり。」と申しければ、尊又々背中をたゝき、「いつの神代の生まれぞ。」とはせ給へば、翁がいふ、「亂髮七代老爺五代、是れ皆翁が出生後なり。翁固より夏まけすれば、此の江の邊に數萬年、住居をなして候。」と、口をむぐ〳〵いひければ、成程夏は川邊の事、こつちで許り涼まずと、八百萬の神々も、年々爰ですゞしめんと、神樂の歌をぞ作り給ふ。神樂うた。

春はうたゝねの氣をのべ紙で、ふいて木枕氣を付けてさせてやろ。ヨオ、イさせてにならしやんせよ。夏は涼みに屋船をつけて、うへへ乘るなら棹でつきや、楫をとりや、ヨオ、イとりてにならしやんせよ。

秋は月見に約束しても、人にまたせてまじ〳〵と、うそをつく。ヨオ、イつきてにならしやんせよ。冬はゆきの夜さぞさむかろと、いくど火鉢を氣をつけて、出しかける。ヨオ、イ出してにならしやんせよ。

とうたひかなでしより、年々ふえし乙女子は、

千代吉　歌吉　若吉　おぬひ　おてる　佐野吉　おかの　鶴次　しげ吉　豊吉
吉次　政吉　伊勢吉　美濃吉　おぎん　菊次　かね吉　大吉　宮吉　おます
おたみ　富吉　おゆき　小吉　此吉　梅吉　初吉なり。　藤本堂　十寸見堂

これ天乙女の世話やくなり。ますみを號して辰公といふ。されど神慮に叶ひしは、ほつとり娘のお幸なり。これなん常磐津文字繼といふ。神樂を奏す乙女子の親玉といひ、常磐津のゆかりによつて、玉松亭といふ。舟か〳〵と呼びかけるは、

玉松亭　布袋屋　八幡屋　海老屋　銚子屋　三枡屋　相模屋　藤本屋　丁子屋

それより五月二十八日、川邊に出茶屋建て竝べて、此の川面を見おろせば、吉野兵庫に川一高尾、夷一川漕ぎ竝べて、淨瑠璃、長うた、こわいろ、をどり、人形づかひ、猿廻し、數萬の提灯綺羅星の如し。玉屋、鍵屋の玉火、流星天をも衝きぬく風情なり。でんがく、しぎやき、蒲燒酒、西瓜の立ちうり、瓜、夏桃、あなたこなたへ漕ぎちがふ。さてまた陸には砂場そば、にしき團子に大佛餅、いくよ餅、蛇目鮓、ゆで枝大豆に唐もろこし、錐のたてどもなかりけり。うしろに見ゆる大のほりは、大坂下り早崎京之助、蜜柑といへる人間か鳥かわからぬ上竿奴あり。こなたは鶴一身ぶりこわいろ、小供狂言、硝子細工、其の外種々の見物に、諸人の足をぞとゞめける。汀の出茶やは九十三軒、

伏見屋　小松屋　山吹　夷屋　備後屋　二葉　太田屋　若松屋　丁子屋　いせ屋
奥州屋　桐屋　松よし　大和屋　若葉屋　上總屋　長崎　藤よし　扇屋　成瀨屋
枡屋　伊豆屋　相模屋　さゞ波　松坂屋　鶴川屋　明石や　笹屋　湊屋　三河屋
桔梗屋　大村屋　蔦屋　菊本屋　千年屋　大和屋　福富屋　宮城野　市川や　駿河屋
丸屋　小島屋　高麗屋　紀伊國や　丁子屋　武藏や　幾田屋　若菜や　相模屋　龜甲屋
さゞ波屋　扇屋　鶴屋　松よし　大和屋　若菜や　若松屋　いせや　增兒屋　八ッ藤
越前屋　奥州屋　桐屋　森川屋　上總屋　今村屋　山本屋　平野屋　相模や　をじまや
豊竹屋　金井屋　龜屋　中村屋　いせや　加し浦や　いね田屋　ことぶき　八橋
伊豆屋　松村屋　梅松　松枝　小川屋　岡田屋　藤屋

毎日毎夜此の所で暑さをさくる、諸人の往來は盡きぬ此の繁花。さて又こゝに藥湯あり。名づけ

てあづま湯治といふ。これは此の頃此の所で陰神陽神、庭たゝきといふ鳥に、ひよんなることを習ひ給ひ、陰神大きくあつくなり、無性にのぼせ給ひければ、御のぼせを引下げんと、薬湯を以て御洗足つかひ給ひしことよりして、終に此の湯ぞ始まりける。そも〳〵此の薬湯のはじまりは、先祖は楽調経といふ唐人醫者、此の湯をやたらに浴びければ、百四十九歳をたもつたり。今又長崎梅見まで、段段家に傳来して、これを朝晩あびければ、ことしで九十八歳なり。これを世上へ廣めんと、たうとうこゝに風呂をしつらふ。保養湯は三夘、つほ風呂といひ、又清浄湯ともいふ。薬方は、

ゑんじゆの枝　にれの枝　くはの枝　もゝの枝　やなぎの枝

また痛所持病には、吾妻風呂にて浴するなり。一名黄帝のうり家風呂ともいふは、上り湯なし。その薬方は、

藿香　大黄　芍薬　縮沙　川芎　甘草　當歸　輕粉　莪朮　薫陸　升麻　茯苓　木香　良姜
滑石　沉香　防風　檳榔子　丁子　紅花　肉桂　人參小

それより按摩導引八ツ子の瀧、これ則ち上り湯なり。又みたらしの瀧といふあり。これは神風や御裳濯川の流れを汲みて、筧を以て是れを落す。これにて湯あがりの口を漱ぐ。又香ひをきかせてのほせを下げ、又若き女四五人居て、浴する人のとりあつかひをして、此の湯の講釋くはしくするなり。

尤も俗へ通ずるため、しかた噺にさせるがよし。いはれをきけば有り難しと、諸人此の湯を信ずるもの多し。よし又不慮に穢るゝとも、跡にて此の清浄湯にて清めるとは、さて氣のついたることどもなり。此の湯いく風呂はひらうが、晝の四ツからくるゝまで、勝手次第のことなれば、その引附の案内の茶屋、それ吸物よ肴よと、座敷へはこびつ下けつすれば、つい取落す吸物わん、三ツ椀菓子わんわん〳〵と、いふのはこれやえのころ島、ひたものさはる手にあし原、枝もさはらば落附きの、吸物好きな樂しみも、秋津すき〳〵蓼くふ蟲、蟲養ひの御保養には、こゝにまさつた事ぞなき、げにや昔もかかるためし、唐の帝の温泉宮、ちつとはそれにも似た物烏、烏のぎやうずるする樣に、ちよつと入つてはききめが見えず、湯めぐりならぬ水のほとり　めぐりめぐれる羣客は、又とたぐひは夏の遊び、偏に此の地にとゞめける。

東武城西高田のうま場の側に、長四郎といへる隱士あり。みづから郭臺駝に比して、種ゝ樹ことを以て業とす。少時より富士淺間を信じ奉りて、年ごとに夏秋兩度づゝ詣で侍りしが、既にして大先達と稱す。春秋つもりてこゝに七十、古來稀なる信者なり。年來此の山に攀づること五十五度。山の中腹を廻るを中道といふ。なべての先達中道をするもの稀なり。長四郎中道をすること三十餘度、時にふれて山の上、おどろ〳〵しうあれて、あらゆる行者ふるへをのゝくの刻も、大先達長四郎侍る

と、たからかに名乘れば、忽ち山おだやかに晴れわたりて、一點の雲なし。まことに淺間大ぼさちのこれや妙慮にかなへるなるべし。今や 志 千里にありといへども、心のほつする所のりをこえず。ただ鉢植を扣いて伏櫪をうたふ。さすれば杖をひくとも莽蒼に過ぎず。ことし安永八己亥のとし、近きわたり戸塚村稻荷山の別當寶善寺の境内に、淺間大菩薩を勸請せんと思ひたち、諸人の脫髮を爰に埋みて、二月三日より富士行者何がしらをはじめて、かたはらの山をきりたひらげ、その土を以て新規に山のかたちをきづく。それより老若男女を論ぜず、うぶごはふこにいたるまで、われもくと土をはこび、或は一もつこう或は二もつこう、又やごとなき姬御前も、紙につゝみてそれぐに、多少を論ぜず土持して、だんくつもる一簣の功、終に九仞の山となれり、山は八葉洞のごとし。駿河の富士に正寫し、山をなづけて賽芙蓉といふ。それより大江戸四里四方、我おとらじと寄進するは、石の鳥居に黑木の鳥居、石壇、垣離場、手洗鉢、其の外何くれそれぐに、皆人たのみをかけ、念佛聲のたえまはあらざりけり。麓、中腹、絕頂の社壇の經營、日あらずして既に成就なしければ、扨こそ五月二十八日、何がし院法印くれがし院の阿奢利、あまたの權者打ちよりて、山の開眼を終れば、新たにたてたる神樂堂、天津乙女もいそがしく、目のまひ足のふみ所も、しらゆふかけにくれ殘る、あかいはかまの柳ごし、神樂の太鼓度拍子は、いつもどんどとなるがよし。諸人の信心菩薩の妙慮、長四郎が本意とけさせ給ふ。ありがたしなどもいふばかりなし。山を領する御神には、中腹に小御嶽石尊大權現、麓に淺間大菩薩なり。そもくく淺間大ぼさつと申し奉るは、大山祇命の箱入御娘、よい子の木華開耶媛、こゝに跡たれたまふこと、みな人知れる所なり。まことや孝靈天王五年、近江國琵琶の湖、つい一夜子をはらみしより、駿河國の富士山、ひよつくりひよつと誕生せしも、今度の富士の出來事も、思ひまうけぬことなりかし。扨頂上は乾の峯、かゞやく日尊ふしをがみ、未勒が嶽の烏帽子岩、南無當來導師、どしくくく巖をふみならし、いさむ心の駒がたけ、聖德太子を安置せり。こなたの峯には毘盧舍那佛、旭の大黑藥師が嶽、心の塵も打拂ふ、不淨が嶽の不動堂、さいの河原の地藏尊、六道のつけに反る程な、險しき峯を踏みわけたる、役の行者の跡を尋ね、わけゆく山の其のかたちも、妙法蓮華經が嶽、その儘うつして富士詣で、貴賤男女の差別なく、行きかふ袖はみな月の、もちにふり袖つゞら笠、九折より嶮し山、汗をかく袖廣袖の、ひろい世界と申せども、こゝにや足のとまるそで。こなたにつらなる山のうへ、毘沙門堂の側に、牀几竝べし大和茶は、幾代ふる木の松のもと、枝は茂れど麥藁の、邪魔にはならぬ日よけなり。見わたせばむかうに目白、早稻田村、ながるゝ水は猪のかしら、末せきかねし關口の、瀧のしら絲音たえず。爰に簀の子を汲みたての、ひやつこく吹く涼風に、ばつたり暑さを忘るゝなり。

扨十五日より十八日まで、日夜をわかず羣集なし、みな人念ずるねぎごとの、偏に丹誠こり場より、落ちて流るゝ水茶やは、守宮が娘でもふりかけたやら、衆人愛敬これぞ柳のかげならねど、しばしと人のたち止るは、口で岩が根日でしら歯、此の場のしぎ焼やきたてを、持つてくる間に手をとれば、にくいおさん五田樂ぢやと、それから段々圍子のくしも、所替ればしなのそば、としも二八と知られける。池の汀のかけ行燈、蜘手にならべし腰かけは、心の駒下駄ふみならす、茶汲女の立姿、みれば三河の八橋なり。鄰は大ていひえの山、二十チ許りの中年增、鹽尻つきのしをらしく、名さへおふじといふなるべし。こんなおふじが唐土にもあろかと、はる〳〵來ぬる毛唐人は、徐福にあらぬ茶一ぷく。これなん不老富士の藥。茶がまの下にて燒きそめしは、誠や狂言かくや姫、父の翁にのませしより、かの郭橐駝に比したる翁、千萬年の齡を保ち、かの蓬萊を背負つてゐる、龜の甲より年の功、おいずしなずの藥をば、居ながら持藥に呑む料簡、是れをたゞとりの翁といふ。

此の冊子は、借金の山がすまひの老翁の畠水練、水邊の見た事もないよしなしごと。謊言は八百八百萬の、神代の遊びのことより、くちにまかせしあて仕まひ、ゆめ〳〵ほんにしたたまふことなかれ。

大抵御覽　終

新宿○學問序

紀南子○學問を著はして、雛妓に見せびらかす。雛妓是れを引つたくりて、突飛ばして逃ける。書肆またうしろから抱き付いて奪ふ。厥奇氏これを側より彫刻。さあ序をかけと予を來りてせがむ。其の聲耳邊の虻のごとし。さあ書きましよと起き直りて、筆をば採りはとつたれども、どう蕉葉に堪へずして、ぼく〳〵睡れば、つめつたり叩いたりして、やたらとせむる。なんの如才が御座らうと、ちよくらしつかり半分ほど序す。

例野外惚子書

新宿○學問

秩都紀南子著

發端

つら〳〵此の里の來由を尋ぬるに、野邊は果てなき武藏あぶみ、露ふみわけて絶間なく、甲斐路に通ふ旅人の、道の小休み晝休み、さしも怪しの草のまろ家、やう〳〵三四軒ありしによつて、四ッ家の里とは名づけしとぞ。或時里人ぶら〳〵と川へせんたくに行きけるが、あまりのろついて日が暮れたり。ふしぎやな水底より、光を放てる一物有り。こはぐ〳〵よつて能く見れば、是れこそ夜光の玉なんめれ。さてこそ玉をころばし〳〵、くらき闇路を苦もなく歸り、朝夕玉をなでさすれば、ふしぎや此の玉自然にうごき、一人の美女と化し、往來の旅人をとゞむ。人々これを聞き傳へ、みな此の美女を戀ひしたふ。されば世上にかうやうの女をさして玉といへり。所は武藏の多摩郡、川は則ち玉川といふ。むかし天人此の所に、分別もなく天くだりて、この川水の清きにめで、とある汀に玉子をうめり。これ玉川にて光りし玉なり。人間是れを拾ひし後、玉子の光一向見えず。さらに行くへも知れざ

れば、なうかなしやその玉子、行くへいづこと知れざれば、飛行の道も何かせんと、月宮殿の白衣をとりだし、人をたのんでぶちころし、簀ひちりきも賣りはらひ、やけをおこして此の世界へ、七寶充滿の寶をふらす。是れむだ遣ひの濫觴なり。七月八月と月かさなり、しきりに天を戀しう思ひ、天の羽衣となり出さんと、胸算用をして見れば、借りたる金は一由旬、その利はまた半由旬、月宮殿のかの白衣は、もはや出すべき工面もなく、たゞぼうぜんと呆れしが、今は仕樣もあらざれば、むざんや羽衣ながれにけり。もはや此の上是非もなく、里人を賴みつゝ、われとわが身を賣代なし、十萬年の年季をいれて、姿はかはる河竹や、此の羽衣のながれしより、流れの身とは名づけける。彼の天人より買ひもとめし簫ひちりきをとり出して、里人是れを吹くければ、其の音をしたひてあまたの天人、吹く度毎にあまくだれば、段々是れをとめ置きて、軒をならべし旅籠屋へ、手ン〳〵わかちてかゝへける。さてこそ宿は異香くんじ、羣集をなしてえいたう〳〵、おれもゆかうわれもゆかうと下界の大通大ぞうまで、みな〳〵天女の手管にかゝる、名づけて有頂天道といふ。

出立

里をかアよオひ引、無有「オ、イ雷尾ぢやアねえか。」雷尾「コレハ無有先生に露時雨子。」無「ハテ珍らしい對面ぢやよなう。」雷「その對面がきついこと。」無「さもさうず〳〵。シテ、何所へ。」雷「何所と定まるあて所もなしさ。」無「黑仕立に米屋かぶり、闇の夜の目印にやアええが、どうも人がわるいぞ。」雷「見かけはわるくつても、人はすとんだえゝものよ。茶屋に下りとつちやアけちりんほどもなしか。下らうといつても茶は下ゲずか。しらきちやうめん、何ときれいなこつちやアねえか。」無「おきやアがれ。」雷「シテ、ぬしたちやアどういふぶらつきだ。」無「木幡のたを幸ひ、どちぞへといふ謀叛で御ざりやす。」雷「そりやアとんだこつた。サラバ一所に。」無「イヨちく類め。サア是れから大灘だ。」無「これ息里に馬はあれども。」雷「君を思へばかちはだし。」雷「イヤ子、おれが行く方を通らつせえ。」雷「南無さん。」無「そりやアこそな物もいはれねえ。」雷「くそわらぢでかけやアがるから。」雷「はねがいヤツサ、コレハサ。」無「エ、ぞんざえな野郎だぞ。」雷「イヤモウちつとだぞ。」跡より二人づれほ「わたしがやうなおたふくに、ほれたつそかゝりやした。」無「馬鹿なつらぢやアねえか。まめいりのねおまへの氣が知れぬ。」松「八や、ゆんべはよくぬけたな。」八「念佛講を見るやうな、いつまで話してゐられるもんだ。ゆんびやア追分の市がとけへいつての、それから千田屋のばいたア、思ひいれいぢめてやつたよ。きかつせえ、ねりま大根を見るやうな兩の腕に、えしれねえ戒名を、十七八ほつてるやアがるから、俺がからみぬいてやつたら、せつながつて、みんなもう死んで、今生きて居るナア、御ぜんせねえとぬかしたわな。そこでおれが、此のごろほり

たてのあらほとけを二三人見出して、むてえにいびつたら、俺が名をもほらうとぬかした。」松「恐ろしい恐ろしい。」八「そこで俺が、すとんだ思付きをして來たよ。」松「そりやァおもしれえ。どうじぶくつたのだ。」八「聞かつせえ。夜著とぢ針を十四五本引つくゝつて、むしやり〳〵とつゝいたら、きいきいぬかしたわナ。八といふ字をふんまたがつたやうにほつて、墨をいれようといやァがるから、『俺ア死人めらと、一所に扱はれちやァてえきだから、光明丹をいれて、逆修にしよう。』といつたよ。」松「ええ〳〵。」八「そこでごてれつめが、ぬかしやァがるにやァ、『わつちが腕だとつて、らんたふ場ぢやァ御ざんせねえ。』と、泣きつ面をしてほつきやァがるから、どしやう骨をのし掛つて二ツどやして灰ふきから大蛇の出るやうな、一ぱいをならべぬいて來たよ。それでもあいつが背中も、がうせいかたい背中だ。今にこぶしがいたくつてならねえ。」松「はて馬鹿な。」ト、いふ跡より　武左衛門「新五左衛門殿、以ての外の廣街で御座る。」新五左衛門「イヤ累年降霜の節はか樣で御座る。殊更貴所には御老足と申し、旁以て少しづゝおひろひなさい。」武左「モノ公には、是れまでいづくへおこしなさるゝな。」新五左「イヤ玉城と申す倡家で、明石と申すめしもりを。ハ、、、、、。」武左「イカニモ〳〵。兼々彼が芳名聞き及びました。就中かのうかれ女、大酒をいたし氣儘氣隨、諺に申ス一國とやら一城とやら、いたすけにござる。」新五左「イヤ左程不遜にも御座らぬ。兎にかく金銀を塵芥のごとくまきますれば、ずんどようなびきます。武左殿はいづかたへお越しなさるゝ。」武左「拙者儀な、紀の國やにて、何の染之助とか申す妓をもとめました。一座に上諸白のじやするのと、あだ名の御座る領城が出ました。拙者も此の間は、名酒になぞらへました本を熟覽いたして、頗る博物の君子に成りました。」露「とんだへんちきだね。」無「インニヤ、あんな石こつぱを煮ころばしにしたやうなやつらが、よくされるものよ。第一爲になるか、又勤めよしか、口でうれんは云ひ次第か。することさへして仕廻へば、九ツ前にもう歸るわさ。とんだ女郎は嬉しがるの。」雷「なりといひ詞といひ、あれをよくする女郎は、イヤモウ一ト口もくへねえぞ。あんなのがふられざァ、今度の世にやァのろまに生まれるがかすりだ。コレ息子、ぬしもまだ身なりが野夫だよ。先づその大たぶさをずつとすくなく、あぶらべつたりもざつと付けて、本田くづしにいはつせえ。まづかう心得たがえゝ、月代ざつと髭ていねえ、梳き念入レのざつとゆひといふ所だ。」雷「何でも總體いきにして、一ト言いふもむだ矢なし。穴いいのすごい所を見せつけさつせえ。」無「しかしまだ〳〵、よつほど修行しねえけりやァいかぬよ。是れからおれがそろ〳〵と仕立てよう。をしい事だ色男の埋木、花をさかせて大通の、仲間入りをさせてい。」と、身は似た山の高つぱり、火のみやぐらを跡に見なし、大道かゞやく茶屋の行燈、風に薫るはとめ奇楠にあらで、風鈴蕎麥のけぶりほかり〳〵。

茶屋

三人「おかさんどうで御ざえす。」といひながら小若者善二「是れは〳〵、御揃ひなすつて。」女房「どつち風が吹きやしたか。ホンニきついもので御ざりやす。」善「どなたも御機嫌よう。」女「ソレおみや御茶を。ホンニ夕部も善二とお噂を申しやした。」無「そりやァ有りがてい。しかしろくな噂ぢやァあんめえ。」娘おみや「とんだまはり氣でおぜんすね。」雪「時におみばう。ちつとみねえうちとんだ美しく成つたの。」善「おめへさんが御出でなんしたら、お目にかけようとつて、むくの葉で此の頃、まい日みがいてで御ざりやす。」おみ「おいて下さえよ。」雪「おみばう。まづちよつとこゝへ來や。」おみ「アイ、おめへさんがたァ、なぜ久しく御出でなんせんえ。」無「イヤ女郎かひもとんとさえぬから。それともおみばうでも。」おみ「眞にかえ。」雪「イヤソレデモ、まだ眞の事は知るめえ。おれと○○をしねえか。ええ夢を見せるがな。」おみ「いやでおざんすよ。」雪「ナニいやであらうよ。そりやァ眞の事を知らねえからだ。」無「コレ雷尾子。あんまりつかつ〳〵ものをいはつしやんな。おみがよこつぱうでわらつてゐるぜえ。」善「おめへさん、今時の娘にやァ、そんな野夫は御ざりやせん。モウ此の頃とんだ深い色をとこが。」おみ「なんのこつた、おんなじやうに。」無「ハテナ、油斷のならぬこつたの。」此の所へ亭主かへる。亭「是れはいらつしやいました。」雪「ホ、ウ御亭主。御歸りか。」雪「姿婆以來だの。」亭「ホンニ左樣で御ざりやす。きついおみかぎり成されやう。」無「いや久しいこと、病氣と云ひてえが何ともねえ。」亭「大かた北國か品川、しかし霜がれには、遠方は御無用で御ざります。まして露時雨さんなどは、お宿で大ていお案じ成されやせう。」無「イヤモウ品川も、此の節はさえぬよ。」雪「とかく夏のこつた。」此の所へ杯出る。女「サア杯出る。」まづ一ツ上りませ。もしあげなさえ。」亭「サア上りまし。」露「是れは御馳走。」無「時に御亭主久しぶりだ。」亭「たべませう。」無「杯臺へぼつちり一分。亭「ハイこれは有りがたう。扨これは恐れながら。」と雪へさす。雪「お押へお押へ。」亭「イヤモウ雪から呑みつゞけ、腹わたの糟漬で御ざります。」雪「そこへ希代の妙藥。」亭「是れは〳〵。これでは又一杯食べられます。」露「そんならも一ツ飲まつせえ。」と花を亭「扨も兩手に旨いもの。此の樣な御酒は、いくらもたべられます。」無「イヤこいつは蟲がええ。」露「サア善公にもちとささう。」善「有りがたう御ざります。時にお聞きなさいまし。とんだ事が御ざります。」露「ナンダナンダ。」善「イエ安々はお話し申されませぬ。」無「ハテいやな事の、熱病ではねえか。」此の所へいきな小もんになゝこのうらえり、なんきんのはおり、五丁紐、中月代の當世をとこ。「アイをばさん。」頬ちがひのはかたおび、ひたひくつきりとぬき。女「五丁さんか。おはひりなされませ。」五丁「イヤ八百さんはどうだの。居續けもはうづが有る物だ。」女「ナニサ、先刻もさう申しやしたが、お歸りなんせん。今夜はぜつぴ歸るやうにいつてくんねえ。」女「ハテ困つたもんだ。イヤわつちがいかざあ歸るめえ。いつて引立てて來よう。」女「またみいらとり

におなりなせんせう。」五「なにサ、そこらァぬからねえ。例の辯口で敲き廻す。又内藏さんにも用が有るし、マァいつて來やせう。」と出てゆく。無「ハテええきみだ。」雪「そしてこよひは。」女「玉城さ。」雪「インニャあいつは御めんだ。」女「さうおつしやらずに、いらつしやいまし。外へ御出でなせんしたが知れると。」善「ソリャァ難波さんの角が、十五六本もはえやす。」雪「イヤもうあきた。」女「おめへさんも情なしだぞ。さやうなら枡坂か、吉本を聞いてござえ。」善「畏まりました。」しばらく有りて、善「枡坂はおさし、吉本に春風さん、織井樣、さはら木さんはどうでござりやせう。」雪「よからう。」善「さやうならば、直に御出で成されまし。」と立ち出づル。女「サァいらつしやいませ。」無「行くべし〳〵。」と三人打ちつれ出づる。

二　階

善「アイ次兵衞どん。」若者次兵衞「アイ二階へ。」三人打ち登るはしごの衣紋坂、右か左か、「イヤまづこれへ。」と、ずつと通す。無「何、ぜん公、爰はだが部屋だ。」善「春風樣の御座敷でございます。」無「何かいきなこつたの。シテ牀にかけたる一軸は。」露「周齋が赤壁の景だ。」無「活花は梅に寒菊、感心な事だ。その外和漢の茶器品々、湖月に古今萬葉集。」露「いづれ風雅の佳人と見えた。」雪「ナニサ、こいつもおへない茶人だらう。」此の所へ子供茶持ち來る。無「ソリャコソ、くすぶつた茶わんが出た。」善「また無有樣の惡口が始まつた。」ほどなく杯臺その外いろ〳〵、三人の子供「オヤ怪しからねえ。」善「サアもし、御召しかへなされませ。」三人の女きつい粟島だネ。」無「いづれもいかぬこと。」雪「しかし露時雨子のは美事なことだ。ときにぜん公、なんぞちつとくへるものを欲しい。是れこんなものは皆無喰へねえの。」善「かしこまりやした。」ほどなく杯をさはら木へさす。無「これきた。無「なにさん憚りながら。」と杯をさす。春「あけんせう。」無「まづ〳〵。」春かつちりといはせて、はどうだ。きついもんだ。初會とはいひながら、人によることだ。ぐつと崩して呑む氣は内藤宿か内藤宿か。」春「イ、エ、たべんせん。」雪「ナニ主達の身のうへで。」さ「アイたべる時はたべえす。」雪「よしよし、おきらひなすつたの。さう嫌はれちやァたたねえ。」と、無上むやみと呑む。繊小聲にて「さはら木さん。ゆうべも又さんが來なんすとつて、玉川屋まで來なんしたが、枡坂へいきなんしたとさ。」春「あんまり又さんも、つまりんせんよ。」無「ナニヲはなすのだ。ちつと聞きてえな。」春「何聞きなんすこつちやァ御ぜんしねえ。」無「色をとこのはなしか。」繊「マァそんなものでおざんす。」雪「コイツハやけるわい。」露「もしさみしいが、だれぞ呼びやせうか。」善「下に文五郎としけ太夫がをります。」雪「ソレハエエ、みんな呼んでこい。」ほどなくげいし藝者「これは〳〵。無有樣に雷尾樣、イヤ露時雨樣やう〳〵。まづは御安泰の御やうだい、恐悦至極にぞんじたてまァつります。」文五郎「まァつります〳〵と何を釣

るのだ。」定七「鯛をサ。」しけ太夫「えびすぢやァあんめえし。」雪「みんな久しぶりだ。」無「早速ながら。」しけ「たべませう。その内たぬき殿やらつしやい。」文「こいつはいいぞ。」熊藏「一目先生彈きたまへ。」定「どつちの目でえ。」熊「どつちのこつちのと、一ツ外ァねえぢやねえか。」文「コイツハえゝ口だ。その序にひかつせえ。」『うれしやさらば舞はんとて。』しけ「モシ北國ハナ。」無「聞いてくりやれ。この中も本所の仙葉がとこで、難波町の五柳に逢つた所が、今から藏前の山魚が所へ、河東ぶしの稽古にいくと云ふから、おれもちつと蘭州が會の事で用も有るし、又家櫻をとつてこようとおもつて、それから行つたがさいごの助、サァはなさばこそ。三日三夜ぶちながしの、大手こずりさ。しかし遊びは名にしおふよしはらのことだよ。」しけ「そりやァとんだ事で御ざります。そのうちには金龍山の織殿などといふ洒落が御ざりましたらう。」無「オ、一昨日だつけか。柳橋で駒と濱虎が、二人づれで通つたから、『何所へ志して行くのだ。』と聞いたりや、『織殿へゆく。』といふから、『俺も一所にゆかう。』と、みなと屋から猪牙に乘りの、汐先にぐつと會所まで、かう一がいにいつたが、何が織殿でいけぬ藝者を、二三人よんで呑んだが。」しけ「いけぬ藝者とは、似たことも有るものね。」無「これは御めん、あやまつた。イヤモウしんにさえなんだよ。白駒は酒をやめるし、濱虎は茶許りいつてのますが、どうも面白くなかつたが、いい所へこゝの舞曲が來て居たよ。何か俵屋の春日野に、帶をねだられたとやら

いつて、玉城が女房と來てゐたから、呼びかけたりやァ、『これはいい所で逢つた。扨々お久しい、結城座で矢口の後日をしたとき、逢つた儘だ。』とつて、それから大呑みさ。」しけ「そりやァちやうどいい所で御ざりました。矢口の作は、平木辨内どのとやらの作だと申しますが、とんだ智慧者さうで御ざりますね。」無「あいつは遠國へ、智慧の買出しに歩行くわな。此中もおらんだの、えれきてるとやらいふ物をこしらへて、おれが臑から火をとつた。一度臑から火をとつておくと、のぼせがくつと下つて、どんな女郎にも、あつく成る氣遣ひがねえ。ほんに辨内で思ひ出した。稻野や林右衞門は、こつちにゐるかの。」しけ「ナニカ伊豆へゆかうとやら、いふことで御ざりました。」無「あたけ丸ぢやァあんめえし。もうえゝかげんにすればえゝ。今月なかば時分に、枡やへ行く約束をしたが。」と、何から何までしりつらの、ほんと放せし鐵砲は、時候はづれの空だめなり。露「そつちでばかりはなさずと、こつちでもちつと話しやせう。」雪「いやもうそんな噺はながして、少長の身が見てえ。」しけ「中々おなぐさみに。」あゆの新「ナニいやらしい。年寄のくせに。」しけ「年寄だ。それでも夕部かはいいとつて、抱き付いたぢやァねえか。」新「オ、蟲のいい。」しけ「それもう色目さ。」新「すかねえなう。」文「とつけへこうしよう。」子供「オヤ、夜とりのまねをしねえもんでおざんすよ。」しけ「しつたかよう。」此の所へ膳出る。無「ナニむすこ酒はいかず。」善「御膳を上りまし。」定「お二人樣ながらちつと。」雪、無「イヤ酒を呑んでは

とんと一粒もいかぬ事。」文「味噌汁はちと上るがよう御ざります。」無「そんなら是れで飮まつせえ。」といろ〳〵とりくらふ。「文公、氣はねえか。」文「ようござりませう。」とくふ。新「よう何かをくひなんすぞ。」文「知れた事さ。先づ當時くはぬものは、四ツ足で駕舁と火燵やぐら。」無「なりくだもので、首つくゝり。」しげ「魚類で、木魚と土左衞門。」文「マアざつとあんな物さ。」雷「まだ〳〵もちるゐでくへねえのは、疝氣もちとはひとりもち。」文「アイその外、何でも下さります。」新「ナニばからしい。」文「さて此の口序に、此の所へ出ますが、それ坂東に名も高き、市川流のつらねごと、彈いて下さえ。東西〳〵。夫れ史記の本紀に曰く、舜の側に象耕す。象は是れ獸にあらず。」無「コイツハ堅えぞ。」雷「堅えはええが、やつぱり狸だ。」文「ヘイ邪魔が入つた。折角使ひかけた物を。」しげ「痲病にならうぞ。」文「さアまアよう引。」熊「どうした〳〵。時にもう何時であらう。」新「もう引ケすぎでおざんす。」しげ「いづれも退散は。」一同「よう御ざりませう。」雷「しばらく〳〵。」露「マアみんな一杯づゝ。」善「イエもうよう御ざりませう。わたくしももうおいとま。これからまた總州へまゐります。」無「それは御苦勞。」善「明朝は何時にお迎へに。」無「例刻々々。」一同「さやうなら、御きげんよう。」春「モシ誰様もお休みなんし。」無「ソリヤそろ〳〵追出すわ。」雷「ソネエニ寐たがらねえ物だ。夜はまだ長いよ。シテ身が女房共はどけへいつた。」露「ナニカ女郎衆が居つかねえ。」無「居りつけねえからさ。」新「よう口をききねんすぞ。」無「その筈さ。山下に三年。」雷「八幡山に四年。」新「さう見えやす。」春「サアむだをやめにして、お休みなんし。」新共「サアお出でなんし。」と、二人をむりに引立てゆく。春「サアお休みなんし。」露「まだ早からう。」春「なに早くはおざんせん。」と立て切る障子、引き廻す屛風のうちへぞ。

〇　〇

翠帳紅閨に枕ならべし千とせの夢、とりの八ころゐも寐耳に水、水さす人も朝には水飴となり、夕にはやみ雲となる。はしごとはあすもながしにすや〳〵と、たゞ一睡のええう榮花、又たまられた物ではなし。春「もし〳〵ちつと起きなんし。〇〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇。」露「〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇。」春「〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇。サア煙草を呑みなんし。」露「モウ厭だ。」春「〇〇〇〇。」露「〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇。」春「そんならいつ來なんすえ。」露「二三日中に。」春「いいえ、日をきめて御出でなんし。」露「そんならあさつて。」春「待つてゐいすよ。」露「承知々々。」春「そして獨りおいでなんし。」露「なぜ。」春「なぜでもさ。ほんにさつきも云ひした通り、初會からとんだやつだと、おさげすみなんせうが、夜ごとにかはる川竹の。」露小ごゑにて「つらい勤めのそのなかに。」春「ぬしのやうな客人には、勤めのやうにも思やしいせぬ。ホンニ末ながく、お通ひなんしておくんなんし。どうした縁か知りいせんが、ぬしにちよつとお目にかゝりいしてより。」とうつむく。露「ア、忝

なら茶に淡雪だ。」春「何のことでおざんす。人にばかり氣をもませ、シテ來なんすことはいやかえ。」露「嫌ではねえ。」春「すりや來なんすか。」露「これがこねえでゐられうかい。」春「ねつから嬉しいね、そんなに茶ばかりいひなんし。しかし勤めのうき身なれば、定めてはかないやつだらうと、思ひなんすも無理ぢやァおざんせんが、うたがひなんすもことによりいす。勤めの身にあらうことか、恥かしい事をしいした。ぬしがさういふお心なら、あれまでことをわけはしいせぬ。今更つもりなんすほどお恥かしい。」露「サァむづかしくなつて來た。ソシテ何が恥かしい。」春「マァよく積つても見なんし、初會からあられもないことを申しいして、親にさへかくすことを、みんないはしてそのうへで、なんぼわたしがいやだとて、そりやあんまりでござんせう。いやならいやと假名でいひなんし。いやともおうとも云ひ切りなんし。聞いてわたしも料簡しいす。」露「ちよ〳〵らにもせよ茶にもせよ、俺が迷ひの心からは、まんざら譃ともおもはれず。ア、かたじけない。」春「オ、うれしい。」

きぬ〴〵

中を流るゝ一ト重帶、枕がものを言ふならば、さうといはまし岩ばしの、夜の契りはかはらじと、常磐の松の村時雨、跡よりはるゝ冬の夜は、明けがたちかくや成りぬらん。

寒閨に獨りふして、婦なしとはこれなんめりと、獨りぶつ〳〵やけを起し、聲はり上げて、樣よ引樣よといへど、どうしたと云ふ人もなく、いねんとすれど相手なければ、煙草とあくびのかはるがはる、どつちを聞いてもごう〳〵の聲ばかり。折ふし廊下に足音あれど、わが傾ならず、となりの睦言聞くさへ憂しと、夜著引つかぶれど寐られもせず、らうがいやみを見るやうに、ふとんのうへに寢たり起きたり、手を叩いてもあいともいはず、わが身をして大通と、胸にあまんの我慢高慢、ぐつと見おろす心から、猶さら腹も立つたり居たり、あたりさはりもあらけなく、無「コレ雷尾や、あんまりくつついて居ずと、おきさつせえ。」雪「是れは迷惑。おらが傾などは、今がたやう〳〵來てあの通り。」無「ハテナ、新宿ももうさえぬわえ〳〵。まづ總體がいけぞんざえだ。」雪「若いものといふやつが、股引の尻をまくつて、案内なしに人の座敷へのめり込むし。」無「マァ吉原などに、とんとねえ點だ。ばいたといへば、鷺の泥鰌ふむやうな足つきで、廊下中そゝりやァがる。そのくせ眞なつらァして、ぴんしやんしやァがる。ほんに孫子の代までも遺言にして、よこさう所ぢやァねえ。」雪「ぬし達は何をおつせえすえ。」無「何でもねえが、今夜はとんだ面白い遊びをしやした。」雪「それはようおざんす。わたしやァ癪がおこりいして、ぬしたちにおかまひ申しんせん。」無「はてな、人の癪なら三年もこてえるね。」此の處へ織「かへりなんすには、早うおざんす。マァちつとおやすみなんし。」無「お志は

ありがたい。お志を無にするぢやァねえが、此の間にゆるりとまゐつて、やすみやせう。」雪「ほんにみんながよくするもんだ。」繰「なンの事ておざんす。マァおいでなんし。」無「よしてくれえ。みたうもねえ。手めへがつらァ見るとぐつとむねくそだ。」さ「あんまり一國だね。」無「勿論の事、これからァいひてえ事を、のたくり出すのだ。まあこゝらへ來て、廻されるやうなとんちきぢやァねえ。こゝらでいふは、馬の耳を瀧園扇であふぐやうなもんだが、後學のために、ちつたァ聞いておくがえゝ。」雪「無有や、いふはむだだわな。ぜんてえ通なものと、物をいふすべを知らねえから、おつかながつてよつつかねえのだ。」無「そのくせ高えつらァするけれど、しやつ面へ三開階子をかけても、はじまるめえ。」雪「しかしこゝらでこそ、たくさんさうにいへ、本所の方へでもくら替をすると、たいてえ嬉しがる事ちやァねえ。」さ「なぜえ。」雪「水場ぢやァ、手めへらがつらァのき場にしておくとな、助け舟がなくても、まづあんどだわ。」無「ほんに、此の内へ來て、いろ〳〵なばけ物を見るぞ。」雪「コリヤァふくろふにけえどりをさせて、此の女郎共と一所に、兩國へみせものに出したらはやらうぞ。」無「イヤとてもこゝらで、小言をいふも餘りぢやけどだ。氣はづかしい。さらば息子を起して歸りませう。」此の所へ小はるやおむかへ。無「何ぜん公か。おそかつたく。露時雨子支度は。」露「もうようごぜえやす。」奉「そんなら必ず待つてゐいすよ。」露「アイ此の間に。」奉「誰樣もお近い中に。」雪「ハイ正月の十

ヲばかり有る時ふとさんじやして、又おせわに成りやせう。」と、ふられた背中に腹いせは、ふみとゞろかす階子もばた〳〵、みせのくゞりもぐわら〳〵。月落ち烏鳴きわたりて、天龍寺の鐘の聲ゴオン。

新宿○學問　終

序

二上りのいたこに曰く、手鍋さげうと口にはいへど、實は乘りたや玉の輿とは、豈酌女の言ならんや。其の手鍋提げるが、ふせ玉の輿にも勝る心意氣を、すつぱりかいたる作意の妙。河奈川の豐倉を見通す、什麼生、達磨も古石に三年。子曰はく、君子も中島町の小徑によらん。嗚呼三河樓の料理番が甘口も、大津樓の水の齟きも、味ふる者、此の本に口をかけよと、序の一丁點す事爾り。

關東米誌

自序

色好まざらんはといへる、日本の放蕩家、傾國とそゝのかす、漢土の狂費家。貴妃が淫婦、無鹽女が醜女、薄情愚意心實も、悉皆皮一枚の戯れならずや。蓋し義理一遍の通情は、結句心のもめる種。割つて見せたき女郎の腸。呑込み姿の江戸ッ子の根生骨を、醉道の眞水に晒して、一寸南鐐一篇の書を著はし、金の鯱簡版打つたる、諸君子の覽に呈す。元來戯謔の書と雖も、聊か悟道の捷徑ならん。ハテ足下人間一生盧生が夢、樂しみ僅か二十年。ナソレおちかい内と云爾。

于時戊午春初仕舞翌日於三河樓見通

式亭三馬採筆

凡例述意

○先に雷名の諸先生、東妓南品北郭、西娼の遊里、小說を著述し、滑稽妙文普く海内に震ふ。其の穴を穿つ事高くは高慢の鼻、虛空無天に至り、低くは麴町の井戸を淺しとして、混底那落闍羅王の天窗に屆く。こゝに於て短才の小子等、書せんとする筆頭に文およばず。依つて今諸君子の非言を顧みず、名家の糟粕を嘗りて、予が分に應じたる新市場の世界を著はす。文くだくだしく符合せざるは、覽者の增校言を希ふ而已。

○此の書の趣、女郎一人に三客の意味を穿ち、謊と實の迷悟を示す。然りと雖も、東曲通の覽に呈すとにはあらず。

○郭通の目より見れば外國夷狄の如くなれば、言語もざんすにかはつて、はんなと耳立てば其の鄙俚を改めず。

○舟宿衆、私等の類、その儘に出して、片言の誤りを正さず、唯有容になして三太郎權七に與ふる而已。

巳上

辰巳婦言凡例述意

暱囉哩樓主人戲著

發語

戀別の後朝、ハイお迎へに別れの鐘、閇夫と女郎に悪まるゝ、烏が啼く吾妻なる、辰巳の里に舟はあれど、君をおもへば歩行よりぞ、行くも歸りも心から、俤の目先にちらつく、ぶら提灯の火と共に、おさき眞閨行當りばつたりと、お座鋪子供衆の斷りに、一身のねぐらに迷ふも、おのがさま〴〵氣風にや有りなん。爰に一場の娼家あり。所謂戸橋赤町裾櫓、おの〳〵列國を分ッが中にも、古石新石の繁昌。此の里惣別客品有り。平代橋と共に長々し夜を、一ト切遊びのいと短きに、遊于純通、サツサ押せ〳〵の猪牙舟に乘じて、闇雲たる有頂天へ昇り詰め、終には逢ひねえの眞中を取り外し、トツチリとんと身を落せば、食客の權八さんとなる事、是れ則ち水道の醉は、身を喰ふ喩への如く、タアに千金の角座敷、朝に◆◆男山の重ね著するも、通と不通の譯合ならず。兎角世界は竹田近江が積り細工のごとし。爰に鞏れ來る遊人は、中通已下の人物にて、棧留青梅の店者は、屋鋪通ひの初馴染より、年に二ッの出番を誓ふは、聊か二星の契りにや比すべき。彼の放蕩家の吳王。姑蘇臺に西施をして、チョン〳〵幕の樂しみも、かくやあらじと未至通の貧君子。慳安きをもて喜見城の思ひをなし、適兩三個の妓藝を揚ぐれば、晉の謝安が東山に新狂言も是れにはしかじと、脂下りに高ぶり、自ら錢湯の湯氣にあがッて、黄色な潮來に湯番を恐れざせるの徒、潮來を以て克くビハエフタウを度し、新手を以てよくスワツパリを殺す。此の世界の風土といへるは、長鬢羽織の細身指し、黒縮首の貝の口に結び、或は前垂腰にまとふ、丸額の大銀杏。客人か、將船頭か。船頭とも見え、また客とも見え、大きに賓主の禮を亂して、二上りの騒唄。夕しごけんの程もなう、又ぞや内の御首尾の程と、ばつち尻はしよりといへる、きん〳〵姿の靑樓風を廢し、或は晒の手拭を肩にかけ、花色繻子の帶、文のさき目の口紅粉は、萬客嘗むとなめられて、行く客の詠めは絶えずして、而も元の客にあらず。流れに浮ぶ川竹の、且切れ、且睦びてと長明が、方丈の文にはあらねど、實にや賑ふ繁花の地。爰も名にあふ鎌倉の、大磯小磯化粧坂、わけて名高き手越の宿、戀の船著、情の湊、新地の端に漕ぎ寄する、一艘の棚なし小船、新市場の橋の下、洲へ當らじとする處へ、遙か古市場の方より來る、贈り舟の潮來洒落、互に摺れ合ふ舟と船、客と客とが見合はす顔。胸にぎつくり、ばつたり落すぶら提灯。「今のは慥かに。」ト胸と胸。「ムそれよ。」チョン〳〵〳〵〳〵。折から時も(四ッ明の拍子木)船と別れてチリチツツテレチン、チツトン。跡白波に音而已聞ゆる。

四ツ明の部

品目

「手ごはくかかれる段
「うまくかかれる段
「しんにもてる段
附、あくてん遊び三人一座の段
「女郎ひとりに客三人手くだの智慧競

辰巳婦言

石場妓談

式亭主人著

半夜鐘「ボオン〳〵。」復番拍子木「カチリ〳〵。」につれて、バタ〳〵トン〳〵たる料理番の俎板も、良音なくして、桟橋の聲何屋々々アイ、、引の返詞。階子ばた〳〵も盡きて、船頭の魂廊下に納まつて、勤番部屋の刀掛の如く、「お客だよオ。」の美音、忽ちに鼾眠とかはつて柿鮮の如し。傍に熟柿臭き船頭の柏餅あれば、恰も菓盤硯蓋に等しく、臺所に算を亂し、鼠天井に踊つて料理場を馬場と競ひ、遠く望めば波風見通しに寒く、高調子の乙唱歌も風輪薯蕷の音に寂しく、寢言の掛合を視合はせて、舟宿の兄さん色事の廻部屋へ這ひ込み、不寢番のお針麻苧桶を片寄せ、醜を温めて呑む時分、遙かに米相場の迷ひ子、「火の用心さつしやいませう。」の鐵棒に驚きて、爰に聞ゆるは、たしか鎌倉古市場二川屋の二階と見えて、客と娼妓のさし向ひ、寂莫とした手管の意話

客人藤兵衛稲村が崎新川あたりの酒問屋の伴頭と見えて、年は三十五六。少しさびの有るでつぷりとした人物。

あげ、中著もつむぎの鼠返しにうきす小もんまがひ、八丈のがく小袖の下著、二ツながら黒のはんえり、らせんしぼりのちりめん半袖、繻袢におなんど七子の帯ぐる〳〵と前で結び、越川仕入れたかおりのたばこ入れ、尤も中へは丸角仕出しの縮緬蝦引を入れ、こしらへは惣白鐵きびそきつぎの銀ぎせるで、うす舞をくゆらせぐつと上げあぐらで居る。

女郎おとま俤の内の板元なり。但し子供やによりて、板がしらといふ家も有り、青楼ならおしよくといふもの、あるうへだの三すぢ立てのこり〳〵するやつ。下著はしまちりめんのせいらつ、繻袢はひぢりめんに白ねりのはんえり、尤もえりはぐひろく鼠の二重どんすの帯をしめて、あんどうのそばにすわり、片手ついて片手はまへがみのぶらさがるを、ばうしかんざしでさしこんでゐる。

藤兵衛「コウわけをいひな、なにもふさぎのすぢやァねえ。なんのこつた、庖丁を引ッたくられたちんこ切りか、すみ繪の虎ぢやァあんめえし、口上書を出して、藏前へすわつてゐやな。ァ、おもしろくもねえ」　おとま「おめへも又あんまりでごぜえす。かほちや畑へ厠をおつことした様に、おつにからんだ事をいひなえゝす。サウ又穴の穴までほつて聞きたくば、わけを話してきかせやせう。」藤「しれた事よ。穴を掘るのほらねェのと、水場の施主か、堀抜井戸の地主が、聞いて悶れらァ、ふさ〴〵しい。」ミ「何がふさ〴〵しいか譯も聞かねェで腹を立ちなはるが、ねッから氣がしれねえ。」藤「よしてくれ。くそ落付きにあやなしかけるな、面白くもねえ。かういつちやァごてえさうな噺だが。」ト少し聲高に成りてしやべりださうとする處へ、廻し方の女、南部縞の綿入に黒と鼠のくちら帯をしめ、前だれは淺葱色にすそへ貝盡しをちらし、つまさきへとまといふ字を白ぬきに染め出したるは、此の男の揃ひと見えて、少し酒じみのかゝりしむらさき縮緬ひらぐけのひも、右の方へだらりと結びさげ、あたまは天神結びのすそびんちよびと白のかんざし、さはつたら落ちさうにさし、銀むねのつげの櫛横つちやうへひねり、鄰座鋪のてうし杯をさげて、廊下をとび〳〵に來り、お八重「エ、ぞんぜえな、廊下を酒だらけにしやした。誰だかおそれるぜ。オヤおとまさんエ、藤さんのお聲が致しますね。」藤「コウお八重坊〳〵、一寸來さつし。」ミ「お八重どんか、ちつと咄して行きねえ。」や「何で有りますネ、ちつと面白い事でもお聞かせなはいまし。」ト、障子を明けてはひる。藤「ぬしやァさつきどけへいつた。雪の下の箱崎で見かけたッけ。」や「ハイ今日は汐富から西川岸の方へ掛取りに參りましたが、此の土地ぢやァ古いもんだ。」や「烏のなかぬ日はあれどかね。藤さん此の間はいつそお遠々しうごぜえますネ。定めて何方にか。」ミ「大有りとみえるわな。それにこつちの仕打がわるいから、どうでお氣にやァいらねえはずさ。」ト、引ッからんであてる。藤「コウ一つ呑まねェか、雫に硯蓋がある。サァ〳〵のまつしのまつし。」や「イエモウ有りがたうござえますが、こよひはいつそ過ぎましたから。」藤「ハテすぎてもいいわな。モウねるぢやァねェか。」ト、一ばい呑てふしを」や「モウ〳〵此の間は、とんと御酒がよわかりでござえます。」ト、一ッうけ、半分のんで下へ置く。そのうちに藤兵衛鼻紙や「ハイ是れは。」ト、いたゞいて懐の紙で下へ置く。袋より、一角とり出して紙にひねり、サアといつて出す。ちよいとはさむ。是れは此の女が藤兵衛へのむしんなれども、流石おとまさん。おはゞずかづけには云はれぬことゆゑ、おとまにいひかけたるとみえたり。

りました。ナンにうそぢやァござえません。モウ是れで御免なはいまし。」ト、かほをしかめて杯をしたミ「マァいいわな、モット噺して行きねェ。」や「イエモウみんな臥せりました。藤さん是れは。おと元トのところへなほす。

まさんよろしう。」ト、いつてたつ。藤「そんなら休みな。コウあしたはいつものとほり早いぜえ。」や「ハイハイいづれ承知のまくでございます。ハイごきげんよう。」ト、らうかをばたゝ〳〵。あとにはふたり藤「コレさつき富貴岡の廻しが來て、手めへを階子の下へ呼び出して、何か隱密に咄しやつて行つたのは、なんでもいつかの大智屋の傳に違ひねえ。」ミ「おめへがあぢに廻すだけ若いわな。何もかまつたこつちやァごぜえせん。」藤「ムンニヤ其の譯はとつくに御存じだ。ありやァ大方鳥居町から乘つて來る喜之とかいふ野郎が來て、お定まりをやらかすのだ。彼奴も又しがねえ野郎だ。ナゼ男らしく貰へ引きにわたらねエ。外の茶やから名ざしてくれば、といふ潮來文句もいめえましい。忝くも藤さんのおよびなすつたあまつちよを、盜みとかゝられちやァ面白くねえ。なんぼ手めへも枕だこの入つたもんで如在ねえつらァしても、サウうまくは化かされめえ。そりやァねエおちやつぴいだ。富澤町の朝市から、ほろ壹〆五百に買つて天道干へぶらさげる樣な、古革羽織でも、かう又おれが天眼鏡で、待てエと一番怪しめられては、何がなんとといふ場もなく、成程かう〳〵いふ理窟の狂言でごぜえすと、嵐が立をする樣に、平つたくあらはせろ。御勿體ねえこつたが、おいらァやりてが目たく玉と姑ばゝアの胸ッ尿を根付にして、視眼嗅鼻を緒〆に付ケ、化の皮を引つぱいで、提げ煙草入にこせへて、浮世をぐつと薄色に呑込んでゐるしやうがには、なにはどうだ角はかうだ、附木板のへぎ殘りはちやゝ、ちんころの舞臺になる。拂扇筥が菖蒲刀に化けるの、料理場の鮑ッ貝は、屋臺店の出來合ひ卓扑。しかも料理番のほまちになると、こいらァちよつくり、むくおきのうがちだ。ナント世界はあかるいもんだらう。サアどうだ返詞をしやな。只うつむいて何にもいはずのお半きどりもモウうるせエ。そんなしうちは切落しへ落ちるとも、棧敷連のジャ〳〵はこねえよしてくれ。そつくりと犬のくそのねえ處へ置きにしろ、たとひ左交と五瓶が近松以來の新手をかいて、千手觀音が化身して働かうが、びくともくふ男ぢやねえぞ。何のこつた、あきれ中返りをして、葺屋町川岸へ輕わざを出さァ、ばかばかしい。」ト、まき舌をまじへて、りき身をならべたところが、すこししやべりあきたと見え、暫くとぎれてほんのこおとまは先刻よりちよびり〳〵とあつくなる樣な水を向ケ、段々と圖にのらせる工めんにて、何ともいはずあんどうのぶゆをかんざしでおつつけたり、ぺん〳〵ぐさのかげぼふしを勘定したり、むだ書のいたこ節をなどりちらして居たりしが、さてこそこんたんの時刻到來と、そろ〳〵こゝろし文句を考へ、芝居の魂すぐ紙で張つた月といふもんで、上げたりさげたり、井戸がへのつるべときめかける。

ミ「なる程おめへのいひなはる事を聞きやしちやァ、一々御尤もさ。けれど又わたいがいふわけをもちつとは聞き分けてくんなせえし。そりやァおめへあんまりお情ねエといふもんでごぜえす。わけも聞かずに腹を立てなはるから。」藤「おきやアがれ。いたこをぢかに燒きなほす樣なわけもへちまもモウきかねエ。」ミ「ハテそんなにしからず聞きなせえし。何ほしがねいわたいらが樣なもんだつて、相應に蟲といふ物は持つて居やす。ヨシカエ、今おめへのいひなはる喜之さんといふ客人は、めど橋

の大こくやの源さんが連れて來て、初の時からしてちつと譯のあるこつて、船宿衆とも噺し合ひに、いつそ義理だらけで馴染になりやした。それだつておめへと是れ程の中だから、何も外の客人へは、是れ程も實を盡した事はござえせん。マアそりやアうつちやつて置いて、此の初仕舞をたのむにも、しつてゐなはる通り手もねえ身分だから、客人はさつぱりなし、誰といつて相談してくれるお方もねエ。といつておめへに。」藤「なんだおれに相談しかけても、所詮できねえと、見くびつてしたやりくりか。ほんのこつたが古市から新石切つて、者が幾人、子供が何人、その内よび出し、是れ〳〵がふせ玉、出居衆がどれ〳〵、あすこの内の娘分や爰のお針は扨おいて、どこの内ぢやア火入炭團がいくついる、蠟燭油はどれ程つかふと、しがく所の穴までしつてゐる。朝は大島町のむきみ賣の出端を切ツかけ、日が暮れれば白魚の筒と一緒に一年三百六十日、内にねる夜を遊びと心得、夜著の半えりの天鵞絨ずれに首筋をいため、尻の先へ豬牙舟だこのいつた男だ。是れ程につき合うても心いきは呑込めねえか。こんなに安く見られちやア、鯰上の腹がおすわんなさらねえ。」ト、ちつとすれば腹をたつて、ちつと太平をならべる。一體此の男は酒にゑふといつても、は常のごとくなれば、おとまもふだんのことしようち味無量のかき文句をあらはす。此のあくたいすなはち女郎の腹よりなせる事にて、大詰となればつひに一つのおとし穴へ落ち入る、はなはだおそろしきやつなり。「おめへの樣にばんいちにあつくなんなすつちやアどうもわからねえ。ぬしの心いきはどうかうといはねエでも、如在ねえといふこたア知り切つて居やさア。それだつて又こつちの心も、些とは酌んでくんなせえし。こりやアわたいが遊ばれたのかはしらねえが。新市場の氏田屋とやらに、わかつた子供衆が有つて、お前を深く呼び申スとききやした。それを聞いちやア、なんぼはかねえ身だ、ホンニしみ〴〵と腹も立つ。くやしく思ツても諸事苦界といふもんだから、道柴の露程もおめへを憎む心はござえせん。よもやさういふ譯あひぢやア、こんな手もねエ女に乘つて、噺してくんなはる心も有るめえと思へば、いつそじれつたく、ナゼこんなしみツたれに生まレて來たかと、心でわたいを恨んでをりやす。」ト、なき聲でも藤も、しんめりとしてなにか茫然となり、目をむしやうにばち〳〵しながら、「ム、そんな事ア覺えねえ。また有つたにもしろサ。手めへはがうぎときれいな事ばつかりならべたてるが、ナゼそんなら喜之助が名を腕へほつた、イヤサどういふ譯あひでおれを出し者にする。モウ〳〵〳〵是れをいやア胸ツぱらしが澤山ある。うでをほるともかじるとも、勝手にしろエ、もゝんがアめ。」ミ「そりやアおめへでもねえ云ひぶんさ。此のほり物のわけもよんどころねえ義理にからんで彫りやしたが、是れだつて根をたんでえて見りやア、みんなおめへにつくす心でござぜえすわな。」藤「ソリヤアなぜ。」ミ「ハテ初仕舞を賴むツても外と違つて人も多けりやア、つい六兩と七兩はいることなり、それに又いつかちよつくり咄した、とつさんの病氣が今にやつぱりむつかしくツて、人參の代ヤ何角九兩程入用だから、年ンを書入れてなりと工面してくれといつて來やした。

ソレにおめへの方へは來年行かうと約束はするし、どうもかうも思案につきて、金故こんな不義理をするも、とつさんやおめへへの働きばかりさ。ホンニわたいがちつとは不便だと思ひなはるなら、腹を立たずと堪忍してくんなせえし。」ト、もの思ひ終、屁をひり合ふといふ中だから、腹をたつでもねえがらいふ事よ、一體又鳥居町から來るやらうが、さつぱりと氣に喰はねえ。よしさう云ふ理窟なら、十兩が十五兩でもたて引きにもおれが出す。その代りにやァ喜之助ヲすつぱりと突出して見せてくれ、壹年早くこつちへとりやァ十兩だしても氣持がいい。」ト、段々りくつにのぼせてくれば、おとまは唱名ならで、十兩々々ととなへながら、すつぱりとするてしまふ。

藤「笑ひをかくして、そりやァどうともかつ手にしろ。しかしそいつを消すにはろせもでかけずば行くめえ。」ミ「きついしやれさ、さういはれて消しかねるものか。」ト、かねて用意の枕の引出しより切支をとりいだし、切火はえん〳〵と立ちのぼるに、おとまは是れも金ゆゑと、色と慾とに緣切もぐさ、あつきは女郎のつらのかは、口の内に

ミ「オ、あつかつた、サアよく見なせえし。」ト、まへへ　藤「ム、よし〳〵違へねエの眞中だ。夫れですつぱりとわかつたが、ついでにそつちの腕を見せや。」ミ「うでをましらきちやうめんだヨ、よく改めてみなせえ。」ト、はなのさきへつき出す。藤兵衛はとつくとあらため、枕もとの紙入より遠州どんすの金子入をとり出して、小判五兩なげ出して、藤「ソレまあ是れをとつて置くがいい、あとは明後日持ツて來よう。もしまだ用が有るならば、舟宿までいつてよこせ。ソシテ内へも大事にしろと云つてやりや。」ミ「なんにもいはず只いたゞいて紙入へはさみ、涙ヲふくまねをしてゐる。モシちつと寐なはんねえか。」藤「ム、モウがうぎに夜がふけた、サアねようねよう。」ら、鄰の座しきより友達女郎〇〇〇〇〇〇〇〇折かんぎりはひたひ口へおひかゝり、おほ島田のかつくり返しに文がらはモウふるいとかで、平ラ元結のじみにしばり、ねまきのすそをぐるりとまくつて兩手でかゝへ、廊下をつまだつてひよい〳〵。

いたこ「しやかやあみだやをぢをば二た親の意見でも、ほれたお前がどうまあ思ひ切らりよかそりやむりぢや。」ト、字餘りの二上りを諷ひながら、

角「おとまさんあけてもよしか。」ミ「おかくさんか這入んねえな。」角「障子を明けんとすれども、がエ、じれツてえ。ナゼこんなにあかねエ、いけずう〳〵しいしやうじだぞョウ。」たびし〳〵と開へる。

藤「ム、ムウだれだ。」角「だれだもすさまじい、とつぴんちやんさ。」藤「ム、奴か。」ト、ばたアりあけて這入り、

角「いやだなう奴とはなんだえ、大部屋ぢやァねえヨ。」藤「そんなら大ぼやか。」角「きついしやれさ。」藤「オヤ藤さん、ナゼだんまりでお出でなはるエ、恨みでござえますよ。」ト、懐手でひざかしらうは魚油ゆゑ紙へちり〳〵としてしやがんで居る。其のうちおとまはきせるを出し、藤兵衛がたばこをついで、あんどうの臺へはたく。此の内藤兵衛はだんまりのいびきゴウ〳〵

ト、きせるでたゝくまねをする。藤「夫れでも平代園子よりははらぶとがいいと、掛取に頼んだぢやァねえか。」角「オヤはづかしい、いろんな事を云ひなはるねエ。きついお豆だ。うつちやつて置きなはいましョ。」ト、を出す。藤「オ、ながい舌だ、只今舌の上へ長刀のやうな客人をのせて、水車のごとく、おしやべりを出します。コリヤ娘ヨ、アイ、といひな氣味の悪い。化かされ客が、まぢ〳〵して待ッて居るだらう。」ミ「エ、モウやかましい、チント相談が有るからだまんなせえし。やかましくッてならねえ。」ト、せながらくそぐる。藤「ア、あやまり〳〵、あやまつたのかんざらしだ、モウねるよ〳〵。トキニお角さん今夜の客人は初か。」角「イ、エ。」藤「裏か。」角「ムンニエ。朝比名と來てゐる。」三人「ハ、、、、、、ハ、、、、、、オホ、、、、。」ミ「鄰の部屋は誰だなう、とんだやかましい。」角「アリヤァお百さんの客人さ、三人一座で、くせとして廊下惣だから、いつそいやがつてゐるヨ。」ト、杉戸のすきより曰く、

後堂貧客三個交席段

中座鋪三人割牀にて牀納まつて、未だ女郎の來らぬ體。眞中の屏風の内に坊主天窗をくびッ切り夜ぐへつつこんで、やに下りにふんぞり返り、壁のらくがきをよんで居るは、醫者の内弟子ト見えて、口には張仲景が聲色をつかつて、内證は醫療手引草、傷寒論國字解などをそらんじ、何事もよく差出たがる性にて、切り抜き覺え蘭言唐音學語などを、しッたかぶりにならべたがるくせあり。

片達　黒八丈の七ツ時分な羽織に、上著は松葉色の山まゆぶとり、同じく七ツ頃茶返し小紋のふとりの下著に、花色はかたの帶をメ、まだ寢所へすわつたまゝで居る。

吐逆　こつちの屏風ヲひんめくつて、大あぐらで居る人物。田舍廻りの太夫か、人形遣ヒか、但しは茶筅已下の上るりでもうなりさうにて、まぢぴんの大たぶさなるいてふ、三日ごろのあたま、めんちりせいらつじまの羽織はまはしの女にあづけず、是れおさとのしれやすき故に、太織の丁子茶の上著をぬいで、すその方へ置きお納戸返しの小紋の下著にも、おかの鳴海しぼりの繻ばん不殘黒七子の半えり、黒八丈の帶をメて、何だかつまみ喰ひをしてる。

東吉　醫者さまの玄關取次と見えて、黒縮緬の上著、定めてやうかん色なるべし。下著はとんだふつり合ひにて、さんとめの三すぢたち少々ぼろのさがるやつに、黒こはくの帶、ところ〴〵はらわたのぶらさがり有り、むしやうにみる物ヲつらまへて、おもたいくちのしやれぢぐちなどをやらかしたがる風なり。

片達「鄰屋の兩雅人娼婦未至。是れなんの謂ひぞやだ。嗚呼可嘆、腹中おほいに北山の豐心丹だ。」吐逆「トキニモシちつと古いせりふだが、『やん』はどういふもんだの。埒のあかねエ。『につてん』が幽靈になるまでまだ來ねえとは、あんまり、ばか〳〵しい。」東「たつた今廻しの『おゆき』のころがしたツけ、呼び付ケのいざならべはどうだの。」吐「とゞ大詰の、『そり出さう。』は『がんだう』めくやつだぜ。」片「うさアねエ、如斯不利ときは巴豆を配劑といふ場だ。」吐「ぢきに手めへしやれだネ。」東「モシちつと『孫右衛門』を『孫三』としてえ、『せめ』が『孫右衛門入レ』『此のとほりだ。』吐「ム、いいきびいいきび。がん首ですくつて呑むが居候川柳々々。」がらたばこいれを出し、「サア『てうけい』は有りか。」

東「有りやす。」ト、一ぷくすひ、「いめえましい、所せん此のがら〳〵ぢやァ咄し合ひがわからねエ。」ト、廻らをつかまへて、われるほどきせるをはたく。吐「コウ片達さん、ちつとこつちへ來なせえ。」片達は廻し枕の四角ではあたまがいたむ故、上へふとんヲのせて枕とし、坊主あたまは髪が妙だなどと、ひとりねてゐたりしがふとんの下へ入レて、其のむつくりとおきてこちらの屏風へ來り、「ハ、ァ此の屏風はなんだ妙畫々々〳〵宋柴石、沉南蘋はだしといふ畫だ。こいつァくじどりにさせる繪だわい。和漢まぜこぜちくらが沖だ、節分の晩にやアチト恐れるス。トキニ、『せいざ』を『やつかい』に吃したせるか、スユ『しぶたら』と出てえが、所せんモウ幕は切れめえ。」ト、酒茶きいろな聲にてあたりをきよろ〳〵と見まはし、「オット有り〳〵こいつァいい。奇々妙々絕類な鹽梅だ。」ト、硯ぶたのわきに引きのこして置きたる、麥の茶わんもののひやつこくなつたやつを、むしやうとすゝつてゐる。東「何だ〳〵ちといき山としよう。沙汰なしは、おほキにうらみだ。」吐「がうぎと『のせ』かけるもんだの、夫れぢやァ『かくやつかい』と見えるわい。」片「こつちの畑にやァねえこつたの。そこらはぐつとナ、ソレ俗ぶつとかなんとか別世界にして、諸事色情ははなれたもんさ。ソリヤアさうと此の妓婦はどうだ、根ッから氣がしれねえ。足下は不侫が婦人を、とくと熟覽したか。おそらく醜女、彼の俗に云ふしみッたれだらう。」東「デモ彼奴アざらまんでもねエが、わつちがのは首ッつきが妙だ。吐逆さん御前見たか。」吐「大キにサ、飴細工の鳥が南風をくらつたといふ首だ。」片「ム、いい〳〵妙言々々。コレ此の枕を見さつし。」ト、吐逆が女郎は廻しでなきゆゑ、ぬりまくらの古いのを出してある。吐「廻し枕の名代に、馴染の客へ恩に著せて、出さうといふやつだ。」片「ム

ムいい〳〵妙言々々〳〵甚哉滑稽の大いなる。實に當世可恐だ。」東「髪の比翼紋を見ねエ、少し氣障だの、金箔の古も今斯うなつちやァ霜枯の藥罐天窗、燒原場所附といふ見えだ。」片「ム、いい〳〵妙言々々。」吐「ドレ讀アねえ。變ちきな紋だ。へちやァねエどぶ漬けきうりの輪切へ、とゝやきをくツつけたやうだ。」東「是れでもなき殺した狂言だらうネ。しかしァノつらで『こだれ』ちやァ、掃溜の地震、雪隱へおつこちた雷、といふつらだらう。何分恐れる。」片「ム、いい〳〵妙言々々、何でもソレ方便を用ゐて、あいつが懸河の辯をふるつちやァ、どんなやつでもひたひへ江戸繪圖の川といふ筋を出して、一ばん捻ッて見るのサ、恰も竪板へ詰り小便をするが如しだらう。」吐「大笑ひだ、横板へ泥もあきれらァ。」片「コウ髪の內も、めんがまぶな子供はねえぜエ。そしてだし物がいいなぞといふやつもあるが、おいらにやァさつぱり解セねえ。疊の酒じみと、茶のしほッぱやいと、壁の落書を見ちやァ、書遊びのあいそづかしだ。コウいかねエこつた、此の頃の世界をりしまさねえか。」是れは說する所は五六日い前の事さ、兩三個の社友と共に『與太郎』ぢやァねえか。」東「チト承りてえネ。」片「話かといふ吐「イ、エまだりしやせん、又おめへ『與太郎』ぢやァねえか。」東「チト承りてえネ。」片「話こと。こでおつりきな事があるもんだ、わつちが杯をトさしたやつはモシがうてきさ。」吐「ム、ありがてえ、定めてサありが〳〵。」片「聞きなせえ、牀の內は初會にしては、おそらく妙手なる〳〵、九目も

おかねえぢやアうてやせん。そのくせ國色尤物、イヤア至ツての佳人さ。」吐「ムゝ有りがてえ〳〵。」片「大きにのりが來てむしやうと首をふり廻し、黄いろなこわいろが段々と高でうしになる。此の内東吉は一向てればたゝ〳〵しをかしけれどもわらひをかくし、足をてゐる。　そこで兩座面につらなる歌妓幇間、こいつまた虚誕を交へてドント、ナソレ二階中が引ツくり返りの大どん〳〵。流石の大夏高堂土佐の大仕掛を見るがごとく、イヤモ愚僕大酩酊、諸事夢のごとくで閨房へ入りやした。」吐「そこでおつばりわからず、さすがだんまりでも居られぬゆゑ、ムゝいゝ〳〵トばかり合はせかぢみでゐる。東吉は勿論先刻より大てればうにて、口の内でいたこをうたつてゐたりしが、界もいいが、今宵はどうだ、モウたいくつの筋だ。」吐「初會廻しはとらねえ所を、むりにあがつたから、こいつは覺悟のめへだ。」裏「おほかた女部屋かあんどんべやへ、おッかたまつて、出しッこのおでんしら菊そばイ〳〵で、しやれてるだらう。」片「但シハなめかたでも初めたらう。」裏「オゝさむい寒い、マア一トちんぼうふり出してえ物だが、コウとてもかうなつちやアナ、彼の。ナソレ。」吐「ムムなにか。よし〳〵片こう『きくら』を出しな。」ト、さゝやく。片「こりやア（耳）おそろだ、そんならこいつから先へ。」裏「シイこりや。」　三人「口をふさいで　チ、チンチ、チン〳〵〳〵くわアんト。」吐「此の所黒幕見えあり、忍び三重。」　裏「蛙の啼く音寐鳥の笛チ、チ、〳〵〳〵カタリ。」吐「モツト『七兵衛』を高くまくりねえ、しかし『帶』を取つてまつ裸もいい。こいつア『はちや』へ『かめ』たくせが、冤角うせねエ。　はちやへかめるとは質の事なり夫れでも此の頃は『がうま』だから、チト『けまん』をうめるつもりだ。」がうまトハくめんのよき事、けまんトハ損したことなり。片「こいつァふり『どつしん』おもしろし〳〵。」ト、のこらず丸はだかにりちらしたるだし物の引殘りを、らうかへ引きずりだし、夜具をたゝんでらうかのまんなかへつみ上げ、その上へ屏風をのせて障子を外し、東吉がかるわざのまねをしてどし〳〵〳〵はね廻れば、片達は坊主天窗をふり廻して、ちやるめらの大さわぎ。吐逆は口上の事八が靡色ヲ遣ひ、皆さんさよぢや見ておくれなと、さま〴〵のあくヂヤリあれどもくはしくはこゝに畧す。

○一體此の里にてはわるじやれ遊びの人物多く、此のくらゐの事たび〳〵なれば、内所にてもさのみかまはず。されども餘りにさう〳〵しき故、三人の女郎もかけ來り、「オヤ何でござえますエ、とんだお客だヨ、きついしやれさ。」などとちやらかしても、一向聞きつけずに、をどり騒ぐ故、いびきさいちうの廻し方、若者など、目をこすり〳〵出で來り、お定まりに女郎を叱りて、むりむたいねかし付ける。そちこちする内、夜もはや明方にちかづけば、こちらの座鋪にとり紛れ、いかゞなりしや跡はしらず。

「コウ藤さん〳〵。モシ、モシ。モウおきなせえしナ、よくねなはるなう。」ト、ゆりおこされて目をひらき、のびをしながら　藤「ムゝムゝア、、一トいきにやつつけた、モウいい時分か。」ミ「まだ。」ト、いひながら、たばこを吸ひつけて出し「サア。」藤「取つて一ぷく呑みは　サア〳〵モウ歸らう〳〵。」ミ「マアいいわな、モットしづかにしなせえ。」折ふし廊下を廻し　藤「誰だコウ。」や「ハイ私。藤さんモウかえ、まだおめへさんお早うござえます」のお八重通る。

よ。」船「ウンニヤ早くもねえ、下へ行つたら船頭をおこしてくんねエ。」ヤ「ハイ〳〵。」ト、はしごをばら下をの「八どん〳〵。」だまつてゐるゆゑ、たばたおりながらぞき、大きなこゑで、「はァちイどォ、ん、エ、すう〳〵しいぞ。おめへはいつでもせわがやける。おひねエ權七さんだ。」船頭八「おきて來り、なんだやかましい。かんにんしねえ、まだ歯もはえねエ。」ト、口をおさへていふは此の頃のは作者には未詳。「ハイおふねがよろしうござります。」ト、びやう風をのぞいて、んバァ、引。」ト、したを「おとまさエ。」して屏風を片よせ、「何ンだすかねエ。」しべろり。「サァ行かう〳〵、コレそんなら、ダァのことをわすれめえョ。」ミ「呑みこんで居やすから、わるくはしやせん。そしておめへいつ來なはる。」藤「コウトあしたは何だによつて、エ、。」ト、しばらく「ム、あさつての晩來よう。」ミ「そんなら宵どまりを付けてまつて居るヨ。」八「オヤあつかましい。」ミ「エ、いらぬ世話だわ。」ト、つイタ、、、、まだ歯もはえねエ。」ト、また口をふさぐ。「エ、よしなといふに。」ト、ふりめる。八「アえ。」藤「やかましい、どうともしろエ。」ト、はしごばた〳〵、若イ者はきもおちかいうち。」ト、くぐりぐわら〳〵、舟ヲなほし、くぐり戸をあける。ミ「おさらばエ。」廻し「ハイ若イ者「もやひをときてぐ（八幡鐘）のゴオンと共に寺々の鐘、月落ち烏啼いて霜ハイごきげんよう。」藤「アイ。」ト、ばつとつきだし、橋に白く滿つ。宵の口舌に朝直しあれば、首尾を苦にする七ツ立ちあり。醉も不醉も悉皆是れ、朝河岸を漕ぐ舟の賣聲。バカ〳〵馬鹿の至りにして、其の傾城の心の内、明の烏も鷄も、悪や可愛や裏表。

△前席の客心は只おのれ獨り呑込みすがたに、しりもせぬ空を探り、傾城をかゝあにしこなし、おらァ遊びに行つても女郎を遊ばせてやるのだなど、高慢をはきたがる風なり。是れ等のたぐひかく〳〵として己がかかれる物なり。よく〳〵此の跡幕をこゝろみ給へ、ナントもし恐ろしいやつだネ。

△後座に述べたる三人一座は何となくむだヲならべ、しッたり自慢に氣性高く、唯通人の口まねをして、悪黠をのみ樂しみとなし、寒夜に衣をぬいで延喜帝の如しなどとふざける、是れあくる日髪牀のだみそにあるべし。

畫遊の部

喜之助　しつかりとした商人のひとりむすこ、まだ部屋住みのことなれば、金の都合ハチトわるけれど、隨分小利口に立ちまはつて、餘りやすき遊びヲきらひ、いつも稽者の二三組も揚げ、諸事きれいづくしいやみなしに、むつくりとした風にて、女郎の持てくる客なり。けふは寺參りとこじつけ、今朱の廻つた體、衣裝付け上田の小袖にりうもんの合著、黒手八丈の下著、淺葱縮緬黒なこの半えりのかゝつた繻ばん、花色の唐ごはくの帶を、ちやんと猫ぢやらしに結び、金から皮にりうきん金物の前つた今小便所から見通し〳〵上り、綱舟を詠めながら馴染のげいしやに出合ひ、二ツ三ツすてぜりふ有つて、廊下ヲとんとんとはこばせて、ふとんの上へふはりとすわる。喜「どうか雪でもふりさうな景色だの。」ト、いひながら上田の羽おりヲぬいで、船源「桟留關東縞の綿入、花色繻子の帶、しりツくけにさらしの手拭を腰にはさみ、紅革いぼ結びのたばこ入れ、角つぎの金物ヲうつたるをさげ、天窗ははすがけのさきを左まきにちらし、兄さん〳〵と客人よりもてるは、此の里の

ならひなり。いつも喜之助合口とて、けふものせて来り、羽織を疊みながら、どううらの畫贊を見て、モシこりやア女郎でござえやすね。」喜「ム、宗理に書いて貰つたから、花溪に澤庵の贊をたのんだ。」源「どうぞお讀みなすつてお聞かせなせえ。」喜「ム、かうさ佛は法を賣り、祖師は佛を賣り、末世の僧は祖師を賣る。汝は五尺のからだを賣つて一切衆生の煩惱を安んず。柳は綠花は紅の色々か。歌に水のおもによな〳〵月はかよへども心も留めず陰もとのこさず。ナント妙だらう。おらァよつ程よく出來たと思ふ。」すこし考へて源「こいつァ面白い。ム、なる程違へござえやせん。是れはどうか、道理先生とやらのいひさうな、せりふでござえす。モシさつき摩利支天河岸のこつちらで、物ヲおつしやッたのは、わつちもどうか見申したやうで。」歌「ム、ありやア友達だが、一ト頃小橋へつき合つた事もあるが、此の頃は河岸をかへて町へ行くさうだ。あんまりさえねエやつさ。」ト、はなしの折から、廻しの女來りてお定まりことすみ、船頭は網打場とはづして跡は喜之助引出しの明き掛りてありければ、引出し見るに玉帳あり。廣げて見ようとする處へ、おとまはやうじヲ使ひながら來り、「オヤ喜之さんなんでござえす、めつたに見るもんぢやアねえ。アレマアこつちへおよこし。」喜「いいわな、見せねえ。ナンダがうぎにいそがしいの。是れぢやア病氣ヲ付けるも尤もだ。」ミ「よしなせえ、きついしやれさ。」ト、玉帳ヲ引つた開より文一通ヲ落す。喜之助手早くとらうとするを、おとまはよしなせえとたがひにうばひ合ふとたんに、中よりやぶれる。ト、手に殘りたる文のはしをさし上げてよまんとする。よまれてはチトむづかしきぢなれば、いろ〳〵さま〴〵もがけども、喜之助に兩手をしかれて、はたらかれず、喜「なんだかをかしくかくすだけ氣がしれねえ。」ト、わらひながら「ム〳〵さてはその折からくれ〴〵申しかためた〳〵鳥居町の喜之助事必ず〳〵まちがひなうつきだしの狂言になされ下されかし。くれ〴〵も。」ト、よみ下す内、色青ざめ、ろし、おとまを見つめて身をふるはし、しばらく言葉もなかりしが、何思ひけん物やはらか、喜「コレおとまはおとまさん。」しばらくして聲のふるへを隱しながら、「エおとまさん。」とまは詞なくたゞうつむいて云分けを考へてゐる。「コウ是れにやア大かた、ふかい道理の有るこつたらうが、モウかういふしぎになつちやア、どうかうの譯も聞きたくねエ。ガ浮世といふものは面白いやうな、悲しいやうな、はかねえ物トハいひながら、おれが體もこんなぢやア有ルめえと思つたが、けふの今で愛想がつきたっモウモウふつつり思ひ切る。コレすつぱりと手ぎれいに、船宿前でつき出しねエ。ダガ去年中たがひにほつた此の片腕。ホンニ餘りのろい文句だが、蚊が喰らつても字のあたりは撫でさすつて辛抱する。夫れに引きかへ此の頃はそつちの腕の彫物は、とつくに消したと友達の噂。よもやとは思つても、やほッたく改められもせず、ひよつとたき付ケられたのぢやア、見くびられるもしがねエから、だんまりで今日まですました。モウかうなつちや、違へねエ。縱ひまんぞくで有るにしろ、こつちから突消すべエ。」ト、そばに有り合ふ火鉢の中より、黒煙たつかた炭ヲはさみ出し、うで引きまくりて燒きけさんとする。おとまはおどろき、兩手にすがりて、やアあんまり短氣でござえす。こつちの心もしらねエやうに。マアとつくりと氣を靜めて、わたいがいふ事を聞きなせえし。」喜「やかましい。短氣もせんきも發らねエでどうするもんだエ。」ト、うつむいて口をし

涙。折から鄰に大一座の廻りいたこ。　○「わたしや出雲にとり殘されて男寡理につきたのか。」ミ「ホンニモウわたい程苦勞性な者はねえ。其の手紙の入譯も委しく咄せば、おめへの腹立ちも休まるこつたけれど、此樣に又物事が行き違ひになつちやァ跡のまつり、定めてお前は、わたいが憎くッて成りやすめエ。」　喜「しれた事だァ。」ミ「それだつて、お。」喜「やかましいわい。」○二上り「譯も聞かずに腹立てさんす、夫れはいちづぢやだまらんせ。」「松といふ字は木扁に公ヨ、きみに離れてきが殘る」　ミ「今更おめへチ何しに突きだすの引くのといふことがあるもんでござえすか。おめへばつかりを賴みにして、くるしい世事をつかつたり、つらい苦界をおくッて居やす。又彫物の事も、サウいひなはるを聞いちやァ尤も程つれ衆のいひなはる通り、よんどころねエ事があつて。」ト、いひかねて「おめへに、けふいはうか、今云はうかと、思ひ出してもどうもあんまりしがねえこつたから、つい一日々々とおくつて、今更云ひだし惡いこつたが、その彫物はけしやした。」ト、聞くよりそばなる枕追取り、おとまがたぶ△此の内始終兩人だんまり。二上り「ぶたれた、かれあへられもまれ、よごしにされて又つきだされては、何處で立ちましよわしが身は。」喜「ア、是れもやつぱりおれがこけから發つたことだ。むせえきたねエ古狸め、雨が降らうが槍が降らうが、内の首尾をば小女に賴んで、そんじよどこそこと拵へごとして出てくるのを、お袋は内に居てあんじ、おひえもたんと下タへ著て、風引カぬやう頭巾ヲかぶつてゆきやれの何のと、お慈悲にあまえてつき上り、只夢の間も通ひたく、是れ程までにのろく見られちやァ、よつほどおれもうはきなもんだ。ホンニ思ひだしやァいつぞや、新市場の橋の下で行き違つた舟の内は、新川邊の客だといふこと、而も手前の處へくるさうだ。ァあいつもえり元はひからやらうだが。」ト、少し「ムヽ、是れもいつたつてつまらねエ、兎角不孝の罰だと思ッて、つきだされてあきらめよう。」ときれて「ト、きれい盡しのせりふにて、あくたいもなく、よくたいもなく、しうちにて、かんしやくの思入ればかり、兩方うつむいてゐる。　○二上り「つらい勤めもおまへを便り、夫れを邪慳なことばかり。」ミ「ひそ〳〵聲にて、喜之さん、マァかういふ譯チ一ッ聞きねえ。たとひどんな目にあつても、わたやァ一言もごぜえせん。」ト、耳へくちをよせれど「心がらとはわしや云ひながら、ひよんな苦勞をするわいな。」川藤兵衞がむりに喜之助が耳もとをとらへて、こんたんをさゝやく。按ずるに先段に逃べたる、新と、親とおまへに心づくし、義理ゆゑつらいほりものヲけしたることを、面しろをかしくはなし、みんな金からおこつたしぎ、わたいも大體くらうだヨと、定めてさま〴〵のこもり句有るべし。此の内こつそりのさし向ひなれば、鄰のまはりいたこにまぎれて、作者にもわからず、但し此の密談は諸通子の御すゐもじにあらんか。

○「おまへばかりに苦勞をさせて、わしは苦勞をせぬかいナ。」「鳥にうたはれ鐘にはせかれ、夜著にもたれし思案顏。」「つらやはかなや勤めの身なりや、心ない事うたがはれ。」ミ「アレ鄰でうたふいたこの文句を聞きな、みんなわたいが心いきだヨ。」喜「おきやァがれ、しれたもんだ。藤兵衞が方から

金を取つて、おれが名當で仕舞札を下ゲさせ、其の上であいつヲつきだして見せようトハ、なんぼおれでも心もちが面白くねエ。人の寶の十兩で、仕舞つたつらも何のたのしみ。お爲ごかしのしよにんもいやだ。モウ／＼何にもいつてくれるな、其のかき文句もおそまきだァ。」〇二上り「かくのだますといはんすけれど、わしにかかれるぬしぢやない。」ミ「ハテさう疑りなはるならば、おめへエの面ばれに、藤兵衞さんをすつぱりとつきだすから、跡でわたいをつきだすとも、どうともしなせエ。さうしたら腹の立つこともごぜえすめえ。どうで又おめへにつきだされちやァ、とてもあきた浮世だから、生きてゐる氣ぢやァごぜえせん。」〇二上り「ちゑもきりやうもない私ゆゑに、心つくせどあだになる。」喜「箆棒な事をいへ。その狂言の跡のでる内、金も命も寂滅だわ。けふ有つて翌ねえ命、去年の彫物も今年の燒原。どうのかうのと一ッ寸先は闇の浮世だ。」ト、すこしヅヽ、あたり文句はいへども、先刻のみゝこすりにて、やうすはわかり、段々と心のうちで料簡してみれば、なる程といふ氣もつき、よもやといふ迷ひも出で、又かはゆいといふ情はかかる深きなじみなれば、いふもさらなり。されど中直りの切り小口もなければ、たゞやんはり／＼とあしらつてゐる。〇二「三味の絲さへ三筋に分る、なぜにわからぬぬしの氣は。」ミ「は、獨りしあんを極め、のべ紙にて小よりヲこしらへ、小ゆびをゆはへてかけ出さうとする。喜「すそをとらへて、コレどこへ行クのだ。」ミ「チットあすこまで。」喜「あすこも爰も一寸でもやる事ァならねエ。小指ヲいはへてすゞの香筥、むかしのこつたよしにしろ。淺艸裏とは違ふだらう。」ト、さきをくゞられて猶つまらず、そろそろ枕もとへすりいだし、屏風のかげへくすね置きたる料理場のうすばヲもつて、亂れほどけし髮とり上ゲ、かきなでる間にふつつり切りて、何氣なくふとんへすわり、ミ「ア、天窗がかゆい。」ト、首をばら／＼とふれば、切「サァどうぞ堪忍して是れを取つてくんねエ。」喜 横目でじろり默つて居る。ミ「お心にやァ叶ふめえが、折角わたいが胸はらし、どうぞ納めてくんなせえ。」喜「いやだ。」ミ「なぜナ。」喜「なぜでも。」ミ「そりやァ近頃比興でごぜえす。」喜「比興でも何でもいやだからいやだわい。」ト、横の方を向き眼もとにつこり。ミ「いらざァうつちやつて仕舞はう。そんなにむきなことばつかり云ひなはるから解りやせん。」喜「うつちやる位のものだから、惜しげなく切つて見せたか。」ミ「エ、モおめへもしちッくどい、モウ是れほどあやまつたら、堪忍してくんなせえし。何の因果かこんねエに、ぶたれてもどうしても、しんそこおまへが。」ト、喜之助が顔を涙ぐんでつく／＼ながめ、「エ、いつそじれッてえ。見ればみる程此のかほがにくいぞヨウ。」ト〇〇〇〇〇〇〇。折ふし鄰の二上りも仕舞ひと見えて　二上り「ぶつもたゝくもしかるもおまへ、情かけるもぬしばかり。」喜「ア、こんなに愚癡に迷つたも、此のうつくしいしやつつらから。チョッいめえましい。」〇〇〇。ト、引きよせて〇〇〇〇此のうつくしいしやつつらとは、さすがにかはゆい情にして、ナント有りがたき所ならずや。かくの如きあだなるかたちに、魂天外にとばすもむりならず。若き心にないしようの辛苦までくみわけんとしては、ひくに引かれぬたて引きにて、おやぢの目玉ヲぬすみ、お袋のへそくりを引きだしても、初仕舞の札ヲさげさせて見たく、また藤兵衞といふじやま者もあれば、どうぞしてつき出させんと、工面にかゝるも尤もぞかし。ミ「オヤ／＼いつそ〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇。アレあつかましいこりやァなんだエ。」ト、喜之助が〇〇〇〇〇出し、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇（唯兩人）「オ、さむい。」の聲ばかりして〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇。此のときに至りて（ぬれ六ッの鐘）ボオン。（作者）もこいつは「エヘン。」

寄立の部

若イ者夜具包を肩にかけ、片手に蠟燭を二三挺持ち「コウお澤どん。」女「ふり返りて、オヤなんだ。」若「お虎さんとお靜さんと口をかけてやんな、一チ座の衆がお出でなすッた。」女「フムかうと、今夜は二人ながら出て居なはるヨ。廻しでもよくば、舟宿衆しでえだ。」若「お馴染だからいいわな。」奥座敷で「チョン〳〵。」若女「アイ、引。」娘分「しよく臺ヲおもさうに引きさげて、吉兵衛どん見通しはあいたか。」若「イ、エふさがりでござえす。お初會のお三人は、中の八疊へいれ申しなせえ。」娘「ソレお手がなるよ。」大ぜい「アイ、引、ハイ、引。」はるか見通しの隣座客（長五郎）としは二十七八、中さびの色男、めんうへ敷には半えりはゞ廣なるに、花色繻子の帶ヲメ、だのやはらか裏に、太織さいとうじまの下著、黒のき、なめしがはの三日月形のたばこ入れに、くりからの金物ヲ打ヲメ、くすべかはの半くつに、花色もんぱの下タ足袋ヲはち、仕事師のかしらと見えて、月代中ばえ當世はやりの丸びたひ、鼠や張りの煙管をひねくり、大あぐらでゐる。人柄は、の丁場でもくつと口チ　かゝへげいしやつる吉　めりやす「云ひたき心かず〳〵の、胸にせまるを云ひ殘す、めいきのきけさうな風なり。

くゆらすそのふしに、わすれぬ君をたゝみざん。」大ぜい「ヤンヤア。」長「サア一ッのみな。」つる「とんだ口早にチトお押へ。」長「マア〳〵。」ト杯をなつる「猪牙で來なさい、にたりはおそい。オヤふさつても鯛といふ古い洒落かヲ。そりやふさりましたハ、、、、。」男げいしやたる次「但シめつかちの、ナ、ソ是れはどうだいよレ何も御存じならんか。」

いよお取上けといふ處カヲ。そこで一ッちぐりをお肴。エ、お取上げ〳〵お取上げ名代。」つる「ソリヤアなんだ。」

た「千鳥糖名代ス。」つる「オヤ〳〵ホ、、、、。」大ぜい笑ふ。

レ、ナ、カノ戻りがけの駄賃、ナントあたらしからう。」た「そんならお取上げの駄賃か。ソ辛い。」ト、杯ヲと女つぐ。長「呑みほして胸を、ア、モウのめねえ〳〵。」つる「さやうならのめんの蒙りまたゝきながら、ト、三みせんを抱へて、ねながら杯をうける。して、一ッいたゞきませう。」た「ドレ〳〵おしやく。」つる「コリヤアおそれやす。」

た「ナニサぬしとおれが中だ物を、チエだんな。」ト、聲をするやアあやまりますねエ。」た「オヤ此の子は大それた事をいんなんちやからかとつぴんちやん。」長「又おかぶの唐人か。」た「えット夫れはいはずかたらず、ナ。」つる「わが心チ、チン〳〵チかね。」長「コウたか公ぬしやア、湯島の時分からみるのに、いつも變らねエの。そこの身振は二丁町にも有るめえ。」た「イヤ是れは恐れます。」此の内杯事にて、げいしやのむだ口さま〴〵あれども、お定まりなれば爰に略す。△とぢつる吉はつぎざををはづして、三絃箱へ入れ、廊下へつき出し、やうなら御機嫌よう。」つる「モシおとまさんは廻しでござえますかエ。」長「ム、又から〳〵だ。」つる「へエそりやおさみしうござえませう。」た「モシとかく女は氣がつきますネ。」ト、すてぜりふにて障子をたて、皆々歸る。長「みんな休みねえ。」△此の客一體工面はわるけれども、此の頃はひぜめんくのげいしやをかひ、或はほうばい女郎をおたいこに買はせなどして、内の目をくろめる。是れ皆おとまくてかく八幡のいりあひに、こぎよする舟。もどる舟「オイかはらねえ〳〵の聲、くゞり戸ひとりのやりくりなり。〇の音と共にかまびすく、神棚の十二燈はりこのしめ繩にかゞやき、ふせだまの子供、帳場のわきに居ならびて、耳ツこすりをすれば、口のかゝる稽者はしごの下タに、しやがんで、音メを合はせ、娘分長五郎のおつれまうしなは、靡と裾とを、内中に引きずるも、早よひどまりの牀納めで、五ツのひやうし木カチ〳〵。

「酒はねエか。」おとま「よしねえ。」長「ナゼ。ひさしいもんだ。」ミ「毒だといふのに。」長「ばかァいやナ、好きな酒をばやめろぢやないが、茶椀酒をばやめさんせといふ潮來があらァ。夫れだから俺アぐい呑みはしねえ。てめへこそ時々癇癪で青るぢやァねエか。」ミ「エ、きついしやれさ。」長「まだ歯もはえねエ。」ミ「ナンダあんまりしかるなエ、此の頃は久しくさがらねえわ。」ミ「しれたことサ。誰がさがりを承知する物か。コレよくこんぢう鋸研ぎへ行つたの。」長「フウ、ウンニャしらねえ。」ミ「ナニしらねエ事が有るもんか。隠しなはんな、よくしつてるるヨ。」ト、こそぐりる。長「ア、あやまつた〳〵、ム、ありやァなんだァ、エ、なによ。友達のつき合ひで、せうことなしに上島へ行つたのだ。だがかな棒ひいた。」ミ「誰でもサ、ほんにむだァのけて、此の頃も子供屋のをばさんがしみ〴〵と意見したよ。夫れだつて又、人の意見を恐がる位なら、こんなにはだかにまでなつて、是れまでおめへを呼びとける事はならねえわな。どうするもんか、かうなつちやァわたいも意地づくだから、たとひくらげへされるツても、はなれやァしねエ。いつぞやも何やかや、あんまり考へたらば、いつそ氣色が悪くなつたから、用事を始め、なんのかのとやかましく云ふし、モウ〳〵何の事も思はねえ。なぜこんなにはかねエやら、何角に付けても此の頃は、一日も早く行きたくツてならねえ。またも便りになるのはお巻さん許りだアな。ホンニモウあの子は兄弟ぶんとは云ひながら、いつそ情があるよ。」ト、しんのはなし、長は始終、長「たばこを吸ひ、愚癡な事ヲいやな、てめへらしくもねえ。どうするもんだ。よしんば又えこぢな事をぬかすがさいご、やてえ骨をたゝませて、ばつた、こほろぎの寐處にして、女郎の有ッた古跡には、ぺん〳〵草にかやつり艸、角力取草、女郎花の花の盛りを見せてやるべエ。」ミ「アレサ大きな聲をし（此間）なさんな。」ト、しかられて少　長「何をいふも借だらけだから初まらねえ。そりやァさうと、こんぢう頼んだ事をどうしてくれる。いつか中の櫛としのぎも、色々面工して見たが、てつこにおひねエから、漸う利上げでくゝり付けた。ア、何にしろ今年は初中ひつてんだから、さつぱり出入りはできねえ。」ミ「其の事もわたいが呑込んで居るヨ。それについてはなしがあつたつけ。おめへもしつてる、ソレ新川の客人の。」長「だれ。」ミ「ソレ藤印さ。」長「ム、あいつがどうした。」ミ「此のごろ内度々くるからいろ〳〵とつうくつしてノ、マア耳をだしな。」ト、さゝやくとノ、長ム、〳〵と、ミ「トいふかたちだから漸う五兩トソシテ外に壹兩貳分もらつたが、此の頃は金八どんが居ねえから、おめへのくるのを待つてるたヨ。是れでどうぞ借方をちつとづゝもなすやうにしねえ。さうしねえきやァ此の末おめへの所へ行くツても、猶つまらねえぢやァねエか。」長「ム、其奴は、面黒い。そいつが有りヤァ餘程いい、實にモウ此の恩はわすれねえ。」ミ「恩も何もいらねえ、こりやァする筈のこつた物ヲ。しかしおめへ

早呑込みだから氣になるヨ。夫れを又むだ遣ひニしなはんな、命から二番目と云ふ金だによ。」長「べらぼういふな、うはきらしい。コウトあいつが所へ是れと、ム、、かうだから、此のたらず前は、又こつちに、さんだんがあらァ。いい〳〵。」少し考へて、「是れからト、あけさけをして皮羽織を引きださにやァならねえ。」ミ「おめへ有ルぢやァねえか。」長「アリヤァふだん著だ。」ミ「そしてまだ鳥居丁から來る客人にも、チットばかりあてておいたが、コリヤアどうも初仕舞の客だから、ちつとしにくい。」長「でえぶいい鳥がかゝつたナ、何か喜之とやらか。畜生めェ金持にやァ何がなる。」ミ「貧乏人にやァ何がなるだ。ホンニおめへかゝさんの病氣は此の頃はどうだえ。」長「まだよい〳〵だァ。わりい時にお袋の病氣だから、一チべえ鹽梅しきがわりい。」ミ「おまんまは能くあがんなはるかエ。」長「ム、ちつとづゝ喰へるさうだ。」ミ「さうだぢやァねえ、おめへもちつと氣をつけなせえ。内には誰を付けておきなはる。」長「ムゝやとひばゝァをしてもおんなじこつたから、丁場へ出た跡にやァ、瘡をかいて居る野郎共や、建前からおッこちた居候や何かにあてがつて置くから、どうでろくな事はしねえのさ。」ミ「夫れぢやァさつぱり氣が付くめえなう。」長「ナニ氣がつくもんか。こつぱ喧嘩をしちやァ酒を喰らふことばつかり考へてらァ。」ミ「それについても、早くおめへの所へ行きてえヨ。こんな時が女房の役だのに、何をいつても金にかはれた身の上だから、しがくの仕樣もねえ。正直わたやァ、實のかゝさんのわづらふよりは、氣になつてならねエ。あつちこつちを思つて見ても、おめへもヂットおとなしくなんなはらねえきやァすまねえヨ。」長「ム、おれも禁酒でもしよう。」ミ「アレさういへばそんな堅い事を云ひなはる、何も夫れ程にせずともいいわな。」長「てめへがそんなにあんじて吳れるに、おらァよつ程不孝もんだ。けふ此の頃は己が氣でもつまらねえやうだ。ア、いつそ早く死ぬがましだらう。」ト、うつむいて大きにふさぐ。ミ「かうしていろんな事を思ふせるか、常不斷おめへの所へ行つた夢を見るヨ。」ト是れもふさぎて、しばらくとぎれる。長「ア、ふさいだ〳〵、ふさぎの蟲や赤蛙だ。おれもモウお袋が承知だから、はやく引つこませて見てえ。」ミ「きげんをなほし、さうしたら、色々な人が來て、けんくわばつかり有るだらうの。」長「何ンのきつい事が有るもんか。喧嘩や怖がつぐちをぶつ込んだの、出刃庖丁で、どてつ腹をゑぐるのといふことは、馴れツこになつちやァ屁とも思はねえ。ア、モウねよう。」ミ「ホンに頭になるのも附合のうるせえもんだネ。いかねえこつたが、お前日なしの口はどうかたづけた。」長「だまつてゐる。ト、せなかをつめり上げる。長「よせエ〳〵ゆんべ親分が所で、子方のやつらが中直りをしたから、よつぴてえねねエ。」ミ「いやだヨ情のねえ。まだ咄が有るから、ねかしやァしねえ。」ト、ゆすぶれどもしやァ〳〵としてこそぐりたり、いろ〳〵して横にねかさぬじやまァする。長「コレ、をがまァ〳〵、ちつとねかしてくれ。今夜はなほさァ。」ミ「直すさんのわづらふよりは、氣になつてならねエ。あつちこつちを思つて見ても、おめへもヂットおとなしくなんなはらねえきやァすまねえヨ。」長「ム、おれも禁酒でもしよう。」ミ「アレさういへばそんな堅い事を云ひなはる、何も夫れ程にせずともいいわな。」長「てめへがそんなにあんじて吳れるに、おらァよつ程不孝もんだ。けふ此の頃は己が氣でもつまらねえやうだ。ア、いつそ早く死ぬがましだらう。」ト、うつむいて大きにふさぐ。ミ「かうしていろんな事を思ふせるか、常不斷おめへの所へ行つた夢を見るヨ。」ト是れもふさぎて、しばらくとぎれる。長「ア、ふさいだ〳〵、ふさぎの蟲や赤蛙だ。おれもモウお袋が承知だから、はやく引つこませて見てえ。」ミ「きげんをなほし、さうしたら、色々な人が來て、けんくわばつかり有るだらうの。」長「何ンのきつい事が有るもんか。喧嘩や怖がつぐちをぶつ込んだの、出刃庖丁で、どてつ腹をゑぐるのといふことは、馴れツこになつちやァ屁とも思はねえ。ア、モウねよう。」ミ「ホンに頭になるのも附合のうるせえもんだネ。いかねえこつたが、お前日なしの口はどうかたづけた。」長「だまつてゐる。ト、せなかをつめり上げる。長「よせエ〳〵ゆんべ親分が所で、子方のやつらが中直りをしたから、よつぴてえねねエ。」ミ「いやだヨ情のねえ。まだ咄が有るから、ねかしやァしねえ。」ト、ゆすぶれどもしやァ〳〵としてこそぐりたり、いろ〳〵して横にねかさぬじやまァする。長「コレ、をがまァ〳〵、ちつとねかしてくれ。今夜はなほさァ。」ミ「直す

工面があるか。又こつちかぶりだらう。」長「しれたこつた。」ミ「夫れだから、猶ねかさねえ。」長「そんならどうとも勝手にしろ。」ト、うしろを向いて脊中合はせ、船頭「ハイお迎へでござります。」ちわをする間もはや四ツの鐘。

朝直の部

追而後編に奉入御覽候。

宵泊の部

趣向は出來あれども丁數餘れるをいとひこゝに不レ著。

（作者曰）予おとまが出所をかんがみるに、定めて本所邊の片外れに、御目印靑紙の▮と刷毛書の水油有りの障子を立てたる、九尺店のろぢ口、本道外科と割りて書いたる醫者の表札、さんけ〳〵の梵典と共に、雨晒しとなり、屑家葺の棟割に蛇の這ひ出る流し元、大やさん鐵棒を引きずり、火の用心ト觸れれば、鄰の飴賣り向うの神道者に雇はれ、はつち坊主の木魚、花賣の火打筥と朝飯をあらそひ、神儒佛もみ込みの大長屋に住む親仁といへるは、屑ハイ〳〵にその日を送り、夜はよもすがらおでん白菊鹽梅よしも、內の工面は鹽梅わるく、母親の賃仕ごとも、おり、南京小紋に鳴海絞りのつぎ〳〵。油揚の如きを引ッぱり、うどんやの汁つぎをもつて、醬油

を六文壹文の糠袋、ふすま磨きの小娘なりしも、十五といへる春のころ、親仁が中風の爲に、終には金にかへられ、そも成長つてひらふとの半えり、縮緬の二布錦々たるといへども、心は生來をうしなはず、さきに著はしたる新川の伴頭、鳥居町の息子株を廢して、かかる貧困の俠客に實情を盡す。是なるか、非なるか、嗚呼是非もねえ。實や、色は思案の外とはいへど、迷ふといふも、悟るといふも、色道の識不識に依るべきか。世界の通君子、ソレさつしてお見なんし。

跋

式亭主人戯作の力任せに、古石新石を穿ち、是れを新手に持つて、土題となす。僅か石なごの玉、ふせたりと雖も、礫にうてる座鋪もなく、將投けらるゝ脉だにあらず。されば閨夫につくせる實情には、望夫石をも輕石と安んじ、「コンコーリキ」「マカリキ」の古ならで、方言能く通じ合へるは、鸚鵡の潛めるかと疑ふ。眞の咄の昂じては、夜啼きの石も珍らしからず、髪の飾りの風流なるは、赤松仙が羊の手際か。何にもせよ、未だ一部の碎けも知らず、猥りに玄能を打振り、唯野暮にもてるといふ而已をもて、五十五貫目、内一巻中ツ腹にしるす事しッかり。

鈍々亭主人祭和樽述

羽根なくして百增の豬牙、魂と共に虛空に飛び、手撫くして癡夫、克く傾城をあやなすとは、是れ錢述の德ならんか。這箇先生、ぶら提灯の光を以てゆふしけふしの日牘を探り、妄言の趣向をかきがら道、おもひ辰巳の古石を見通す、其のしやれたる事、新地の端の棒杭に等しく、予も又此の書の一座に加はり、チヨビとおんぶの跋文を認め、卽ち三馬子へ贈り申す事しかり。

式亭門人
樂山人馬笑

巽濱の水清めらば以て朝歸りの口を嗽がん。巽濱の水濁らば、以て陸歩の足を濯はん。清むと濁るは客と密夫、實の眞水に乘り出すあれば、虚をつき出す八幡鐘に、是れ幸ひの引潮あり。ぴんと心の空鎖は、彼のピラ〳〵の後簪にして、娼妓の心底を見しらせ、五大力の銅物は船頭の煙包に附いて、逆斥の无難を祈る。夕の癇癪朝の更しと變り、きのふの再會けふの玉章、御歸らせの跡々にて、しみじみ苦勞の正札附、只御身の上不大切、勝手次第の出來合文句、必ず〳〵御はこばせ、御めもじの上ならでは、わからぬ事もわかるのも、通と不通の中縞街、旨趣は勿論古市場を、復新しく後編に、全部一本筥を立て、一川屋々々々と云爾。

ソレ御馴染の

四　季　山　人

七年ぶりにて小本を作

附言

明の翟宗吉が煎燈新話にブツツカリ、船頭深話と題號を、ヨビダシならでフセたる而已。趣向をモラヒマハシにあらず、一寸外題にクチヲカケ、秀句にナホシた許りにて、彼の御ナジミなる、辰巳婦言の跡をツケ、板元が御ムカヘを防ぐ。女郎一人に客三人、一座ノモメのスミスマシ、一部始終をチトアチラヘト、全部仕舞の札をさぐるといふ。

○青樓のしやれ本は遊子方言、契情買指南にはじまり、田螺金魚が虎の巻に冠たり。辰巳のしやれ本は美地の蠣殻、辰巳の園に始まり、而後逢萊山人歸橋中古に申したり。其れよりつゞいて諸名家の戯作、年々に增り、月々に倍す。予が輩いかんぞ能く穿つことを得べけんや。青樓辰巳の小冊、毎部の趣向ことふりて、皆相似たり。故に先年先人の糟粕をねぶりて、辰巳婦言一冊を著はす。幸ひに世に行はれり。尤も古市場の小說、他に類書なし。依レ之則ち後篇を作して以て外場所通の一笑に備ふる而已。

○文法は前編の如く鄙俚片言を以てす。たとへば、

「さやうではござりませぬっ」を、「さうぢやアごぜえしねえ。」「御出でなされませ。」を、「おいでないまし。」「このべらぼうは。」を、「こんべらばァ。」

右のごとく畧語する事多し、推してしるべし。

辰巳婦言 後編

おなじみの

四季山人撰

船頭深話發語

遠き宿昔鎌倉の、都の巽しかも名も、大磯小磯化粧坂の、戀計にはるか越ゆればとて、手越の宿と稱呼せる、放心蕩肝の娼街あり。千門萬戸に酒色を鬻ぎ、美惡を競ふが其の中にも、兼て名高き市場の繁昌、今更筆に云ひも盡きず、羣れ來る若干の嫖客を、迎への船と送り舟、參差ひたる行逢川、彼方に連牆の牡蠣殻は、廊下に束ねたる紙屑を思ひ、此地に山をなす蠣は、新地樓をや叶きけん、遙に望む榮鄭橋、字餘りの潮來曲と俱に長く、藍皮町の火見櫓は、遊妓の氣性に似て高し。されば釣舟に鮮魚を漁り、枝藏に名酒を湛ふるとも、爭でか及ばん。娼閣の結構、酒池肉林の歡樂を、爰にあつむる全盛は、實に大都會の金藏の、財を費す土地にして、慾界の別境、昇平の樂國なり。そも此の風土を鑑みるに、虛と實の汐境にして、はまれば深き川竹の、流れの身なる浮沉みを、汲みわけてしる

在行あれば、突き出さるゝ竿頭遊びは、誘ふ水の水心をしらず。つら〳〵想ふに、客は船なり、娼婦は水なり、戀の重楫、情の取楫、楫のふりやう悪しければ、傀儡の浪、客の船を覆し、つひには一生をあやまつに至る。其の船催ひの樣々なるは、出舟千兩を費して、逆戻の最期屁を、充滿坪へ放り飛ばせば、入船千兩を擲つて、金屎を河西へ贈る。卽ち放蕩の發りは若何、タッタ一個の尿洞なり。たとへばォ、さむいよと、しめつけられては、一雙玉手千人枕なることを忘れ、エ、じれッてえまゝならねえの惑言を聽けば、われ獨り嘗むるやとおもふ。是れを和漢にこじつけて評すれば、一度離き茗を喫して、淫聲の總劇曲を闇記すれば、朱子伊川も魂を、「お近い内。」に蕩すべし。伍子胥棧橋に眼を止めて、四神舍がお浮雲うと見送り、『センボ』の方言揚雄もいまだしらず、初會に出る娼の佛頂面は、褒似も闘睨は、及ぶべからず、口の懸るに無鹽君、閑いて居る妓に小町あり。片道送ッた黄頭郎は、范蠡が五湖に似て、亥後刻の子門は、樊噲が鴻門に一般。こゝに哀れをとゞめしは、「朝更し」の俊寛、傭舟の贅償と共に、戀別を惜しむ。絶交れて未練の班女が思ひ、變愛妓の祇王祇女が心、只是れ美麗によらず、嫩黷によらず、愛則愛之雲雨の情、最愛と思ふ花孃の念力は舟舍まで屆き、可愛と思ふ客の執心は、九族昇天、艶容に戀慕む浮虛の容は、倍棄れての後悔あり、金に恍惚れたる慾心婦は、實に思はぬ手鍋を提ぐる。此の時旣に落魄たり、夫れ能く契情の所謂、能い月日の下を羨む事勿れ。

苦界榮枯、世帶貧富。

首鼠兩端の年明まへ、「ァ、なんとせう、まゝならぬ。ツトンチャン。」

船頭深話

第一齣　自二榮鄭橋一至二古市場一話

（黄昏刻の光景を看るに）維れ時春王正月、松すぎて五七日のころなり。大川につなぎたる舟のかずかず、あるが中にもふなばりの松かざりを取りのこしたるに、奴凧のからみ付きたるは、是れ辻番の親仁に、骨がらみの意見かとをかしく、實に繁昌の大湊、出船入舟先後を爭ひ、漕ぎ入る、押送りは、水がらくりの百足の如く、漕ぎ去る舟の水あしは、御膳むぎめし溫かいを喰つて、六人前の橋錢を貰し、箔代建立の羅漢は、小サキ笠を著て、雪踏なほしの定見世に鄰れり。當日守護の錫杖、旦那さまごほうしやの聲は、英鄭園子のなうれんとともに、川風に吹きまくらる、丁子茶の裾をとらへて、黒縮の頭巾たもとにぶらさがりし突袖のきり、しやんは、掛廻りの女なりと見しはひが目か。高尾の茶見世へにつこりとして、「オヤをばさんお休みよ。」と一寸愛敬をくれたる捨てぜりふあり。かかる所へ新堀花水橋のたもとなる談義場の油蟲、餌ひろひの子供大ぜい、むきみ殻あさりの調市まじりに、桶を一荷の坊主持ちにして、からかひのぞめき

詞に、チアエ〳〵の詞くせあるも、鄙ぶりて一しほをかしからずや。建長寺の七ッ坊主は、干見世の三體詩と拍子木を懐にして行き過ぎ、扇が谷の番替りは、はさみ箱の棒のさきに、下駄と辨當をぶらさげたり。辻觸れの番附ちらつくばかりにて、かい帳の札、さらによめがたき時、洲管を過るとまり鳥あれば、かぶら堀を越える夜鷹あり。其の交加の千差萬別、東南へ走り、西北へ去る。はや鶴岡の晩鐘に、四方の肆門戸さして、髪結牀も舟人も、又明日と夕閒暮、鎌倉雪の下新堀にかゝりたる、花水橋へ漕ぎかゝる、一片の蘆葉船。（作者云ふ。）前篇辰巳婦言にて皆さま御存じの客（長五郎）正銘二分程のさかやきには、けはべつたりと長くして、三日市柳の下の五郎が牀で、さらひたてのひたひ、尤も水髪なり。衣裝付ケ、上著は結城つむぎのおとなしきしまがらにて、下へ本八丈のぱち〳〵したる大縞を二ッかさねて、花色繻子のはゞせまき帶を結び、纏長といふ二字を銀と眞鍮のひよくの金物に打ちたる三度縫、大津さげのせいしつのたばこ入れ、『るりこん』の合羽も、『半えり』『見返し』はお定まりのびろうどヲひねつて、此の頃拂底の『黒らしや』にてこしらへ、出入場の若水手拭に貰つたそろばんしぼりを肩にかけて、『あんか』へ『ふとん』をかけて小聲のそゝりうた。○但しこれを字あまりのそゝりいたことも、そゝりぶしのいたこ落しとも云ふ。

「わしが色男は、神田の八丁堀の酒屋の御用さんでござりやす。」「オイまだ〳〵。」「はやことにてノリ朝の六ッがゴンとなるから、晩の六ッがボンとなるまで、本町や石町や、裏店小店、雪隱の後や、掃溜の鄰を燗鍋ちろりとつくり提げて、御用はよろし、〳〵、御用は。」是れよりいたこ。『よろしうと、云うてあるく、ソウオミ引。』船頭「すべて此のせんどうは江戸ッ子でなければ、きはめて上總房州の者なり。廻りの髪結と同日のろんなり。モシがうぎとさえるもんだね、おめへさん夕やけが仕やしたぜエ。」長「夕やけだか朝やけだか、やけ酒をかつくらつて居たら、マア聞かッし、赤金やらうが喧嘩の中直りだつて、めど橋の枡樓で又やらかしたわ。ナントこれぢやア、義理にも醉はざアなるめえ。」船「そいつは大呑みだネ。しかしわつちらが表の枡樓は、普請近來猶よくしやすヨ。」ト、咄しながら花水橋をくゞりかゝるところへ、橋のうへを大ぜいぞろ〳〵、淺葱むくをかけたる葬禮のこしを、よい〳〵わい〳〵ではやしながら、ゆすぶりちらしてかついでとほる。いさみであひの其の中から二人り○大べんけいのひとへものを、藍へ一ぺんひたしたどてら布子に、懐は大きくじだらくにして、ざくせんのはひつた二ッ折の紙たばこ入れへ、きせるをはさんで、半紙のかみ二帖二ッ折に引きくるみ、三まいうらのしもふり雪踏、あたまは水髪の五分さかやき、中ぞりばかりそりたてで、髪の間から白くすきとほるまげぶしの間へ、七色茶づけから持つてきたやうじを一本さしてゐる。今一人は衣裝付けはみえねど、どぶねずみの火事羽織に、ちりげのあたりへ鐵といふ字をいとぶせにぬはせて、びろうどの半えり、あたまは同じ仕立にて、橋の上から立ち戻つて、○「オ、イ頭ぢやアねえかい。」△「親方々々。」二人「けふはどつちの方だエ。どけへいきねんすエ。ウムなんだネ、向うかえ〳〵、跡から行きやすぜ。」ト、あごでしやくりながら大きなこゑ。長「誰だ、オイ御苦らうだな、行つてきや。ア、コレおれが名もナ、帳へつけさせてくりやナ。」二人「アイ呑みこみやした。」長「たのむぜ。」二人「いつてきやせう。」ト、船と陸とでわかれる。とかくするうちに船は新石場のまへへかゝるに、三年屋の角から二三閒めの二階で、かゝらだをふりまはしてうたふやうな、いたこがきこゆる。『心つくしておくりし文も、ぬしは茶にして枕紙、ま

たはやぶりつ、くづはござい〳〵、まだくづはたまりませんかな。くづはございの笑ひぐさ。サアササ、アサノ〳〵ちよいときなせえ、ヤレコリヤどつこい、錢がなか質よおけ、質よおいて酒のめ、あまりで女郎買へ。ソレ〳〵ソレ〳〵〳〵〳〵〳〵ソウ引。』などと大さわぎがきこゆる。長「コウこゝの表二階はがうぎだぜ。」船「古市はふせだまばかりだが、新市場はふせもありやすが、てえげえよび出しがたんとでごぜえやす。古市も内によつて、表二階もするけれど、マアあつちの表二階といふものは、子供部屋さ。それだから正月も松の内に行くととんだおもしれえネ。わつちらがしんになつて、いろんなことをして遊びやすよ。そして内所ぢやアネ、藝者があつまつて茶番をして、さわいだり何かアするから、モウこてへられやせん。」長「そいつらが遊びにほけて居る處へ、しまひの客がきたら、慾ばつちやア居ても、うんざりだらうス。」船「ソリヤア違へねえ、コレごらうじやし。ふ景氣だといつても、此の河岸をみなせえ、べただア。」長「ホンニナア、どこのうちもぎつしり舟がついたぜ。」もはや日もとつぷりくれて、古市の橋をくゞると、向う河岸の大和屋の内から、大の字のぶらぢやうちんで、二三人の客をおくつて出る。（客）唐棧の小風呂敷を脊負つて、かたへかけた手拭のあまりを風呂敷のむすびめへはさんで、はおりのひぼをしめながら出るは、何れもさんとめにふとりかつむぎの羽織、人物は新川の掛取とみえたり。△なまけたこゑで、「白いもオのオがなアがアれた。ア、ヤアレヤアレ彌兵、々々、あぶねえぞあぶねえぞ、まア爰で一番ひよぐるべい。」ト、小便をしながら酒のさめぎはといふあくびを二ツ三ツ「ア、〳〵〳〵引チツト早かつたア。とぼし迎へときちやア、おツそろしくいそがしい、チヨツいめえましい、五明にすりやアよかつた。」□とぼしむかへとは、くれ六ツ過ぎなり。五明とは、五ツの鐘カツキリをいふ。○「また未練をぬかすやつさ、ゲイ、フウ。」ト、もやひにつらまりながら、船の中へはひ込み「オツトまて〳〵壹人ヅ、こい〳〵、あぶねえぞ〳〵。イヤどつことしよ、ア、掛聲ばつかり氣がきいてらア。」ト、みな〳〵船へのる。その内長五郎が船は曾代多屋、大智屋、富貴岡、曾代倉と過ぎて二川屋の河岸へつく。船「オイ當らア〳〵。どうするのだ、出すのか、それぢやア替らねえ〳〵。」ト、おもかぢへとつてやね船と三丁のあひだへ、一ぽんぐつと棹を入れて、「オツトこ緣を。」長「よし〳〵。」ト、長五郎は、兩はうの舟を、手で引きわけると、山口稻荷の石垣のわきへのりこむ、舟はシユウ引ツとかしへつく。船「二川屋ヤ引、二川や〳〵。」アイト、返事をして、河岸揚の若者がんぎへ參り、棒ぐひを片手でとらまへてぶらをさし出し、若者「どなた。」長「だれでもいいあげろ〳〵。」若「佛ちやうづらにておまへさんおなじみでございますか。お初會ならお座敷も、子供衆もござりません。」船「だれだ喜八どんか。」若「イ、エ。」船「ア、こんたぢやア分らねえ、引つこまつせえ〳〵。」若「オヤ山城やか。こりやア御免なせえ、どなたかと思つた、サアお靜かに。」長「此の男も、ホンニコレしつかりさつせえ。」ト、せなかを叩いて上りながら、「コウ早くきさつし。」船「アイぢきに參りやす。」ト、ふねをかた付けてゐる。若者「さきへた船どうのはうへふりかへり、ちくゞりを明ケ、お客だよオ引。」△「アイ引。」むすめ分の女、「どろ〳〵と二三人あがり口へ出で、オヤ長さん、よくお出でないましたネ。」「ソレおつれ申しなア。」△「アイ引。」長「ア、がうぎとさむいぜエ。」ト、いひながら、はしごばたばたゞ、河岸あげのわかい者は、舳をかつぎこむあとから、ふとんとむしろと火なはばこをいつしよにもち、片手へあんくわをさげてあがつてくる、かどぐちで、船頭倉「よろしく申してくんねえよ。」ト、すてぜりふ。娘分「とんだかんば、しつた聲で、倉どんか、おめへ寒いのによく來たの。コウさうしねえよ、おらが内なんざア七夕

にしておくがいいのさ。」船「またいためるもんだ、おれがきたくつてもお客がこねえものヲ。」廻し「オヤ倉どんか、よくきたの。おめへよく道をわすれねえの。」船「アイサ聞きながらきやした。」廻し「フムさうだらうヨ、此のごろはおめへの道は紫蘇繼だといふこつた。」船「よしねえ、ホウけたりふんだりもいい加減にしねえよ。あんまりいぢめると蟲が出らア。」若者「ホンニサ、かはいさうに。」廻し「エエあきれのむしが出るだらう。おみかぎりか、お四日ぎりか、何日にも顔出しもしねえで、そして。」船「ア、うるせえ、マア行つて來て聞かう。」ト、はしごをあがり、「オイ長さんのお座しきはどこだ。」出し物を持つた女きたり、「倉どんお座しきか、つき當りで左へまがつての、抜裏から新道へ出て聞きねえよ。」船「コレ久しぶりだと思つてみんながいぢめるナ、おほえてゐねえ。」ト、障子をあけてはひり、「オヤ此の火鉢はまつ白な火ばかりだ。」手をたゝく。長「今に持つてくるだらう。」廻しお八重「長さん、おまはんマアきついもんでございますね。今夜はどういふ氣でお出でなさいましたエ。」長「かういふ氣できたのさ。」ヤ「オヤをかしい氣でお出でなすつたネ。」ト、茶椀を二ツぼんの上へのせて、片手に十能をさげて來りしが、火鉢へとりわけてゐる。をほり出してたばこぼんへ捨て、酒のかんつた火鉢のふちをらうそくの紙でみがき、燭臺二ツへひよくらふそくにして居る。その内こじよくが杯臺を持ちくる。入りかはつてむすめぶん（おいと）てうし硯ぶたを持ち來り、サアお一つおあんないまし、亭主役に始めませうと、杯一返廻りてお定まりのせじばなしもすむ。杯　長五郎「何トあんまりじみるから、藝者をさう云つてくんねえ。」娘「ハイ〳〵だれにいたしませうネ。」お八重「長さんなら誰といふ事なしだからマアききにやりませう。」

長「待たツしョ、誰がよからう、コウト、つかねえこつたが、三馬が出した辰巳婦言にやア、目ツかちの春次を呼んだがあれもかはいさうに故人になつたなう。」長「さやうさ、久しいものだつけ、今で又めつかちのあとつぎが出來やした。」長「誰。」八重「松藏さんが。」船「ウム。」長「ほんにさうだつけ。髪の土地にやア兎角めつかちの藝者がたゝるの。」娘「ア、悪い評判だヨ、松藏さんが聞いたら氣にするだらう。なうお八重どん〳〵、指和屋ア呼んで見な。」八重「アイ。」ト、云つて見通しの屋ア引。」此の指和屋といふは、二川やの○遠くで、うらにゐる見番のことなり。戸を明ケ大きな聲で「指和屋ア指和藏さんはあるか。」きこえず。「松藏さんはあるかよ、松藏さアん引よ引。エ、じれツてえ。」その内きこえる。「あるなら早く。」ト、戸を立てはやし。「倉やモウ一組よんでくりやり〳〵。」船「おめへと一ト組でいいになさり屋引、外に誰があるウ。ナニ時太夫さんか。モシ時太夫さんをはやくよ引。オ、さむ。」ト、いひながら見と「オしれえ〳〵。」八重「大きな聲で、松藏さんと、時太夫さんと、ほしの戸をたてる。ヤなんだ見せな、コウ倉どん見せろといふのに見せねえかヽうぬ。」ト、うしろから船「腕づくなら見せよう。」八重「ウ、こいつアおもしれえ、おれが又うでづくでとつたらどうする。」ト、ひつぱり合ふは是火繩箱にこしらへた「こりやアおれがもらつたよ。」れはどなたも御存じの小サなたばこなり。船「どこをおしやアそんな音が出る、こゝをおした

ら屁が出るだらう。」ト、お八重がしてあきれらァ。」船「ホイちつと来ねえうちに好い口になつたの。」八重「アイサごめんよ。」此の内始終杯事あり程なく松蔵。時太夫。三木蔵。彦「どろ〳〵とおしかけ、らうかのまんなかで、時「ハイ松太夫時蔵参りました。」松蔵「コレなにヲいはつしやる。」時「なむさん名をはきちけへた。」榮蔵「よくみればいい松蔵があたまで。」彦「オット舞臺へさはるぜ。」三木「ホイこれはしたり。」松「はけ奉る御同然か、ハ、、、、。かはいさうにまだはけもしねえ。」彦「ア、繪馬々々しい。」ト、あたまを隠し、松「モシちと物が承りたうござります。」娘分「なんだえ。」松「此の御近所によしの屋松藏さまと申ス色男はござりませんかな。」娘分「アイイ、エいろ男はしらねえが、めつかちならございやすよ。」松「おきやァがれ、また喰らッたァ、アハ、、、、。」三木藏と彦は三みせん箱を持つて入り、いづれも座になほり、一ぺんすういと見て、時「イヤ長さん。」松「これはおちかいぶりでお目に。」四人「ぶらさがりました。」ハ、、、ト長「どうだ〳〵。」時「扇をばち〳〵しながらそら笑ひ。からだをゆすぶつて、イヤモどうとまうしましても、どうは此の通り三味線に有ッて、やつぱり藝者を仕りましてござれば、そこでもつてからにやはり、エヘンかたのごとく」松「ア、やかましい口だ、コレかたのごとく藝者をいたいてをるが、又なぜおのしやァかたのごとくで、かたのごとくだよ。」時「ハテわるく聞かッしやんな、松藏がの。」松「松藏さんは女房でももたしやんしたかえ。」時「ウンニヤ松藏が目玉が。」松「ウムおれがお目玉が。」時「やつ

ばりな、ソレかたの如くだよ。」松「此奴も同類だな。」ト、にげ出すを追にいぢめられる。コウ一ツきめさつしな。まだ顔がきまらねえ様だ。」ト、さかづきをマアやらかせ、ナンノこれ錢の出ねえ酒だアエ、なんだよウ、きついしやれさ。」ト、つめる。松「おいとさん、おいと〳〵おいとト、、、。」ト、さがら、顏を松「此奴も同類だな。」ひかけるまね。しかめる。時「サア〳〵ア、待ちどほだ。お杯のおあきはござりませんかな。ハイ〳〵是れは〳〵。」ト、杯をとり「しよじ酒の事だ、寧そ三味線を法度にして、酒ばかりといふ法にしてえ。コレ女子共銚子もて銚子もて。」八重「オヤあきれけへるよ。そんな口をきくと罰がたかるよ。」時「ナニばちがたかつたら熱湯をぶつかけよう。」彦「たかつたら煮て喰ふ罰も好き〳〵だの。」時「コレ何をいはつしやる。」松「お八重どんコウよしねえよ、いい年をして生々しいことを申し上げルの。」八重「ナゼ。」松「罰がたかるもおそろしい、ネエ旦那。」長「うさアねえ。」娘分「ナゼたかるといつちやあわりいか。」松「又一ト幕出ルよ。」時「コレよくつもつても見なせえツサ。藝しやといふもなア、親のばちと三味せんにばちがあたつてゐるから、此の上のばちはおらア有んめえとおもふ。」ト、向島のこわいろ。大ぜい「アハ、、、、、オホ、、、、、フハ、、、、。」(作者曰)此の内にげいしやの悪口、大ぜいのむだあまたあり。さりながらげいしやをあげてしやれる所は、どなたも御銘々に御存じの事ゆゑ、こゝにはしるさず。又云、げいしやの通り文句といふは「げいしやをやめて藏造りの質兩替を始めます、しかも質はとりません。」田地をうつてあの子をつれて引込

みます、オヤかつばのやうだ。」ナドト臨機應變の出はうだいも、毎にち〳〵ひと つ所をつとむるものなれば、みなさだまつた紋切形なり。よつてこゝに畧す。　船「お八重どんおとまさんをはやく出し申しな。」　八重「今にきなはるヨ、長さん今晩はちつとおわるいネ。」　ト八、おとまが今夜客が有つて座しきへ出てゐる故さしづめ名代といふ所を深いなじみなれば、いつも　船「また廻しか。」　長「なんでもいい、來ても來ねえでもいいわな。雨のもらねえ巢をこしれへて、あつたかに寐て歸りやア、これでいいぢやアねえか、ナアおいとさん。」　娘分「ヤレまた世事がはじまつた。」　五郎がなじみの（おとま）衣裳付、そめあがりのばつとしんに折鶴の大小をちらしにつけた裾もやうのうちかけ、たあるおなんどちりめを著すべてかのこづくしにてひぢりめんのじゆばん帶をしめ、白ちりの長ゆもじにて、髮のむすびやうは辰巳婦言の時代にあらず、五六年此のかたの仕出しにて、髻さしを長くしてうしろをひつつめ、たぼは上のはうへあげて、水がみにふつくりと少シ出し、まげの一をぐつとあげて中のひくき大しまだ、まへ髮をすつかりとそろへて切つて、かんざしでおさへた姿は、他所へ出してもあたまばかりで辰巳仕入と見えたり。　おとま「長さん。」ト、ずつとはひつて火鉢のそばへたてひざですわり、「ア、ぞく〳〵してならねえ、松藏さんおめへ賴んだ事をどうした。」　松「なんだつけネ。」　ミ「ソレおめへさんなんざア、さういふ情なしだわ。」　時「何松藏に賴んだ事はあてになりやせん、私に。」　彦「トまうしてもやつぱり。」　三木「せんじやう常のごとし。」　ミ「そりやアさうと今夜はモウ不景氣だつちやアねえ。」　長「ナゼ。」　ミ「なぜとつて聞きねえ、まはしがこれだものを。」　ト、ゆびを三ぼん見せる。　大ぜい「ヨウ引。」　彦「そんなら晝間つからの客人もかえ。」　三木「モシいい麗をおとんなすつたネ。」　松「せめて花にでもあたりてえ。」　時「又よくばるやつよ。」　大ぜい「アハ、、、、、。」　ミ「長さんおめへ待つててくんねえ、いつてきて話があるから。」　八重「おとまさん。」　ト、立つていつて　ミ「いいわな、うつちやつておきねえな。」　トひすててらうか　船「サアのまう〳〵、長さん一ッ上げませう。」　ト、へ出てゆく。　「オットきた〳〵。」　ト、杯へうける　ツグにかぎらず、ちひさな杯へちつとづゝつぐこと、どなたも御存知なるべし。此の内にげいしや四人にて茶ばんなどありて、大さわぎもいちだんすめば、さんサアあちらでおあんなはいませんか。」　長「ウムよからう。」　トキニなんぞ此の頃ア新ものは出來ねえかの。」　時「へイさやうさ、モシもう赤い切レがなんがれたでもございますめえ。此のあひだ潮來の前引をこしらへました、ちよつと一つ。」　藏は、松藏と時太夫はひざを四角にして扇をしやにかまへる。彦と三木ト、松藏は、三みせんをひざの上へだらりとあげて、うでまくりするまねをして、サアこい〳〵などとういて居る。（時松）　三下り『梅の白あけみそめて染めて、ついした事が尉とうば。』あたまとひざをむしやうにゆすぶりちらして　合『末のするまで思ひん〳〵。』　合くせり『候べくそこらでいかぬ女郎なら、打遣れ〳〵障り次第にあてるがいいのさ。恥をもとでにくどいて見なせえ、三分にやまはる。』　合ツシ『あうていはれないことの葉ならば、筆にいはせろ、さ、なんでも好きにいはせろ。戀の仲立ちは筆ぢやもの、オ、筆ぢや物。けん毛を引くのは御免なれ。』　詞『いたい。』　ッシ『いたいわいな。』　合詞『オ、いた。』　イタコブシ『いたこ好く樣なはきなぬしにエ。』　合『ナゼ〳〵ほれた、わたしが身の因果。サアサヤレ〳〵、ソレ〳〵〳〵〳〵〳〵トウ引、うぬ〳〵〳〵〳〵。』　大ぜい「サアちとあちらへ。」　松「コレ三味せんをどうする、うつちやつてしまへばいい。」　時「すぐに藝者をやめるか、あごをつるすか、二ツ一ッだ。サアござりませい。」

アッ、テン〳〵ッ、テ、チツチテンツ、テン〳〵。」松。時。遙三。船　其の外大ぜいらうか『松は住吉明神さんの御神木、見事に青々と。』『沖にたゞよふ帆かけ船、霞たなびきちら〳〵淡路島。』『かよふ千鳥の女夫連、ふたりが中は二世も三世もかはりやせぬ。』　長おくられながら、はしごをおりて小便所へゆく。　大ぜい「きよめの御手水御手水。」　長「これから〇〇〇〇〇〇〇。」時「あり難え。」小ごろ『竹に柳は八幡さんの御神竹、みごとにのびたとき、のびる其の竹どうぢやいな。』『雪がつもりてしば〳〵旭さす。』『解けさんすのがわしやうれし。』大ぜい『ふたりが中は二世も三世もかはりやせぬ。』女「ア、さう〳〵しいよう。」松「みどもらが下宿はいづれぢや、コリヤ。」長「松こう此のごろ月夜河岸で見かけたつけ、あの日にヤア何所へ行ッた。」松「ハテネかうと、エ、ソレ〳〵十日の日に、空の門の初毘羅參りでござりました、ソレ手前といつしよに。」時「ム、あの日にやァネ、モシをかしい事がございました。」松「シイこりや聲が高い。」女「ハイこゝでございます。」ト、ざしきへいれてまはし、まくらのお定まりをとつて、紙けてある屏風をたてて、女「お羽おりを。」長「此のまゝでいいぜ。」ト、わたす。「サア〳〵行つて慾ばらつし、モあんどうかき立て、ウよし〳〵。」大ぜい「さやうなら此の間に。」ト、皆々はしごをおりる。(長)は上著をぬいで枕元へなげ出してま(船)は長五郎がきものを袖だゝみにして枕元へなほし、金入から金をだして紙入をふとんの下へはさみ、たばこを吸付けてはなしてゐる所へ、(八重)ぼんのうへ茶を一ぱいのせて、火入を片手にもつて、しやうじを明ケながら、「コウ〳〵おとめどんか、道川岸の傳さんが來たぢやねえか。」女「ム、きたよ。」八重「いい蟲だなう。コウ〳〵おれがさういふッての、『コウおッつけ晦日だから、かたァつけておくんなせえ、宜しくおたのん申しやす。』といひねえな。チツトその位なこたァいつてもよからう。」女「さうさナウ。」ト、帯にはさみ、ふとんのうへ〳〵大あぐらになつて、紙いれをなげ出はさみ、たばこを吸付けてはなしてゐる所へ、(八重)ぼんのうへ茶を一ぱいのせて、火入を片手にもつて、しやうじを明ケながら、「コウ〳〵おとめどんか、道川岸の傳さんが來たぢやねえか。」女「ム、きたよ。」八重「いい蟲

トは此のうはさの客人、さかりの滯りをたび〳〵船宿までせがまれて、あいさつなしの押しをつよくきたやつとみえたり。八重「イ、エサ、ちイつと譯のあるこつてございます。」船「モシ今夜は宵立になせえやすか。」八重「ナニ宵立ぢやアねえ、お歸し申しちやアおとまさんへすまねえ。所詮おとまりだ、ねえ長さん。」長「マアさうさみれん中、いづれもあだ名を一つづゝ持つて居る一人なみのきほひエどうするんだエ。おいらア、からつきり土地をしらねえから、鹽梅しきを賴むぜえ。」おさき松「是れは別けてまき舌なり。　オイもンしえ、わつちらアおめへ、田舍もんでござえやす、アイおたのん申しやすエ。エ、とはうもねえ、壹人引の車引か、こけが湯へ這入りやアしめへし、闇とお賴ん申しやすだ。エ、人をつけえにした。」「エ、とはうもねえ」「こけがあゝ喜」鐵や、ナニ松ヤイ、あんまりさわぐなエ。てめへッちやア場所を踏みつけねえ樣で、かつかうの惡い事をしらねえ。コウあねさんうつちやつておきねえ。あいつらにかまひなんな。ヨウ〳〵そりやアいいが、長親方が座敷アどこだ。」女「ハイ奥二階でございます、此方へお出でなはいまし。」ト、先に立　鐵「なん

だかべらぼうに長いぜえ。松や爰の部屋ヲみや、いい居拔だぜ。戸障子から屛風唐紙、寢道具まであらア。鍋釜ヲ持つて來ルと、そつくりいひぶんなしだ。」吉「その氣で樽代の貳百はおれが方へよこしや。」松「オヤ恐ろしい、そんな事ア、貳百やにして置くべエ、エ、、人をつけえにした。」ト、いひながら、らうかのかみくづをふむ。「エ、きたな、何だか踏付けたア。」吉「ざまアみや。」鐵「いい氣味だア。」松「待ちやナ、子種を踏んびしいだ。どこの馬の骨だか、エ、とはうもねえ。」女「長が座敷のしやうじをあけて、長さんお一人かえ。」長「屛風の内にて　オイ何だ。」女「どなたかお連衆がお出でなはいましたヨ。」長「誰だ、こつちへ這入らつし。」長「親方跡からしけ込みやした。」長「オイみんなよく來たな、此方へ這入りやな。」二人「アイ。」松「長さんの前ぢやア氣がつまらア、何所ぞ小屋ア變へやな。吉、てめへ足場にかゝつてくれ。」鐵「をばさんにさういやな。」吉「ナニをばさん。馬鹿ア云やな、十九やはり文庫をつらめへて。」女「モシばゝアが相應でおぜえまさアな。」オホ、、、、ト立つて行く。長「マアこゝで呑むがいい、コレてめへッちやア又煮奴で湯桶酒をくらつて、引導前にはづしたんだらう。松や手めへでえぶいいべゝを引張つたな、ゆかん場からそつくりぢやアねえかノ。」松「ア、コレ親方よしてくんねんし、ちゝんぶい〳〵、七里けつぱい。しかも此のべゝの質利けつぱいだ。」鐵「なんだつて、おめへ葬禮とあそびの出ぞめだア。」ト、はなしの内女きたりて、「サアもしおまへはん方ア、こつちらへおいでないまし。」松「オイしめたぞ〳〵。」鐵「おめへどうしても働きもんだぜえ。」松「いい子だア、おめへにやアコレ葬禮の強飯をやらう。」女「エ、きざだネ。」吉「ホイ此の子もかつぎ人だな。」松「かつぎ人なら佛のゆれねえやうに、跡棒へ廻ればいい。」鐵「はつつけ生靈め。」ト、こはめしの包みがみではなをかんだあとを、格子からすてる。女「オヤこはいねえ。」松「アレサこはめしだといふに。」ト、立ちながら、「そんなら親かた。」長「オイ。」吉「おめへ一人かえ、女はどうしやした。」ト、あひ方の事もへちまもかまはず、女郎の事を女々といふが、此の連中の通り句なり。長「今夜は廻しだア。」吉「ホイ其奴ア出入やア出來ねえ。」二人「アイ休みねんし。」ト。三人女を先にたつて、表座敷の方へ行く。引違へてあひかたの女郎。おとも「ちやうじ茶ぢりめんのねまきへ、三寸はゞの花いろ眞田をしめて、みす紙を口にくはへた少しうつむきすがた、左のそでをあふりながら、右の手は、きもののまん中でつまをとり、「ぬまあし」で、障子を明けてはひる。かかるさつぱつの土地なれど、長五郎がごとき馴染はかくべつの事なり。ちよつとしたるなじみの客、三座しきも落合ひたる時分、座しきの閒數も遠からぬ事ゆゑ、大きに心づかひをする物なり。うた辛氣辛苦の癇癪も、酒ほどうれしいものはない。オ、小便に行つたらとんだ寒くなつた。おめへよく寐入らねえの、ソシテマア〇〇〇〇〇〇〇〇。アレサ風をひくからよく著て居なナ。」ト、〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇。長「ナニおらア酒の勢ひで寒かアねえ、小鬢から爪先までほか〳〵すらア。」ミ「きついあまのじやくだなう、そんなら是れぢやアどうだ。」ト、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇。長「オ、引〇〇〇〇〇。」ミ「そりやみたか、あんまり立派な口はきけねえよ。ア、〇〇〇〇〇〇〇〇。コウ長さんけふはでえぶ光つて來たの、いいお働きだ。」長「べらぼうめえ、是れ式な工面が出來ねえでつまるものか。」ミ「フムさうだらうよ、コウおめへ階子を上ルとき仕舞の札を見たか。」長「ム、見た、てめへで

えぶさかるナ、入ヲつけえにした、顔見世の紋かんばんぢやァねえが、がうぎと大造に出たな。あの札を五六枚貰ひてえ。」三「持つて行つて門口へ張んねえ、疱瘡除と雷さまの呪ひにならァ。」吉「うさァねえ、雷もてめへにやァかなふめえっ」しか、おとまといふ名があるとの、おこりが落ちて魔除になるわな。」長「ナニ魔除、おきやァがれ、〇〇除が聞いてあきれらァ、おらァ、あの札の五六枚だけも金があると、おつりきな仕事があるけれど。」三「おめへもけちなことをいひねえ、十や二十の金をなんにするものか。」長「べらぼう云へ、たゞとりさつまの守だ。」三「そりやァいいが何だか不景氣だヨ、いつそもうきざで〳〵氣色がわるくツてならねえ。」長「久しいもんだァ、モウ聞きあきてらァ。」三「久しいもんぢやァねえ、ことしらの仕舞だつても、おしづさんなんざァ子柄はよしさ、きれもんといふもんだから、お客は澤山あるし、それについちやァ下の受けもようござえす。」下とは二かいに居て内所をさしていふ詞なり。「それだからわたいも賣りまけねえ氣で、けふまではより通して居るけれど、ホンニしみ〴〵とつれえこつたわな。」長「そりやァその筈よ、あの子はこゝの内中での闘人だといふぜ。夫れにてめへのやうなむねき者ぢやァねえ、世事がいといふもんだから、女までが思ひつくわ。」三「アイサわたやァむねきな者さ、是れでも今まで通りやした。」少しかんしやくにて、「なんのいさくさァねえ、思入レ情は情ではり通して、うぬが氣いつぺいにして

内へも損をかけず、相應に賣つて其の上にする事をば、急々としておきやァ、どんな閻魔さまの前へ出ても、いひ分はあるめえわな。」長「ぢきに舌を抜くといふだらう。」三「しやれなんな、人の氣もしらねえで。おめへもしつてる通り、こゝの内は子ども部屋はひとつの様でも、新部屋と前部屋と二ツにわかつて居やす。新部屋の板がしらは、おしづさんで前部屋の板がしらが私だから、ソレどつちもこゝは張合はにやァなりやせん。女郎のつき合ひといふものは、表向きはよくつても、心のうちはみんな角突合ひさ。わたいらが内はまだ中のいい分さ。此の春の仕舞札だつても、マァかうだわな。元日は休みかエ、ソレ二日三日四日五日六日と七種まで、夫れからちつと間があつて、十五十六と二日さ。此の内といふものは氣が氣ぢやァござえしねえ。他所外の子の様に、平氣孫左衛門ならそれでもすみやす。わたやァ此の氣性だから、一人でも餘計に仕舞うて貰はうと思ふから、じれて癇癪もおこして見たり、くやしくつて泣いてもみたり、陰ぢやァいろんな眞似をすらァな。ホンニわたいが氣でもあんまり馬鹿氣たこつたと、氣で氣をしかつて、この頃のはやり歌ぢやァねえが、ぴんと心に錠をおろしても、つい癇癪でじれが出やす。」長「ハテサそんなことを思つたつても始まらねえ話だ。それも孝行の内だと思つて居やな。おいらが今斯うやつて町抱へで候の、出入場で候のと、なんだか勇みで暮す様だが、親方倒れの子分廢りとやらで、仲間の奴等に引立てられるが、ばんいちには

大きな事つた。夫れも是れも苦界だとおもやァ、なんのきつい出入りはねえ。モウちつとだ、辛抱するがいい。五大力ではわしやなけれどもさ。」ミ「縁と時節のするを待てかエ。押付けおめへに飯を焚かせて思入れ朝寝をしようヤ。」長「自前でも抱がねえやうにしや。」ミ「よしてもくんねえ。さうは云ふもんのおまへ故ならわしやどうなりと、とかなんとか、ソレ文句きどりで居るわな。しかしさうなつちやァいくぢはねえなう。おひやくさんやお角さんを聞くにつけてもいやだよ、前車のくつがへるは後車のいましめとやらだ。」長「ナニ女關の蔓がどうしたと、オンてめへでえぶ博物だな、誰にをそはつた。」ミ「太閤記の繪本に有りやす。」長「そりやァさうと、あつちの客が待つてるだらう、早く往きやな。」ミ「マァいいわな、今夜はえこぢわるく落合つた晩だ。」長「何人ある。」ミ「お屋敷がひとりにお店が壹人、それから坊さんと芝居者のやうなふうたきいがあるわな。」長「ム、がうぎと押しかけたな、乘合の船頭にしても覺えがあらァ、みんな馴染か。」ミ「しれたことさ、初會廻しをナニとるものか。ァ、さむいなう、おめへ一ぷくふかねえか。」長「ム、吸付けてくりや鐵砲やるべエ。」ト、きせるをわたす。みす紙のあひだから小サなたばこ入れを出し、やつと手をいれて煙草をつぎ、火入れをとるとたどんがきえてるる。ミ「オヤ情のねえ炭團だなう。」チョン〳〵〳〵と(手をたゝく。らうかにて)アイ引ときたる。ミ「おちかさんか、憚りながら爰へ一ッ。」と、火入を出す。娘分「ハイ。」長「おちかさん〳〵、そのついでに後生だから、丼に水を一ッ杯おくれ。」娘「ナニ水をかえ、お茶を上けませう。」長「ウンニャ水がいい。」娘「いかなこつても。」ミ「とんだ氣違ひだねえ。」折ふしらうかをもと太夫通り、あとよばアさまおつかけてきたり、お豊「オイ〳〵元太夫さん〳〵、おとよりこんにやく島以來御存じの、となりざしき鄰座敷がこれものだから。」ト、手で呑むまねをして、「あんまり騷々しくねえやうにして、お頼んまうしやすよ。」元「アイ〳〵承知々々。」豊「ひよつといざこざもあつちやァ。」元「オットのみ込みやした。」(作者いはく)おきやくにいざこざのなきやうに心をくだき、座敷をくらうがるが此のばアさんの持ちまへなり。長「誰だ、元太夫が聲だの。あの男も古い人だ。」ミ「アノ元太夫さんの穴づくしの淨瑠璃は、いつそをかしいよ。」長「ム、何か臍の穴で落すやつか。」ミ「抑穴のはじまりはといふ語り出しで、外記節やめりやすをまぜて。」長「あれはおとはやが手をつけたのだ。」ミ「さうさ〳〵、夫れを今ぢやァ與市さんが、義太夫に直したのさ。」長「まづ元太夫が座しきへ來ルと、少しこゞみながら這入ッて、夫れから女をつらめへて惡口を云つて笑はせて、ソシテ出し物を見當りに地ぐりたかるが癖だぜ。」ミ「ホンニ違へごぜえせん、どうもをかしくつていいねえ。」とかくすると、障子を明けてはひり、火入れを「サァおあがり。」ト、火を入れてきたるうち火を入れてきたり、らうかのそとにて「覺えてるな伊のどん、今に敵をとるによ。くやしくてト、出す、どんぶりへ水をくんで來る。「サァおあがり。」長「ありがてえ〳〵。」ト、息にのむ　ミ「おめへナゼそんなにくやしいな。」娘「それだつても手、マァお聞き、三拳勝負で賭をしたら、とつぱづして負けたから又うち直したら亦まけやした。腹が立つて〳〵なりやァしねえ。」ミ「弱いなう、ナニまけることがあ

るもんか。しかし伊之どんは強からうよ。」長「何をかけにした、おほかた大福餅、あつたかいとなんばんだらう。」娘分「御免よ。」長「そんなら薩摩芋のふかし立てを、ふかし〳〵喰つたとさ、ぢやァねえか。」娘分「きついしやれさ。」ミ「船宿衆ぢやァあるめえし。」娘分「アイサよく御存じでおそれ入りますよ。てわりいなう。」（作者曰）山口、常陸屋はふうりんそばの家名なり、山口といふは日の暮れすぎに早く來り、そのりなり。のちに常陸屋ひけすぎのころになれば、菱屋といふ夜そばうり來る。是れは此のころ別けてはや

一說に曰く、ひしやのそばは、ねぎにあぶら揚などを、あしらひたるなんばんの仕出しをして、女郎のはらにすつぱりを持ちこむゆゑ、皆まちかねて是れを買ふなり。外のそばやにはなんばんなし、もつとも〇夜そば〇さつま芋〇大ふく餅。

右の三種は冬より春へかけて、此のさとにかぎらず、女郎やにはやる事おびたゞし。

娘分と引きちがへてまはしの女、（お八重）ほんばぶとりのせいらす縞の上著に、あるおなんどのもゝ山おりの帶をむすび、關東じまのまへだれ、丁子茶の二寸はゞのひもを一重は帶の下へまはし、一重は帶のまんなかでしつかりとむすび、あたまはばいむすびに銀のごてんぼうをさし、八重といふ字へ五三の桐のびら〳〵を下げたる、銀のかんざしをうしろへさしてはしごから上つてくる。こちらの明き座しきには、牀を廻すわかい者、しかみ火ばちの火をじふのうへひろひこんで、ざしきをはき出しながら、若イ者「お八重どん、船宿部屋に久七どんが居るならの。」八重「久七どん、久七どんはとつくに歸つて仕まつた、勝さんがおいそぎだとつて、とぼし迎へで歸んなすつたわ。」若「ホイそいつァおへねえ。」ト、下へおり　八重「コウ〳〵、おめへしたへ行つたらの、さやば町の山城屋に、迎へ船をよこせと狀遣ひをやつてくんねえ、今ツィわすれた。」ト、いひながらおとまが「おとまさん一寸。」（作者曰）まはしのざしき多き時は、折々かやうにび出すものなり。いづれも樣御ぞんじの事なり。ざしきの障子の外にて、ミ「アイ今行くよ。」長「それ見たか上使のお入りだね、早くいきやァがれ〳〵。」ト、あしでつき出す。ミ「そんなにいやがるなら出て行きやせう、親分が來ねえでもいいのか、三行半ぢやァすみやすめえ。」長「長でも半でもかまはねえ、剃人袋の緒が切れた、きりきりと出てうしやァがれ、とまつ夫婦喧嘩の紋切形はこんな物だ。」ミ「チット稽古して置きやせう、去られた心持はどんなだらうの。」長「なか〳〵わるくもあるめえよ。」ミ「その氣で行つてこよう。」ト、まくら元の紙をとつて、屏風にかけておいた打ちかけをひらりと、裾をはせをり、廊下へ出ながら、長「又なき言の聞き役か、チットさえた面ア見せやな。」ミ「さえた此の面、どうぢやいな、客につられてぶら〳〵とが聞いて呆れるよ。」ト、いひすてて表二階のはし　長「ム巧者にしやれらァ、一昨日うせろ、ごより下ざしきへまはる。

夜著の半襟の黒びろうどをゆびでずいとなでながら、兩方の不通も差別なく、只一人寢るといふがまんあるゆゑ、女郎の寢る所もなきやうに、夜著の中へふんばつたり、又はふとんいつぱいに筋違ひにねたりなどする物なり。但しなじみたるうへは、女郎ゑんりよなく〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、それは青き遊びかたとしるべし。二度や三度のなじみならば、情なくてわるし。女郎がたま〳〵に廻つてきても、オヤけしからねえよなどと、すぐに行かれることありて、たび〳〵しくじるものなけぢ〳〵め。」などと思はぬにくみをいつて横になり、夜著の半襟へまはる。（作者曰）是れは廻しのときのまけをしみにて、通も寢る。

れば、まづは不可ならんか。し○這の刻既に戌時拍版（王縞町の番人）カチ、カチカチ、カチカチ。（此の里の通人御存じかし女郎の氣性にもよるべし。のぢいさま）「しる粉な能うございや、雜煮なようございや。」（大きな聲の人。）「あァんまはァ引り。」

第二齣

（下座鉦の光景を看るに）容二人の割牀、四五度のなじみ客　傳吉　年は二十五六色白にて十人なみの男なれども、をしい事には下駄とひたひと手ぬぐひのかぶりやうと、此の三ツにきをもんで、むしやうに齒ばかり白くしたがるが、此の人のきずなり。友達には傳ばう〳〵となぶられながらも、芝居通のきいた風にこりかたまつた氣性にて、素人のくせにわざ〳〵芝居者をまねたがり、平日役者の名に様をつけて、樂屋のやうすはぐつとしりじまん、いつも已待の聲色連中、夏のうちはすゞりがねと、聲色二ツ日かはりの夜あるき仲間にて、ちよつとぬけがらで小便するにも、我をわすれて、戻のぎつくりなどをするくせあり、割印のすわつた顏見世の手ぬぐひをば、湯にも入レずに大事にしてる、おさきなる人物なり。此の夜は旅人客におぶさつてきたわるがみと見えたり。初の客。　德兵衞　としは四十ばかりしたうすいものある近在の旅人客、江戸の問屋へ仕切を取りにきた逗留中のしやれなり。でつくりと旅人客多し、故にはやり歌などは、大概の江戸者より早くおぼえる。此のたぐひの客は、尤も此の里にはかやうなるへもつて歸るふうにて、げいしやの直しぎはいたつて板古ぶしを本に書付けて國み構はずの名代をとり、とかくぶう〳〵を云ひたがるものなり。女郎のむかへ早きをかなしむ。いつも船宿のかみさまには、黑ごま一ト袋が國みやげにて、立ちぎはの勘ぢやうには、錢相場むづかしく、小錢で一（作者申上候）此の所は、二人わり牀には雙方の詞、大きに入り組みまする故、（傳吉）が牀は○印をいたし、（德兵衞）が方は△印にいたして、兩方をわかちます。さやうに御よみわけ可被下候　○（傳吉）どぶねずみに紋付きのもめんぶとりへ、やうかんいろのづきんを帶にメて、夜著へはひり、あふむけになつたり横になつて見たり、ふとんにぬひつけてある敷紙の間へ指をいれたり、きせるのやにを通したんで天井へふきつけ、夜著のうらを手でさし上げて見たり、眼をあいたりふさいだりしながら、枕へト手をやると、油でべつたり、ホイといひながら屏風で手をふいて居る所へ、おさま「きたァ、さむ。」トいひながら○○○○、「こあしおとがするゆゑ、びつくりして早々にしまふ。ほどなく、（傳）日をばつちり、「ウ今までどこにゐなか町としたのだ、まだこねえでもいいのに、さりとはおはやしの朝葬だぜえ。ソレお囃子なら『つツかけ』かけ入りとしねえ。つゝかけかけいり、は中は大福餅よりやァあつたけえよ。」女郎には一向わからぬゆゑ、これらは一割そんなせりふなり。あるいたら見なせえし、こんなに鐵氷になりやし所だ。」雨落とは水じあひ　ミ「なんだか根つから分らねえしやれだなう。」ト、腹ばひになりて、傳がたばこ入れから一服ついで、一ト引きひいたけむを屏風のがま仙人へふつかけて、「サア。」と出す。（傳「オイ。」「なんだこどもしの出があるのか。」　ミ「ナニトとつてのむ。折ふし五明キの客大ぜいはしごをおりる音聞える　傳「オ、つめてえ、こいつァ雨落だと孤といふサ五ツむけへの客人が歸るのさ。」　傳「ム、ならび大名ががうぎと騷々しいぜ。あんまの笛のヒウ引をきつかけに、階子がドロ〳〵だから、こいつァ一ト狂言かけさうだ。モシ德兵衞さんでえぶお靜かだネ。そつちの『お芝居。』は過ぎやしたか。打出しの事をすぎたかともせうぜ。」△德兵衞「ねぼけた聲でちつとそゝるべいかのぞつちサ、そゝりに行ぐへいがよかつぺかな。」○傳「こいつァ『本よみ。』が納まらねえ。イ、エサなぜか聲がしねえからさ。何だか狂言をおつに書きなさると見えて『彦兵衞。』のボチ〳〵で居ながら、チツトはなやかな『わたりぜりふ。』といふ法にしやせう。」彦兵衞とはかけ合ひのことなり。こわいろつかひの方言。△德「彦兵衞。ナニ彦兵衞サ、うつちやりだァネシ。」○傳「よんどころなァいさうさネ。小サナ聲で、おひねえでんたァ。同志に來ちやァ氣づまりだァからネシ。」トいふ法にしやせう。」ばふだ。コウ鄰のやうな客をとつたら辛いこつたらう。ありやァまあ何が面白いのだらう、只とほ

しがすりといふやつだらうが、おんなじ蠟燭屋ならお店がよからう、第一れこしきが光らァ。おめへ達も斯うして毎日々々異類異形な化けものを相手にして居るとはいひながら、閒にやァノ男は好いた男だ、どうぞこの客を呼びとけて見てえとおもつても、客が『ちらし』ぢやァ蛔の貝ではじまらず。ちらしとはそこらぢうをくひちらし、なじまぬ客をいふ。辰巳にて行はるゝ詞なり。又平右衞門ともいふ。さういつてまんざらでもなく男が氣にいつて、世事があつて子供部屋の噂にもなるやうだと、かんじんの金がうとし、ホンニおつなもんだよナウ。しかしあんまり不躾だが、おめへなんぞはァ、こゝの内での『眞』といふもんだから、眞といふ。たてものを客人さは山のたくさんの事なり　ソレいつも『わく詰』だらう。」ミ「ナァニ根つからお客はござえやせん、ナニおめへわたいらがやうな者に、どんなお客が來てくんなはるものか。おめへがたのやうな後生心のあるお客こそたま〳〵にも、來てくんなはるから、どうかかうかお茶ァにごして居やす。」傳「よくいつてくんなせえ、コレモウ淺葱の頭巾をぬぐ場だよ。其の口の下から本名とまうせば。こゝのうちでも『わり〳〵』評判よく大人の事いはせて、壹人で『ばり附』いて居ながら。」ミ「がり〳〵だか、ばり〳〵だか知りやせんが、川さらひからこつちへ、とんだ隙さ。しん地へ船をつけて陸をあるくのだから、店の客人はいふにおよばず、てえ〳〵なら外へ行きなはるのさ。それだから晝の内は、からツきりお客はござえしなんだ。シタガわたいらはいつも樂でよかつたよ。きつい親方思ひだネエ。」傳「ありがてえ〳〵、ホンニさうだつけの。半丁の七さんのめへから上ツて、㊂の札を引替へにして、艫をあづけの、そして其の札を、船頭の腰へ下ゲたから、べちやァねえ川さらひの日雇といふ身だつけ。」ミ「船宿衆や藝者衆も大きな違へさ、ネエ。」ト、いひながら傳吉が「オヤ五大力のかな物だネ。とんだいいわ。モシ今ぢやァぴら〳〵をさす氣五大力なんざァ、きのきいた子はさしやせんねえ。わたいがいふ事にやァ、錠のぴら〳〵なら、思ひきつてへうたんかんざしが、ひねつていいと云ッたら、みんながわる口な子だといつて、大笑ひをしやした。わたいが氣はおつにひがむ氣さ。惣別娼妓屋の者は、神佛ばつかりいぢつて、鹽だちだの茶だちだのとさわぐけれど、私に限つちやァ、つひしか願掛のかの字もねえのさ。ナニおめへてん〳〵の親にさへ見離されて、こんな苦界な態をして居るものを。」傳「がうせえ悟つた事だの。」ト、いひながらそろ〳〵五大力のトハいへども、五大力のかなものがお目にとまつて、こいついちばんしくじりと思ひ、「さはさりながら苦界の樂しみとか何とかいふ事が大有りだらう。サアその咄がイヤ聞きてえ〳〵。」ト、うぬがつとはいろごとをさしていふ。是れ辰巳のはやり詞なり。　とんだおちん〳〵だが、私らァ正直樂にしたくツてもごぜえやせん。そのはずだァな。三文が働きもねえから、一家一もんに見かぎられ、こんなざまさ。」傳「イヨいふもんの紋盡しありがてえ。道理でおれがやうな、きながき者を客にとつたぜ。」ト、いひながらそろ〳〵五大力のリてかかる。「そりやァさうだが。おめへはどんな男が目ずきだ。」ミ「どんな男エ、わたいの氣性をあてて

見なせえ。」傳「まちねえよ、流石におめへの事たから、ソレ生靈棚の茄子へ葛だまりをかけたといふ、生ッ白い野郎は直さま首にするだらう。つき出す事をくびを切るといひ、かぶつたことをくびに なつたといふ。まうせんをかぶるより出たる方言なり。エ、ト手代敵の色悪ではいかずと、和實荒事はそつちにあるから、マア太刀打をする者はねえス。まだ半道か、さばき役だらう。マア〳〵こゝらでござえせう。」三「きついてん違ひさ。」傳「ハテナおれが役割は違はねえはずだが。」三「私はおめへのやうな敵役が最屓さ。」傳「オヤこいつア『じわ〳〵』だらう、アノおれがやうな『お下』でもか、アノお下を。お下とはいなり町をいふ。イヤよつほど人を茶ア よしかにするぜ。」三「わたやァ中賣の子だからさ。」傳「何だ中賣、コウおめへ何うして中賣といふことを承知だ、堺丁邊にかこはれてぢやァねえか。」三「生まれ古郷だからしつて居やさア。」傳「ヤそいつア面丁子茶狐の脚ちやんきりだ。」三「けしからねえ、そりやァ何の事たえ。」傳「ソレモウおも白狸の腹鼓でもあるめえぢやァねえか。トキにあんまりお堅え附合ひだ、チット横に寝釋迦と仕てはどうだ。」ト、もぢもぢする。「ホイさうだつけ。つかねえ事たが、先をくゞつて板しばりぢやァねえが、内中へ惣花以ての外なりさ。ソシテおめへなぞは、ソレおいらがやうな者は、お情とかなんとかもあるだらうが、何分お懐がたけねえから、斯うしてくんねえ。ソレ今夜百疋出しての、是れを二階廻しと河岸番へ割振つて、御壹人前罷蔵づゝとお目にかけるわ。ソレ今度來て料理番衆方にやりやす、こゝらが法の附けやうだぜ。

それから娘分女大ぜいサ。此奴がうるせえ奴よ。其の跡で帳場の先生ハテ内へはいつ遣つてもいいぢやァねえか、ナントどうだ、奇妙きれてつ、と音をさせながら、えいやつとで南鐐二ツを出す。金入レのなかはむざんや四文ぜにを三十二文、紙でやんはりと包み、ずぬぶん音のするやうにこしらへたる、平生たしなみの細工なり。折ふし陸ぶらの朝歸り、橋錢にこまる時は此の錢忽ちあらはれ出で、急難をすくふ事あるべし。(をかぶら)をかぶらとは辰巳通船なきときか、船留の時は船宿よりぶらぢやうちんにておくることあり、これをさしていふ。(又曰)うけのわるき客には、おくり船頭なくしてのちやうぢんを貸すばかりなり。船宿ぶらとも いふ、をかをぶら〳〵と行くの心なるべし。傳「サアこれをそこから序に遣つてくんねえ。」三「じろりとわたやァ嫌でござえす。」傳「なぜ。」三「お前やんなせえしな。」ナニ壹分ばかりと心に來たらやらう。」ト、すこてればうにてまじめになり、からだぢうをもぢ〳〵しながら、〇〇おとま が上へあげて、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、三「オ、いた、お前〇〇〇は針の山だなう、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇。アレサまちなせえし、一寸行つて來やせうわな。」傳「何所へ行く。」三「河岸番をよびにさ。」傳「マアいいわ。」三「それでも一寸。」ト、むりに〇〇ら、まくら元に何か書きつけのおちてあるをひろひて手にもち、〇とび出しながれて詞もなかりしが、小首かたむけひとりごと。「イヤこいつとんだ『けつさつ』だわえ。まづ今夜は女郎おんぶの船賃こつちマツヨシト、外に百疋が河岸番まはしこれもよしと、〳〵上げた處がちやうど『里扶持』のおごりで差引き残りおれ一枚『はき舞臺』とはハレマ情ねえ。」四ツの鐘「ボオンクラ、ボオンクラ。」(かくておとまは)まくら元にて拾ひたる書附をそつと厠場へもちきたり、何かあやしと開きみるに、小サクとぢたる帳一冊あり。是れは先刻金入レを出す時とり落した物と見えたり。はなはだ俗なる書きかたにて、

芝居でふだんにいふことばづかひの覺帳
百十六文の札錢を　小づのといふ候
百三十二文のが　大づのと申候
二十匁を　あたまといふ也候
二十五匁や　本直といひ申候
三十五匁の事をば
百五十文を　ちぎ長半といひます候

おさま「心の内でふき出し　オヤまア呆れたふうたきいだわ。あいつが牀へ廻る事は。」心の内でて「まづ今晩は是れ限り。」○かくとは夢にもしらけたる跡に、傳吉よん所なく割牀の一座へ酢を買ひうける。○傳吉「德兵衛さん此の通りだ。」△德「何事だア。」傳「まはしのかなしさ御推察だ。」△德兵衛があひかた　お大「これはいたつておてんば女郎。おとまさん、オヤおとまさん居なはんねえか、モシちつとおはなしにお出でなせえな。」傳「いつてもお邪魔だらう。」折から船頭きたり△　船頭「德兵衛さんおかへりはどうでござりやす。」△大「吉どんか一ぷくくらひなよウ。」船「またお大さんのかぶしきか。」德「モウ四だア、ちふか、ア、寧そおつ泊るべエ。さうしてくれせえよ。」船「ハイそんなら直し肴をよこさせやせう。」ト出てゆく。　德「よび返して、ア、これ〳〵吉や〳〵、鱈昆布の大平だんべい。預ケせえよ、おい

らア寐つたアから、モノ起きるがつれえ事だア。」船「それでもお連衆が。」德「モノそれよナ。がらうつちやすれたア。」○傳「イエ〳〵わたしなら同行としやせう、同じくさ〳〵。」船「ハイさやうなら。」打忘△大「コウ〳〵おめへの、此のお客をの、今度から連れ申して來てくんなよ、頼むによ。」船「アイアイそれだつておめへ、わしがなんぼ連れ申して來たくつても、お客の氣がすゝまねえぢやアいきやせん。」大「すゝまずばおめへ勸めねえな、それが働きといふもんだア。おめへ親方の飯を五六百年も喰つてゐるだらう。」船「イ、エたつた四文錢百年さ。」大「口はへらねえ。コウさういへばの、どうか此の客は來さうもねえ顔だよ。來ざアおれが幽靈になつてとり殺してやらア。」船「オヤおそろしい、お休みよ。」ト、いひすてて出てゆく。　大「モシおめへ、わたいがこんなおしやべりの、ざつかけなしだから、お氣にやアいるめえか、無理にとはすゝめねえから、來る氣なら來てくんなよ。」德「オ、來るさ、來ざらにやアこんなにはア、能くしてくれちやア、モノ翌日からでもおつぱしけるだア。あにはア是れ一年にいくたンび上下だがなしれねえ。モノ年内にも極月さし入りに來て十五日許逗留のしたア。」大「その時は何處へ行きなはつた。」德「歳暮を引つかけてあじよウするもんだ。」大「うそばアつかり。おめへ世事はいいなう、その世事をわたいに四文ばかりひつかいてくんな。よつぽどいいよ。ホンニおめへ來てくんなはるか。」德「ハテうたぐり深い、モノあすの晩げえ來べい。」大「よしねえヨ、來たらどうす

るといふお客に來たためしなし、つけ裏に來るお客は久しくつゞかねえものだ。其の内にもせきこんで來ルお方は樂しみになりやせん。お客にもいろ〳〵が有りやすら、相應に金をつかつても惡くいはれたり、つかはねえでもヤレコレと内中によく思はれたり、世事上手が過ぎて憎まれるもあれば、だんまり坊で可愛がられるもありやす。ほんにお客の上手下手で、たとひ割花にしても、惣花よりうけのいいことがあるから、一ト通りぢやァ行きやせんわな。」 德「なるほど掛引ごとだァネシ。」 大「オヤおつに感心しなはるネ、おめへは顔に似合はねえ氣がいいなう。成るほど人にはそつて見ろ、馬にやァ。」ト、いひだして「何か思ひ出シ、」「オホ、、、、、、マァ斯う向きなよ。」 德「モノ馬さ乘つて見ろちふ、ドレ馬さ乘るべえかな。」 大「〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇見なせえし。」 お「おやツ、かながしやうぎに癪サさしこんだァの。」ト、けげんな顏をする 大「あふむけになり顏をじろりとみて、ムフ。」トにつこり、『枕の外にしる者ぞなき。』

（鄰座鉾の光景を看るに。）吉（あは鐵）（あを三人割牀 おさき松「上著をぬいで下著の上ツぱりにはんてんを裏がへしにきたやつ。手ぬぐひで帶をメ、ふとんの中からはひだし。かたはらなるたばこ盆の中にある、もえふさりの杉ばしをと 吉「吉やおそろしからう、此の位にかつて、あんどうに向ひ「まとひや「けしくちの二重文字を書いてゐたりしがご字を書くものは、おいらが組にやァあるめえ。」三人ながら屏風をかたよせて、〇〇〇の上へ女郎ばかり置いて 吉「ドレ見せや、態ァ。馬鹿金が半分でもねえ。あの野郎はきついぜえ。こんぢうの消口を見たか。」 鐵「ムム見たァ。」 吉「あだの手業ぢやァ障子や傘へ切り抜くのはお茶の子だぜ。」 〇「こん筐ばァ、安くしやァがるな。そんならおれが書く字をあてて見ろ。待てよ、〳〵。」ト、いひながら、杉箸のさきで、あん吉「ム、ウそりやァ何だわ、凧にあるソレアと、整だ〳〵。」 鐵「せきこんで、おもしれえ〳〵、おれがあてべエ。そいつァなナ、斯うして〳〵、正月の正の字だァ。」 卿や東の門に門たつて東や東や蘭や蘭と蘭といふ字だィ。才六め。夫りよを知らねえでつまる物か。」 女郎大ぜい「オホ、、、、、。」 餘りに手なきあそび故、女郎あきれて見てゐるが、松があひ方、吉があひ方、鐵があひ方。（おさつ〆お今〆おすみ）「サアモシ些と寐なせえしな、いつまでさうして居なはるんだ、『あきれ』がとんぼう返りをしやさァ。」 松「その序に階乘をすればいい、エ、人をつけえにした。」 鐵「謊ァねえ、自身番の惣寄合五人組が揃つたぜ。」 松「店受が來たらすぐに佛を出さうがあきれらァ。こけが念佛かうをしやァしめえし、やみとしやにかまへて居るぜ。」 鐵「モシエ何も致しやせんが、講頭が極引の通りぶつかけ、一盛の煮轉しで、青ッてくんねんし、おたのん申しやすエ、ベロ〳〵〳〵〳〵〳〵アバァ。」ト、したを出しべつかつこう 大ぜい「アハ、、、オホ、、、〇 トひつくり返 今「いつそ氣さんじだねえ、アハ、ァ、。」 すみ「わたやァもう腹の皮がよれるやうだよ、オホ、オホ、オホ、オホ、オ、をかしい。」ト、二人ながら、なみだを 松「コウおらがかゝァを見や、色氣じみて居るさうでまじめだァ。あげさげが胸につけへたか。」 さっ「まじめでもようございやす、きついお世話さ。」 松「きついお世話、おれが判人だものを。」 さっ「ぜげんがあきれらァ。」 松「どうし

たと。」さつ「云つてしまひやした。」松「あとから追ひかけよう。」吉「よくしやべるなう、此のやうにかまひなんな。」松「ナニあれがこつたからいいわな。」さつ「ねつからよくねえのさ。」松「工めんがか。」さつ「おたがひ長左衛門さ。」鐵「ア、やかましい口だ。」今、すみ「アハ、、おさつさん、おめへよくまけねえの。」さつ「ナニまけるものか。」鐵「ナニおさつさん。甘さうな名だナア、こいつア溫かだらう。アア耳が痒い、コウあたまの鶴を貸しねえ。」今「鶴とはなんだへ。」吉「エ、ソレつるッぱしよ。」松「手鳶でもいい。」すみ「ねつから知れねえわな。」さつ「是れか。」えト、かんざしをぬく。鐵「ム、その耳ッくじりよ。」ト、取つて顏をしかめてくびをかたむけ、「どいつもさはるな〳〵。」ト、耳の穴をほじり、「ア、かゆかつた。」今「耳がかいいといい事を聞くとさ。」吉「ねつからきかねえ、どうぞ月ありか德虎でもくたばれバいい月ありとは日なしかし、德虎とは損料貸をいふ、日なしを月有りと轉じ、そんれうをとくとらと轉じたるはやり詞なり。サア皆寐べいぜ。」松「待ちや〳〵、一ぷく。」トあんどうで吸ひ付けながら、「コウみさつし、魚油ぢやアねえぜ。」○みな〳〵牀へはひる。鐵「きいろな聲で寺は駒込吉祥寺イ、茶の湯座敷の奥の間でエ、ひざをたゝいて吉三さんウ。」すみ「おつな聲だなう、お今さん聞いたか。」今「アイサとんだ上手だよ。」さつ「オヤお今さんおつなものがはやるねエ。」吉「ありやアの、からくりのいひ立てからはやり出したアな。だん妙な手つきをして黄色な聲でいひ立てをするから、とんだをかしい。」今「ほんにか見てえもんだネ。」（吉、鐵、今、すみ）四人○○は何ごともなく○○○○○○○○○○○○○（おさき松）（おさつ）此の二人○○はかけ合ひのおしやべりにて、寐ずにしやれてゐる。さ「○へ這入つたお定まりだが、今夜は寒い晩かねエ。」松「ウンニヤ若しさむくば、鐵砲の方へ沉みねえ、丁度いい加減な湯だ。」さ「ワアイきつい行き過ぎさ、私はモウかつ〳〵とするからさ。」松「おめへも綿溫石でもいれたか。」さ「わた溫石とは何だえ。」松「三馬といふ作者が引札を書いて弘めたのだ。」さ「ナウしりやせんワ。そりやアいいが、おめへハどうもみた顏だよ。」松「みた顏だたアでえぶあたらしい事をいひ出したな。そんなら俺もあたらしくいふべエ。此の頃アこんな顏が流行らア。」さ「ごめんよ、夫れでも誰にか似て居るナウ、おすみさんわたいがお客は誰にか似てをるなう。」す「さうさナウ。」鐵「松が顏か。松が顏はナ、馬鹿ばやしのひよつとこか橋際の羅漢さまにある面だ。」皆「アハ、、、、、オホ、、、、。」松「てめへに似ねえで仕合だ。」さ「ソレ〳〵思ひ出したは狀遣への、ソレ向う河岸から來る人に似て居らアナ。」さ「ム、さうよ、オホ、、、、。」松「でえぶ笑ふな、俺ア又身替りにでも出されると思つた。」さ「コウおめへはどつちの方だ。」松「あつちのはうよ。」さ「あつちとはどつちだ。」松「あつちとはこつちのそつちよ。」さ「エ、しやれなせえすな、わたいがあてて見せう。」松「こいつアおもしれえ。」さ「すつぱりといふところがなんでも橋を渡つて來る所だ。」松「べらぼうめ、船で來らア。」さ「謔ばつかり。」松「がうぎと安く見るな、もゝんがア引。ワン〳〵〳〵〳〵、喰ひ付くぞ喰ひ付くぞ。」さ「ア、怖いわな、何のまねだな。」松「是れか、これはかはばおりの怨靈、びはえふたうの

ふんばりあまの、裾ばり女郎の。ヒウドロ〳〵〳〵、ワン〳〵〳〵〳〵、ソレ喰ひ付くぞ引。」さ「オオいやだよ、モウ騒々しいわな。おめへの連衆はみんな氣作だなう。」松「氣作をごらうじてお茶を上れ、ワン〳〵〳〵喰ひつくぞ、もゝんがア引。」さ「ア、モウいやだよウ、うるせえといふに。」松「ナニうるせえ。そのはずだア、おらァこれでも本町の番頭だア。」さ「本丁のばん太郎だエ。」松「店者だよ。」さ「店ざらしがあきれやす。」松「おれが番太郎の店ざらしに、おめへが今戸燒のあねさま。ちやうどいい夫婦だ。」さ「アイサ道理でおめへのあたまはかぼちやの火入れのやうだ。」松「火入れを抱いて革羽織は用心がいい。」さ「ごめんよ、表向は革羽織でも、お心の内は羽二重でござえす。丈夫向きだから買つてみなせえ。」松「なんだ羽二重、だうりで口がたつしやだ、歯が二重なら舌も五六枚は受合だ。」さ「エ、にくい口だなう。」松「ウンニヤ可愛い口だわァんぐり。」ト、口を大きく あいてみせる。さ「エ、モなんだな。」松「ナントいい口だらう、行く氣があるなら飯について見ねえ。」さ「よくしやべる事だよ、おめへ口がくたびれやァしねえか。」松「ナアニ今來ル時わらぢと脚半を等分にせんじて呑んだが、ッイわらぢに喰はれたからそこで出來た口まめサ。」さ「オヤあきれけへるよ。」松「あきれも歸るのはいいが行きがけにやァいそがしい。」さ「ナゼ。」松「あきれ千里を走る。」さ「それやァ地口かなんだえ。」松「なんだか法師のお客をかきの種さ。」さ「わたやァ客をかくことをしらねえよ。恥は常不斷かいて居るが。」松「お客が、お客は斯うかくもんだ。」ト、せなかをつめでひつかく。さ「オ、いた、それぢやァ蝨のやうだね。」松「お客は蝨だと思つてりやァいいのさ。」を始めたからよ。」さ「上へ仕の字がつくだらう。」松「ナニ仕ごとか、おきやァがれ。」トいひながらブイと屁を 松「オヤ此の子は色氣のねえ屁をひつたね。ア、臭い〳〵、サア臭い〳〵、屁はまんなかまんなかボコボン〳〵〳〵、此の子の屁はさござい屁といふのだ。私のうちの雜煮を持ちこしたのだ。」さ「いやだよこのお客は。モウわたいにかぶせるわな。いひ出し屁の問屋だよ。ア、くさいぞモウ。」ト、あちらをむいてゐる。松「そりやこそ屁の證據があらはれたでござい。」さ「なぜ〳〵。」松「ハテ屁ひりの神は正直神よ、誰が放つた彼が放つた、ひつた方へつん向いて寢たから、違へねえ〳〵。サア〳〵放屁の神の屁見せ、いひ出し屁の問屋。ホン音はこれでござい。」ト、夜著の裾を足でば「お鄰のおかみさんへもたばたとふるひながら「ア、モウあんまり色氣がねえよ。さういつたら色に氣がなかをかまひのこもつた夜著のお裾分を『すかし』ばかり上ゲよう。私らがおならは、ちつと放り過ぎたが、モウ一ッおまけにブイ。」ト、またひる。さ「アしかろといふだらう。」松「先へ廻つたナ。色に毛がはえたら生肴がくすりだ。冬掛へた色男を夏出しして見ると、かびて毛がはえるもんだ、酒呑は猶の事よ。地色があきたら又客色に色上げをしな。しかし如在はあんめえ。」さ「かしこまりました。」松「ナニ寐て居ながら。」さ「そんなら何といふのだえ。」

松「ハイ〳〵寐まり〳〵ました。」ミ「寐まり〳〵〳〵、オヤむづかしいなう。コウ、そりやァさうと、モウしづかにしねえ、外でやかましがらあな。」ト小聲になつて、「初會だけれど、ホンニ三年もなじんだちんころだなう。」松「ちんころだ、おらァ犬ころだ、ワン〳〵〳〵。」ミ「アレサ世話のやける。こんなにわたいがふざけもんだから、お氣にすんだら來てくんなせえしよ。」ト、うへの手をせな松「オ、いたいたいかしこましまた。」ミ「またとぼけなせえす。」松「とぼけぢやねえ。どりや、寐ほけよう。」つぶくのんだふきがらを（はたく音）トン、（つばをはく音）ペツ、（吹きがらへしみる音）チウ、、引。○さばけ遊びに郷座敷の傳吉は、おとまをまでどもこぬゆゑに、よんどころなくふとんの上に寐ようとすれども、目はさえたり。ごふはらまぎれに廊下をはた〳〵、はなうたもつて小便所のはめを、まじめににらみつけ、だら〳〵だら〳〵、ひよぐりましはして、うけあんどうの火の用心をよみながら、庭下駄の音は、寐しづまりてこだまにひゞくころ、ぶらり〳〵ともとの廊下へ來り、日をこすりながら、いさみれん中のざしきを、わが座しきととり違へ、しやうじを明ケてはひれども、やつぱりおの傳吉「ゲイプウァ、醉つた。日がねばつてならねえ、なんでも今夜はいたゞいた晩だ。よつほど許判はわりい。（いたゞくとも、つけたともいふ芝居のつう音なり）徳兵衛さんよく寢るの。」ト、いひながら己があくれば内には二人見るよりびつくり、「オヤこいつァ大間違へだ、御免なせえ。おれが牀だと思つたホイ。」松「ハはね何だ何だ、屏風をことわりなしに明けやァがつたはどこの馬の骨だ。」ト、はりこまれて庵相を。」ト、いひながら、うろた〳〵まなこにせきこんでこちらの屏風をくいと明ければ、傳「ハイ私、イヤとんだこれも同じく大間違。（鐵）も女郎と一所にとびおきて、目をこすりながら、「何だ〳〵、どうしたどうした。今時分何を捜すのだ。松か。オヤ松ぢやァねえ、誰だ。コレおみさまはどこの人間だ。マア

下に居やな。何まごつくのだ、枕さがしはおいてくれ。何ンだか根つから分らねえぞ、みんな起きろ起きろ。」傳「はひとりまご〳〵しながら只きもばかりつぶしてゐる。イエサ大きに不調法いたしました、トント座敷をとり違へまして。」ト、襖を眞赤にして、しやう、松「ヤイまちやァがれ〳〵。己は是れ折角お靜まり遊ばした所へ、ナぜどろずねをふんごんだ。」傳「もすこしむつとして、ハテそれだから御免なせえと謝らァ。是れほど謝つたらひ分はあるめえ。」松「いひぶんがなけりやァ申し分がやつとござとあるわい。コノ一トほん三文のふかし立てやらうめ、みんなが持物の用心しろ、廊下蔦がうるせえぞ。」鐵「コレエ、うぬらがやうな無面目なやつらに、御託宣はむだらしいが、袈を抜裏だとおもやァがるか、大屋さんの御條目にも、紙くづひろひ、物もらひ、木ひろひ一切入るべからず。損料貸日なしかし、此方へ斷りなく貸借無用の表札は、井の印とならべてあるわ。此のあき盲め生盜人め、くやしくば相手になれ。」女郎大ぜい「これさこゝでさわいぢやァわるいから、マア堪忍してだまんなせえし。」吉「二人ながらうつちやつて置けえ。」まへて、ざしきへつれて行かうとする。（傳吉）もぐつときかぬ氣になつて、「此の高摩を聞くよりわかいもの二三人、女まじりに出できたり、傳吉をとら「乞食の駝鳥をみるやうに、腰をこゞめて下から這へば、鬼坊主の人おどしに、なめ過ぎたあごたをぶつな。生盜人だの盲だのと、高飛車に、けんの峯。なんでも四文の持遊び程ならべ立て、悪言のやすめを賣るナ。買つたらあたまのかけねなし、直切小切のきつたりはつたり、元直のしれた木薬やらうめ。こいつァうぬ喧嘩太平、

こゝで安穏にやァ、すまされねえわエ。」松「何をうぬ。」ト、とびかゝつて、すでに事よとみえければ、大ぜい入り雙方を引きわけて、傳吉はとなりざしきへ入れ、こちらの座敷へも大ぜい來り、兩人をなだめる。松「尻腰もねえくせに、口ばつかりたゝきやァがる此の内に吉はおとなしきもの故、だまつて聞いてゐる。か、但シはゐざりか腰抜か、萌葱の鵆でも唄やァがれ。何も後生と思召し、猪熊の腕をさすつて胴脊中のくりからも、龍と劍との料簡すりやァ、振り習への大繩で、野郎め、わるくからみやァがるな。下手に出半鐘を打ちやァがると、百旦那の引導か、豆澤山の厄拂ひぢやァねえが、ちよつくりつまんで、あつちへ、ベイだぞ。一ツ拍子を、とつばくるがさいごの助、百に四文の利も非も聞かねえ。何處へ出してもおさきの松さん、店受が喧嘩屋庄兵衛なら、親分が中ツばらの中左衛門だ。わいらァ男を見損ッたか、屁の幽靈め。ヘエ、とはうもねえ。」若イ者「コレサおめへさん方が、さうおつしやつちやァ私共がついてて、すみませぬ。こゝはモシ御料簡。」女郎大ぜい「さうさ、モウいいからかんにして寐なはるがいいわな。」鐵「うつちやつておけえ。てめへッちが知つた事ちやァねえ。コウ此の土地ぢやァな。佐箱屋の吉さんや茶勘の玄象さんなんぞが口利きたァ、おいらァふだん心安くするから、何もこゝの内へあたるのぢやァねえ。殊に今夜らハ、長親方も居るから、隨分癇癪をおつぺして、犬子犬子で蟲をさすりやァ、あめえッたれた駄々をぬかすわ。コレエ〳〵、中の字のきめ引きをしつた小藏なら、目のあかを『じよれん』でさらつて、鼻へ二本の棒杭をうち、口の船留めをして、耳のそこりへ聞きやあがれ。とんだ土左衛門ぢやァねえか。あんな野郎は竿さきへ突つかけて、海の落口へつき出してやるがいい。乞食やらうめ、ひやうたくれめ。うぬらが四文と出る場ぢやァねえ。此の只今のお笑ひぐさめ。なァんのこつたえ、ヘン咄のやうな。」大ぜい「サア〳〵モウあつちらでも謝つて默つたからようござえやす。」おき番の若イ者「ハテとてもおまへさん方のお手にはたりませぬ。サアもしえ、皆さん、そこへおよらせ申しなせえ、モシよほど夜もふけました、へ、、、、、。」ト、そらわらひのおたむりはみな御尤もと、やう〳〵にだまして屏おき番の若イ者「へ、、、、、只今は大きに、ハ、、、、、さぞおめごかし、風をたて廻し、又となりの傳吉が牀へ入り、腹だちでござりませう。」傳吉「ナニサおめへ。」若者「小サなどうもおまへさまネ。」ト、ひたひへ手をや「鳥居がすわつてゐる衆だから。」ト、むねを「こゝがおまへどうも、へ、、、、、イエモウ何分にも、モシお連さまに。」傳吉「ナニよく寐て居やす。」若イ者「へイさやうなら、イヤほんに今おとまさんをおよこし申します。」傳「オイ休みねえ、ナニよこさずといいわな。」かすかに風リ「そばイ〳〵引、ぶつかけなんばん。」

第三齣

（長五郎が牀には）二人さし向ひのしんくり。おでき「わたやァおまへに云はう〳〵と思つてわすれたよ。」長「何だ。」ミ「おめへァノ藤兵衛さんが内をかぶつたとよ。」長「ナニ新川のか。」ト、膽を「そして今ぢやァどうしたんだよ。」

た、おほかた附けのほせだらう。」ミ「ナァニ流石に一番番頭だから、さうしがなくも行かねえのさ。」長「やつぱり來るか。」ミ「來るのさ。」長「一トしきりのすがたぢやァあるめえ。」ミ「あの人だつても、其の位なしがくは有るわな。此の間も來た時、『とても歸參は叶ふめえから、寧そ見世でも出さうか。』といつたッけ。何だとヨ、内ぢやァ段々下の者がの、くり上ゲて出世するから嬉しがつて居るとさ。」長「ムよつほど明けたと見えるな。その亡念はみんな手めへのからだへ移るぜえ、恐ろしい罪つくりだ。生靈や二兩ぢやァねえ、何百兩が取付かうも知れねえ。ヤレ恐ろしやノ〳〵。」ミ「夫れをこはがつて此の商賣が片時も勤まりやァしねえ。夫れだから女郎の行末といふ物は、能うはいかねえものだ。わたいらァお花荒神松か、のり賣にでもなるだらう。今ッから覺悟して居よう。」長「かはいがつての跡つぎにでもなるがいい。」ミ「ホンニサかはいがつて程の働きがありやァいいわな、實さう思ふが悪商賣だヨ。一年には勘定したらいくらの金高だか、身につく許りも多きな事だが、夫れでやつぺしピツピッとくるしむ。是れだけ悪錢だァな。おめへマァ聞きねえよ、わたいらが内あたりの女中衆は、お定まりの給金といふ物が、一年でタッタ三分さ。」長「フム安い物だなう。お信でも覺えがあらァ。」ミ「サァそこだわな？惣花からかけて、お定まりの外の貰ひ物が、大抵大キイ事ぢやァねえ。いつかも廊下で、おさはどんの控へを拾つたから、一寸見たが、正月の内ばかりもざつと〆て五兩いくらと有りやす。ハテよく〳〵ひまで、もらひのすくねえ月だつても、月に貳分はありやせうサ。何のかのとつもると、まづざつと十五兩位には、なんでも無くあたりやす。夫れにじゆんじて見りやァ、わたいらが身につく金は、猶たいさうだらう。勿論お客次第とはいふもんの、違へはござえやせん。」長「いいもんだなァ。こゝらの女は、てえけえな大屋のかぶよりはいいわえ。」ミ「それだがてんぐ〳〵に中宿をこしれへてがつに出合つたり、（がつとは色男のことなり、此の頃辰巳ではやり詞なり）中宿にきものを借りられたり、がつに取られたり、其のうへに錢遣へがあらいときてるから、こゝでたまるめえぢやァござえせんが。」長「料理番なんぞは工面がよからう。」ミ「てんぐ〳〵の辛抱づくさ、攫んだら離さねえといふものァ、田地をかつたり、すでにおめへ藏造りで、店へは伴頭を置いて、商ひをさせながら、こつちへ通ふのがありやす。つかねえ咄だが、わたいらが内は、是れでも子供をばいつそかはいがる内さ。惣菜をば旦那さんが自身に煮て、もつて喰はせなはる。惣別の事にとんだいき渡つていいから、みんながてんでんにはけむ氣になり、やつぱり親方の利口だけれど、あしくされても勤めるだけは勤めねえきやァならねえから、どの道いい方が仕合だねえ。ソシテその惣菜がをかしいわな、今時分なら馬鹿のむきみのはなれる事はねえのさ。いもにばかとか、または大根とかいふもんで、間にごまめなどといふ妻がへ這入ッて、定つたやうなお菜さ。」長「此の近所はみんなさういふもんだらう。」ミ「ナニ内によつて色

色が有りやすわな。」長「富氣岡の内ははで者だといふ事だの。」ミ「サウサ、彼處はお逸さんがきれてで、はで好き。夫れだから、今内中の子供衆も琴や三味線をしらねえ者は恥のやうになつて居て、子供部屋はとんだにぎやかだ。」長「さういふ咄だ。王智屋の内は店者のよく來る内だの。」ミ「アイお店の衆と新川の衆は何處の内へもよく來るが、とりわけあすこはお店の客が、たんとごせえす。わたいらの内ぢやアをかしいよ、此の頃は内中が拳はやりだ。」長「拳とは本けんか。」ミ「アイサおこつさんと、おいとさんが、中でも一ばんつようごせえす。お鹿さんがまけ腹をたつて、サアもう一けん行かうとせき込むのが株式で、をかしくつてなりやせん。子供部屋へかたまると、見附け次第に拳さ。馴染のお客だと座敷でもかまひやしねえ。」長「おつな事がはやり出したナア。でえぶ奥市場もひねつて來た、安くはされねえ。しかしまだ歌詠みはあるめえ。」ミ「歌詠みはわたいさ。」長「アノてめへが。そつくりと棚へ上ゲておけ。久しいもんだが今年ッから金をためる算段だ、モウ手めへにも苦勞はかけねえ。この中しやれ本をよんで見たら、きつかり當つた事があるから、ぐつと仕法を替へる氣だ。」ミ「ナゼ、何と書いてあつたえ。」長「今の客は初會に惚れられた氣で、裏から女郎の物を引きたがる。今の浮世は女郎の方から取るのを、色男だと思つてゐるとあるから、おれが氣性で、いめえましくツてならねえ。これからあんまり度々は來ねえぞ。」ミ「其の氣で外へ行くがいい。」長「糞でもくらへ。」

△はやしのゝめの明けがらすにつれて、ねぐらを立ち出づる、客をおくりの(はしごの音。)　トン〳〵〳〵に氣をつけられ、ねこかされたる契情は、「バタオヤとあきれて、かけ出す(廊下の音)

バタ〳〵。(ねむたい聲の)「おさらばよ。」(くゞりの音)　グワラ〳〵。「おちかい内。」ト、(おき番が)ふだのついたるざうりをなほし、(らうかの戸をくり)

サラリ、ガラ〳〵〳〵〳〵。「お船が宜しうござります。」(船宿)が聲もろとも羽織を脊中へはんぶん著て手拭を片手にもち(あくび)、「ア、アアフウ引、グイフウ。」ねぼけた聲の唄。二上り　宵は待ち兼ね夜中に恨み侘び、しのゝめ告ぐる合鷄の聲合言信を連の背中へとんと打ち込んで、誰に思ふ、主樣に。(口さみせん)ツルツ、ンウツン自一齣テチチンチテチチンツントン。至三齣　宵泊之部尾

第四齣　正月えびす講過ぎの世界

(朝更の光景を看るに)ゆうべのがや〳〵に引きかへて、ひつそりかんなる座しきのさびしさ。波風見通しの風鈴におとづれて、チリリンの音いそがしき而已。△跡はひまなる二階の樣子、客をかへして嬉しきあれば、別れの跡の物思ひ、喜怒哀樂の一トねいりも、はやゆり起すそばよりも、廻しは牀を引ッ包み、肩にかけたる其の所へ、あわたゞしくはしごを下りるは、呉服屋の手代と見えて、色白く丸びたひ、みすぢだちのさんとめに、もえぎ裏のてんつるてん。黑ふとりの帶を〆て、かたの手ぬぐひをとりながら、とろめんあゐびろうどの羽おりを、ぬけさうに著て、店者「どうぢや〳〵えらう早い手廻しぢや。」廻し「オヤ源四郎さん、今時分にどう思召して。」店「イヤわしはナ今朝あさ參りを願うて、漸うに來たぢや。きやつは夕部出てぢやろナ、何所にぢやい。精急ぢや〳〵。いんまのまに戻

らんと、えらう間合がわるい。ナントきびしいせがみ様ぢやろが。」若「ソシテおまへさん、陸をお出でなさいましたかえ。」店「陸ぢやゝゝ。ナンデモやつきもつきと走つてこました。」そのうちに女郎出て来り、今客をかへしたとみえ、まだ顔もなほさず青い顔ですわり。女郎「源四郎さん何だえ、とんだ時分に。」店「とんだかはねたか知らんが、トツトモウむちやぢやわいの。ヤコレそしたらァノ迎へ船をおこす様に、はやう云うてやつて。」若「ハイかしこまりました。マアお座敷をかた付けよう。」店「ヤァコレゝゝなんのいの、えいわゝゝ、だんないわい。」杯臺三ツ物てうしなど持つてくる。女「まだ何にもございませんよ。」店「何があろぞい。よくゝのあほ者でなか來やせんわい。ハヽァかまぼこよ、こちらのあてが梅干ぢやな。まづ朝茶の腹へやろわいの、オツトきたりテモつよオいしやくの。サァのまんか。」女「わたしは朝のうちは酒だちでございます。」店「なむさん仕舞た。サァ牀々、わしが遲いと跡な竝がきつうわるいぢや。」女郎「モシ藝者衆でもお呼びなせぇしな、朝はえんぎを祝ふもんでござえす。いつでもそゝくさしなはるよ。」店「ハヽァえんぎぢやエ、ハテしらん事ぢやナァ。金はをしませんから、なんぼでも呼ぶこつちや、私が戻ッてから呼ばんせ。ひまが惜しいわいの、入用はこちへ付けておくぢや。サァゝゝ牀はどこぢやゝゝ。」若「ハイお牀がよろ。」店「オット合點ぢや、來なされゝゝ。」ト、さきに立つてゆく。女郎「なんだなう、いつでもあゝだよ。」△これちよんの間の一ト切りあそび、なまなかはんかの錢なきよりも、はるかうへこす樂しみなるべし。それとは若り（新川藤兵衛）、此の節親方の手前をかぶり、歸參もかなはぬ事なれども、いまだ何商賣とあてもなく、身錢をへらしてふらつく身の上ん。起き番でいいといふ日は十日ばかりでございます。」藤「ム、金比羅の朝參りか。そりやいいが、酒といふ所はどうだの。チット迎へようか。」女「此の火鉢で尻燒といたしませう。」ト、てうしをとつて吹いて居る。藤「紙入れの間の鼻紙を渡し、サァ是れで煽ぐがいい。ソレ髪がでえなしだ。」女「ナニどうせ結ひ直しますから。」ト、紙をとつてあふぐ。藤「持髪アねえ事だらう。」其の内（おとまゝ）てら。」うづよりかへる。女「オヤおとまさんえ、おりかさんが參りましたよ。」ゆひなり。三「ほんにか、そんなら行かう。けふは何に結はうゥ、やつぱり島田にしようか。」女「おさつさんが丸まげの舌出しに結ひなすつたが、アレモ人が結はねえだけひねつて好いやうに見えます。」三「あんまりは結はねえなゥ。まげの一を上へあげて、島田の中を低くして、一體にまげを太くするぢやねえか。」三「さうさ、元結紙なしに毛巻にするからネ。それでさ。」藤「ム、そしてアノ丸まげの間に唐子の樣な物のあるのは、ありやなんといふ。」三「なんだらうナウ。」女「お待ちなせえし、エ、そりやァ輪出しさ。」三「ありやア滅多には結はねえのさ。」女「おとまさんにはいぼぢりは似合ひませんよ。」三「みんながさういふわな。コウそしてのおめへ、アノうさぎさんが來たらしらせてくんな、此間たのんだものを、アノ人はどうしてくれたか。」女「ハイゝゝモウどれもゝゝ埒は明きませんよ。私も黒忠さんに賴んだが、めつ

たに出來る物ぢやアねえ。」ミ「藤さんおめへけふは居なはるだらうの。」藤「どうしてもいい。」ミ「生きるとも死ぬとも片をつけなせえしな。生殺しぢやア取付きやす。」藤「取付き世帶に取付きも有りがてえ、マア一杯ついで下つし。」ト、杯をうける。(女)硯ぶたのかまぼこた事よ、十六文がつまみ菜を買ふにも、十文と六文と二度に買へば量りが違ふ。むきみを皿へ買ふは損。水をしほつて目籠で買へば、一ツ杓子も徳がつくと、儉約と勘畧とを等分に加減しても、よりが戻つて尻へ抜ける。能く〳〵もまだ金罰があたらねえ。ぢみなことだが去年の極月、早歸りの朝だつけ。英鄭の橋を渡ると、十許りの野郎ッ子が、筒ッ袍を著ておもたさうに休んで居る。海を見たらばまだ白魚の笊が見えた。』モウ七ッチツト過ぎか。兄イその荷は一荷いくらだ。』と聞いたら、『能く賣つて二百が物だ。』ト。俺も思はず無常を觀じて、涙がホロリ。夫れから腰の錢入れに、小三百もある奴を、『遣らう。』といつたら、流石に取らねえ。』『成程こりやア尤もだ。そんなら俺が皆買はう。』と、その荷を川へ放したら、惜しさうな顏をして、頂いて持つて行つたが、藝者に投げた壹分よりは、うれしかるのが大造だ。夫れを思へば設け悪いも金、遣ひ安いも金。世の中といふ物は人我我入で、なんだか分らねえもんだよ。」女「さやうさネ。」ミ「久しいもんだ、またお談義がはじまつたア。あんな事をいふ時はの、耳をふさいで居ねえ、おいらアはやく逃けて行かう。」藤「べらぼうめえ。おひねえ後生樂だ。」ミ「わたいは婆じみた事はきらひさ。ソシテおめへ、湯へ這入んなはんねえか。」藤「いやだきたねえ、わざ〳〵穢す樣なもんだ。」ミ「そんならよしなせえし。人は人と思つて、氣を付けるのに。」藤「化物は化物と思つて這入らねえのよ。」女「アヽハ、。」(作者曰)女の笑ひにアハ、とたつた三ツばかり笑ふもの多くあり、これよん所なくあいきやうに笑つて見せるゆゑ、とんだ上ハ調子にて、跡も先もなくアハ、わらふものなり。どなたも氣をつけて御らん可被下候。ぜ。」ミ「オヤしやれださうだ、其の氣で行つて來よう。」ト、出て ゆく。藤「王島町の湯へ。」女「向う河岸の湯イかえ。」藤「あすこの伴頭はばアさんだの。」女「ヘエ、よく御存じだネ。」藤「時々入込みな事があるよ。」女「ナニそれでも七ツから女湯だと申します。」藤「どうだか。コウこつちの事なら俺ほどくはしい者はねえぜ。つかねえ事だが、子供部屋アどこの内ぢやア、どこだといふことは餘程錢を打遣つて、ソシテ氣をつけねえぢやアしれねえ。」女「そのはずさ。私どもさへろく〳〵には。」藤「しらねえ筈よ、まづ曾代倉、富貴岡と、こゝの内と、三軒の子供部屋は、表二階よ。其の内にも新部屋、前部屋と、二ツにわかつて、兩方に板頭のあるのが二川屋一軒さ。王智やと、古預庫、此の二軒は、下に子供部屋がある。遊びつけねえ奴等は、新市場も古市場も、みんな呼び出しだと思つて居る。去年の秋から新市場も同じくふせ玉になつた。全體またふせの方がいいわサ。そこで藝者も兩方へ呼ばれると思つて居るが、おほきな間違へだ。あツちはあつちで別にわか

つて、古市の見番は指和屋に葉佐屋と二軒で、ソレ指和屋の板頭が松藏か、葉佐屋の板頭が毛登太夫だわ。夫れからモットうがち出すと、とんだ珍説があるけれど、ひよつとにくまれ口になつちやァ興がねえから、こんな口もとを云つて居るがいいのさ。深く悪穴をならべると、舞臺へさはつて、見物が面白がらねえ。」ト、酒をのみながらいつぱいにきいた風をならべ立てゐるゆゑ、女もあいさつに手こずり、ハイさやうさ、きついもんでございます、などと間をあはせてゐるところへ、同じく(女)來りて「コウおひさどんか、お國さんが待つて居るよ。」女「オイさうだらう。モシ行つて參りませう、おめへこゝに居てあけ申してくんな。」女「オット承知。モシエ藤さんおまはん居びたれをなさるね、ふんしのわるい。」藤「うさァねえ、序に此のしめしをとり替へてくだつし。」ト、てうし「そして朝いはひに誰ぞかけて貰はう。」女「羽織衆かえ。」藤「諸事女さ。」女「誰にいたしませう。」藤「誰でもいい。」此の内もはや朝直しの肴も出來、そちこちするうちはおりげいしや梅吉來ル。いよ〳〵座しきは大酒もりなり、か、ソトいイれて底つく眞似しよんまいかソリヤ。」「こゝんな中ぢやがけなるいか。」「いれて底つくまねしよんまいか、アソチヤまぬけ引。」大ぜい「オホ、。」藤「上方のおきせんぶしをすつぱり受けとつたの。」梅「あの歌のネ。おきせんといふ事がどうも知れませんから、此の間上方のお客に聞きましたらネ、江戸で云ふ馴染や色事の事だとさ、アハを かしいネエ。アハ、、、、、ハ、、、、。」女「夫れで解つたネ、私がおきせん譽めるぢやないが。」藤「それで俺が馴染か、こいつァ辷せねえわい。サア

やるべい。」ト、梅吉へ杯をなげる。此の内始終杯事お定まりに暑す。かかる所へあひかた(おとま)身仕舞をして、今湯上りのうす化粧、艷色嬋娟とあたりをてらし、そも〳〵面うすくれなゐにして、洲崎の初日の出、これがためにひかりをうばはれ、眉は見通しよりのぞむ安房上總のごとく、眼すゞやかにして月海上にすめるに似たり。口もとのかはいらしさ、につこりとわらひながら白き齒をすこしあらはしたるは、蛤町の貝をふくみたるやと思ふばかりあつて、つむりは直打のあるべつかふ物のあみだざし。衣裝付むらさきちりめんの無垢、下著は白ちりめんの三ツがさねて仕立ておろしの儘で、しつけの絲をとらずにおとなしく著こなし、鼠どんすの帶ぐつとあだに結び、小杉の紙を紙入れに卷きて帶へたてにはさみ、白りんずの長じゆばん、白ちりのゆもじにて、かけまもりの紐をみせなどは、いたつてきらひとみえて、五分もすかぬこしらへ、すこしこゞんでまんなかでつまをとり、「摩利支天河岸だとさ。」ト、すてぜりふにて藝者衆「イヤおとまさん仇だなウ引。」ミ「アイサ梅吉さん朝ッぱらからはしやぐの。」梅「ハイおるすへ今朝つぱらから。オヤおとまさん一寸あつちらを向いて、アヽいいネエ、一のかつかうがいつそよく出來ました。」ミ「おりかさんだヨ。」ト、いひながら藤兵衛がわきへ、これみてくれろエヘン、これだわといふ顏で、すわつたやうす、なるほど、貳朱にもこんな德ようむき、けつこうなしろものもあるかいと、のろいまなこで見るほど、猶うつくしく思はれ、こいつを十二匁にあれば、色ほかにあらはるゝと、藤兵衛が目のうち思はずも、トロリ〇此の内のさわぎいろ〳〵あれども、偸りながごと御たいくつ、殊に此の木の丁數も足りませねばあらましこゝに畧す。梅「さらば。」「しやきりと致しませうか、ァ、高い藝者だ。」ト、三味せんばこを、「コリヤ家來はをらぬか、ソレお先箱〳〵。アハ、、、、、ハイありがたう、藤さんまた。」ト、さわぎながら〇出しものをかさし向ひのひつそり。ぢやァねえか。てめへらしくもねえもんだ、ナゼ夕部から俺に隱した。」ト、梅吉へ杯をなげる。此の内始終杯事お定まりに暑す。かかる所へあひかた(おとま)身仕舞をして、今湯上りのうす化粧、艷色嬋娟とあたりをてらし、そも〳〵面うすくれなゐにして、洲崎の初日の出、これがためにひかりをうばはれ、眉は見通しよりのぞむ安房上總のごとく、眼すゞやかにして月海上にすめるに似たり。口もとのかはいらしさ、につこりとわらひながら白き齒をすこしあらはしたるは、蛤町の貝をふくみたるやと思ふばかりあつて、つむりは直打のあるべつかふ物のあみだざし。衣裝付むらさきちりめんの無垢、下著は白ちりめんの三ツがさねて仕立ておろしの儘で、しつけの絲をとらずにおとなしく著こなし、鼠どんすの帶ぐつとあだに結び、小杉の紙を紙入れに卷きて帶へたてにはさみ、白りんずの長じゆばん、白ちりのゆもじにて、かけまもりの紐をみせなどは、いたつてきらひとみえて、五分もすかぬこしらへ、すこしこゞんでまんなかでつまをとり、「摩利支天河岸だとさ。」ト、すてぜりふにて藝者衆「イヤおとまさん仇だなウ引。」ミ「アイサ梅吉さん朝ッぱらからはしやぐの。」梅「ハイおるすへ今朝つぱらから。オヤおとまさん一寸あつちらを向いて、アヽいいネエ、一のかつかうがいつそよく出來ました。」ミ「おりかさんだヨ。」ト、いひながら藤兵衛がわきへ、これみてくれろエヘン、これだわといふ顏で、すわつたやうす、なるほど、貳朱にもこんな德ようむき、けつこうなしろものもあるかいと、のろいまなこで見るほど、猶うつくしく思はれ、こいつを十二匁にあれば、色ほかにあらはるゝと、藤兵衛が目のうち思はずも、トロリ〇此の内のさわぎいろ〳〵あれども、偸りながごと御たいくつ、殊に此の木の丁數も足りませねばあらましこゝに畧す。梅「さらば。」「しやきりと致しませうか、ァ、高い藝者だ。」ト、三味せんばこを、「コリヤ家來はをらぬか、ソレお先箱〳〵。アハ、、、、、ハイありがたう、藤さんまた。」ト、さわぎながら〇出しものをかさし向ひのひつそり。ぢやァねえか。てめへらしくもねえもんだ、ナゼ夕部から俺に隱した。」ト、梅吉へ杯をなげる。此の内始終杯事お定まりに暑す。かかる所へあひかた(おとま)身仕舞をして、今湯上りのうす化粧、艷色嬋娟とあたりをてらし、そも〳〵面うすくれなゐにして、洲崎の初日の出、これがためにひかりをうばはれ、眉は見通しよりのぞむ安房上總のごとく、眼すゞやかにして月海上にすめるに似たり。口もとのかはいらしさ、につこりとわらひながら白き齒をすこしあらはしたるは、蛤町の貝をふくみたるやと思ふばかりあつて、つむりは直打のあるべつかふ物のあみだざし。衣裝付むらさきちりめんの無垢、下著は白ちりめんの三ツがさねて仕立ておろしの儘で、しつけの絲をとらずにおとなしく著こなし、鼠どんすの帶ぐつとあだに結び、小杉の紙を紙入れに卷きて帶へたてにはさみ、白りんずの長じゆばん、白ちりのゆもじにて、かけまもりの紐をみせなどは、いたつてきらひとみえて、五分もすかぬこしらへ、すこしこゞんでまんなかでつまをとり、「摩利支天河岸だとさ。」ト、すてぜりふにて藝者衆「イヤおとまさん仇だなウ引。」ミ「アイサ梅吉さん朝ッぱらからはしやぐの。」梅「ハイおるすへ今朝つぱらから。オヤおとまさん一寸あつちらを向いて、アヽいいネエ、一のかつかうがいつそよく出來ました。」ミ「おりかさんだヨ。」ト、いひながら藤兵衛がわきへ、これみてくれろエヘン、これだわといふ顏で、すわつたやうす、なるほど、貳朱にもこんな德ようむき、けつこうなしろものもあるかいと、のろいまなこで見るほど、猶うつくしく思はれ、こいつを十二匁にあれば、色ほかにあらはるゝと、藤兵衛が目のうち思はずも、トロリ〇此の内のさわぎいろ〳〵あれども、偸りながごと御たいくつ、殊に此の木の丁數も足りませねばあらましこゝに畧す。梅「さらば。」「しやきりと致しませうか、ァ、高い藝者だ。」ト、三味せんばこを、「コリヤ家來はをらぬか、ソレお先箱〳〵。アハ、、、、、ハイありがたう、藤さんまた。」ト、さわぎながら〇出しものをかさし向ひのひつそり。ぢやァねえか。てめへらしくもねえもんだ、ナゼ夕部から俺に隱した。

第一今まで酢のこんにやくので、突き出さねえがまづ怪しい。こりやァ大概聞えて居る。獨りつくづく考へるに、おれも今ぢやァ内をばかぶつて、一トしきりの藤兵衛ぢやァなし、うつかりあいつをつき出して、あぶもはちもとらずでは、うぬが骸のつまりと思ひ、あれ程までにも絲道のついたのを、たゞ合の手でまじくなひ、おれが前をば一ト筋らしく、心は二筋三筋の絲で、二挺三絃ながら〳〵と、ベン〳〵だら〳〵引きずつて、あぢもこはだもいりやせん。つき出すことは矢より早いが、引きしぼつたは譯がありやす。なる程かくして居た事は、わたいが悪うござえせう。ナゼ又そんなら隠すといへば、アノ喜之さんも此の春から、親御の前が不首尾になつて、大屋とやらへ當分預けられて居なせえやす。サアそこでござえやすぜ、わたいも此の内ぢやァ、やせても板頭もして居やすサ。人にも筮にとられるだけ、こゝでわたいがせつねえ場だわな。ナゼといつて見なせえし、浄るり本でもよくいふ事だが、人は落目が大事とやらで、喜之さんも心細くなつて居て便り心で來る所を、いかに情なし商賣で、讒が元手の勤めはしても、わたやァ性が江戸ッ子だから、理にはづれた事は出來やせん。今にも親の腹立ちがゆりて、喜之さんが内へ歸つたといふ事を聞いたらば、そこでこそ綺麗に突き出して、すつぱりとお目にかける氣さ。此の節つき出してみなせえし、内外の者は云ふに及ばず、あたり近所でわたいが事をほつても陸には云ひやすめえ。ナンダあれでもたて引キか、横ぞつぱうか知らねえが、おつな捌きな女だといはれたら、お客の減るのはいとはねえが、おめへも共につぶれやせう。ソレモわからねえ人ならば、とつくに此の事は咄すのだが、御如在もねえおめへだから、一人ですまして置いたのさ。是れでわるくはどうともしやせう、未練でながすとつもられちやァ、癇癪が納まらねえ。ふ甲斐ねえ娼妓だと思はれるのもくやしんばうだ。神や佛が口をきくなら、云ひ開きをして貰へてえ。わたいがお客は崇りがして、ナゼこんなにしくじるだらう、くやしくつて腹が立ッ。」ト、うつむいてじゆばんの袖をくやしさうにかみながら、きせるをとつて屏風をぶちやぶる。藤「コレ氣の違ッた羅宇屋の樣に振廻すな、やにがかゝらァ。其のせりふ聞きもあきた、一番せんじはざつとしろ。此の屏風の繪を手本にして漆彩色に書くがいい。つべこべ利口に云ひ廻して、人をば壁の落書ぢやァねえが、一心命と彫つた名も、手前の腕の人別帳へ、居抜きを買ッたしやうがには、無理八百も何のそれ、店賃と見てすましてやるわ。モウ一も二も論はねえ。所詮未練な根性骨で、突出す事は氣もねえ事。緣を切るとも切らねえとも、勝手次第だ。ふんばりあま、鬼め、お化め、蛇遣ひめ、兩國へでも出やァがれ。」ト、片手でがばとつきとばす。おとまもあきれて物をもいはず、藤兵衛が顔をまもりつめて居たりしが、屏風の外にのこしある銚子の酒を茶わんへつぎ、つゞけて五杯をぐつとほし、顔をしかめてむねをたゝきながら、「あれ程譯をはなしても、聞分がなくはようござえす、どうする物だな、ハテおめへ夫式な事ヲ仕兼ねえわたいでもござえしねえ。勿論譯の分つた人ほどせく事も又強いのさ。そんな事もこんな事も、こ

つちの體を覺悟すりやァ、面倒なことも六かしいことも、こはい事も、恐ろしい事もございやせん。モウなんにも云ひなはんな、とゞのつまりを見せやせう。」ト、手をたゝく。女「お呼びなはいましたかえ。」と「爰だヨ。」女「ハイ。」と「コウお八重どんか。お前どうぞの、此の牀をの、下の八疊へ敷いてくんねえ。」女「ハイ八疊の鄰はネ。」と「喜之さんだよ、いいよ。ソシテノ杉戸の方へとつてくんな。」女「ハイ藤さん、でえぶにが蟲でお出でなはるネ。」藤「ムフ。」ト、わ「一ッぷくのまつし。」○藤兵衛は始終だまつてすまぬ顏でゐる。おとまは酒に醉うて眞赤になつて、ひざりめんのきせるづゝではちまきをする。そのうちに下の座しきへ牀をとりかへ、みな〳〵下へおりる。（見通の方には）まはしかたお八重、ほうばいの女と何かおんみつにさゝやくをきけば、八重「それからどうした。」女「熊さんに貸した著物だから返してくんなせえとかみさんに云ッたらの、かみさんは知らねえといつたわな。」八重「そんなけちな事があるもんかな、なんでもかした著物だから、歸すことが出來ずば、これを持つて行くと斷ッて、鍋釜でも引きはづして來ねえ。大方臺調か外本へ置いて有るだらう。」女「どうもさうは出來ねえわな。」八重「ナンノけちな根性だぜ、夫れだからいいやうに扱はれらァ。ハテさういひねえな、中宿をして貰ふからには、つけ屆けも云ひ分なしして置きやすツサ。」折ふし手「アイ引。」「思入れ哮り立つてやるがいい。」ト、いひつゝ兩方へわかれる。これは按ずるに、此の女さる處に色男ありて、中宿（下さしきには）（喜之助）衣裝付器さきだつてより內の首尾あしく勘當までにはなれども、當時綠者に預りの身となり、うつきをはらすけふの居ながし、（おとまの）むりのみの五六杯に大きに醉つてひざりめんのきせるづゝをはちまきにして、牀の外へすわつてゐる。（喜之介）先刻より、何かぎつくりのいきさつあると見え、腕まくりをしてきせるをひねくり廻して、りくつをならべてゐる。「ハテかはつた夕部の調子と今朝の挨拶、すつきり何だか氣がしれねえ。くするのだ。今朝となつては一遍も顏出しはせず、內のやつらもあんまりだ。花をもらつた時ばかりちやほやするが人間でもあるめえ。勘當されても痩我慢で、仕舞札もさげさせる、女に揃ひもしてやつたが、今朝等の事もよく聞けよ。朝直しに廻しが有つて據なくぬけられずバ、お仕著通りの言傳に、さみしくとも待つて呉れとか、藝者でも呼んでろとか、云つてよこしていいはずだわ。身仕舞をする片手間で、顏出し位はしてもよからう。おれがひがみか知らねえが、まはしの女まで面ツつきが氣にくはねえ。けふは懸に出ましたの、堀の內へ行きやしたのと、船宿から呼び出させて、枡屋をおごれ、芝居が見てえと、手前の面を楯にして、してえ三昧ねだり次第、全體又呼び寄せるが、見くびつた仕方だけれど、いふなり次第の俺だから、いつもあいらを船で歸して、其の上に丸めた紙も握らせて置く。其の心いきも汲み分けずに、けふ此の頃の不調子は、あんまりしねえ慾張りめらだ。コレしち卷だか鉢卷だか、丹縮緬が欠をする、首でもくゝらねえ用心しろ。額口のほつちりは、灸點屋の看板か、天鷲絨藥も置きにしろ。鄰の客に疝氣もねえはず、頭つうに病む氣はおかたじけ、面ァ見るのもむかゝるぞ。きり〳〵勝手にうしやァがれ。」ミ「先刻よりむり酒の醉ひいよ〳〵まきり、座敷にもゐたたまらずして、うつぶしになつてひたひをた

たいて居たリしが、モシもう夫れで仕舞かえ。私がしびれは京へ上つて、あくびは大和廻りをして居やす。狐を持つて來る坊さんか、十色菓子などならべたつて、むしやうに獨りで息せいをば、もんではつて十六文、あんまり安く出なはるね。とても又わたいらがやうな、内端なお無垢な氣のきかねえ、うんのろに馴染んだのが、そつちの御不肖、買ひ冠りさ。おめへのお心に宜しく申しておくんなせえし。江戸ッ子の膽とやらも、おほかた潰れて居なはるだらう。癇癪さんへもお序に、口は隨分まめだから、案じなさんなと云つてくんねえ、お臍が茶を煮て待つてるだらう。コウ誰ぞ水でも一杯くんねえ、色男の御酒を頂いたら、身にしみ〴〵とうれしく醉つたわ。」ト、聞くより喜之介くわつとせき立ち、むねんの掛り、つかみつかんとする様子を、慌てて止める船宿廻し　女「モシ〳〵喜之さん御尤もでございます。これには樣子もござえませう、マア〳〵しづかに。コレおとまさん、どうしたもんでござえすな。」船「ムンニヤこりやア喜之さんの方が尤もだ、今や始めてのお客ぢやアなし、假初にも足かけ三年だ。お客に對してふしだらがあつちやア、先づ差當つて船頭が、旦那はおろか親方までいひ譯のいの字もねえ。モウこれからはたとひ喜之さんが料簡しても、おらアいやだ合點しねえ。コレ板頭か棒頭か、板前か釜めへかはしらねえが。」女「コレサ忠どん、おめへまでがならんでくれちやア。」ト、と船「何のことだえ、目あかしの簀か向洲の元舟ぢやアあんめえし。ならぶもすさまじいわえ。お客に船どうはならぶはずだわ、合點しねえ。」

女「コレ忠どん、マアこれだれぞ來てくんねえ。」ト、女ふたりで喜之介と忠を引きとらへ、おし止めてゐるところへ、臺所より二三人かけ來り、じや〳〵ばる忠をやうやうなだめつすかしつ船宿部屋へつれ行きし跡には　娘ぶん　女「モシ喜之さん、必ず短氣はお出しなせえすな。おめへさん方は不斷あれ程中がよくつて、どうしたもんでござえやす。」ミ「お鹿さんもお八重どんも、皆が打遣つて置きねえナ。」女「コレおとまさん、マア默んなせえしよ。」ミ「エ、やかましい、おめへッちも分らねえ、なんぼ骸は賣物でも、勝手にぶたれて濟むものかな。可愛い男にぶたれたのは、憎い男にさすられたより嬉しいとは、むかし咄だ。そつくりと、こんもり高に置いてくんな。何も絡んだ事ぢやアなし、氣にいらずば見立替へさ、なじみもへちまも入りやせん。物云ひ節が悪くつて、氣にさはつたらどうするもんか。わたやア名代のわがまゝ者、酒のわるいは正札付きさ。突き出したくつて當りやアしねえ。突き出されたくつて騒ぐのなら、御免も工面も入らねえわな。もし旦那さんが捻ッたら、口返答もしやすめえ。ふて寢の用事も付けやすめえ、船頭衆まできいた風だ、辰巳へ上つたお客だつて、辰巳上りもいけやかましい。喜之さん緣切榎だよ、さう思つておくんなせえ。」女「コレサまあ。」ミ「エエよしねえな、又たち歸る未練はなえ。コウ喜之さん、おめへわたいに是れほど云はれて、だまつて居てすみやすか、アハヽヽヽヽヽヽ、ホンニサ、思ひきられねえ所を、むりに思ひ切つてくんなせえし。わたやア七十五日わるく云はれると思へば、きつい事はねえ、おさらばよ。」ト、立つてゆかうとす

るゆゑ、娘分、をんななどより合つてりかいをときながら、座しきにとめておく。喜之介は始終物をもいはず、たばこをのみながら、むねをさすつてかんにんしてゐる。喜「ム、その狂言は呑込んだ、モウ論はねえ何にもいはずさ。おれも男をすつぱりとつぶしたから、やつとこそつとこ料簡して居る。利も非もしらねえ人でなしに、物を云ふもけがらはしいから、我にはいはねえ、コウおめへ達も一座に居た懸合ひだから、野暮な咄も聞いてくんな。今更過ぎた事を云ふぢやァねえが、べらぼうにされたおまけに、べらぼうの一代記を讀んで聞かせよう。惣別客の心はひとつで、十人が十人百人が百人、皆うぬが氣ぢやァいろ男だ。夫れでなければ面白くもねえといふもんの、又女郎とても其の通り、まづ己惚が先に立つ。其の己惚の功じた上が、迷ッたり迷はせたり、生死の場にもなる、突出すもあり出されるもあるやうになる。元はといへば、皆外ぢやァねえ不孝の罰だ。常々立派に口も聞いたおれが、今おめへ達の見るめへで、赤恥をかくも不孝の罰。是れといふも平生から、親の意見も上の空にして、慈悲があまればあまる程、内に居るのがうるさく成り、鳥獸にも劣ッた奴にだまされるとは露しらず、のろくなつたが一生の誤り、世はさま〴〵といひながら、あいつが腕の卵塔場へ逆朱に彫つたおれが名を、火葬にされたがまだ仕合さ。施主がかはつて土葬なら、無縁になつた其の上に、又穴掘にさらされて、先祖代々おれ一生、名のしなびるまで、汙れを殘すに、まだしもこれが目附重寶さ。思へばこれも信心する、八幡さまと支天さま、ついでは表の耶摩口稻荷のお蔭だらう。

何もかも親の罰だとあきらめれば恥かしくも惡くもねえ。ア、世の中はおつなもんだ。忠に船を拵へろといつてくんな。モウなんにもいはねえのさ。」女「イエそれぢやァ濟みません何でもをる。」喜「ハテはじまらねえこつたわナ、へこんで歸りやァあの子もよからう。折角今までの馴染甲斐に、あの子のお名に疵は付けねえ。」ト、煙管を口にくはへて居ながら、片手できせる筒へ入レ、とり直して懷へ入れ帶も〆直さず、羽織も内所へ預けたまゝ、心の内でしたくをしてゐる。おさま「は、しばらくだまつてゐる。オヤほんに名の火あぶりで思ひ出した。起請に添へた髪の毛をこつちへ歸しておくんなせえ、ひよつとうなされちやァ蟲の毒だ。」喜「首にかけたる守袋より二重三重に包みたる起請と切髪をとり出し、引札同然の此の起請を守袋へ大事にして肌身はなさず持つて居たが、今ぢやァ却つて恥かしい。最う一返お役に立てろ。」ト、なげ出してわたす。おとまはとつて中を改め懷へをさめ、帶にはさみたる紙入れより、喜之助が方よりとりかはしたるきしやうの上、みす紙四五枚にてくるりとまき、ミ「サアおめへの起請も返すから、紙屑籠の足しにでもしなせえ。」喜「何。」ト、ひつたくつて業腹紛れ引きさき捨てんとする所を おさま「は聲かけ ア、コレ夫れは用。」喜「ム、なんだと。」ミ「サ用は何にもおぜえしねえ、切れたおめへにきついお世話だが、引裂いても譽人はなし。船の内の慰みに、ソレ一返讀んで改めて、跡は勝手にしなせえし。」ト、心ありげのおとまがことば、口をしくは思へども、起請をうけ取り紙入へ納め、物をもいはず廊下へ出でんとする 娘分女二人「袖にすがり、喜之さんマアちイッと私どものいふことも。」喜「ハテさてしつこい、離しねえ。」娘分女「詞を揃へ ちつとは聞いておくんなはいまし、私どもがしりながら、こんな事にさせ申しちやァ、どこへもどうもいひ譯が立ちません。」女「おめへマア旦那さんにちよつと。」

女「アイ。」ト、壹人はかけ出してゆく。ミ「となりの杉戸の方にむかひて、わたいらァ外の子供衆と一ッ釜にみなすつちやア、チット當りが違へやす、お嬉しからう藤兵衛さん。」ト、聞くより喜之介ふりかへり、「ナニ藤兵衛、ム、藤兵衛とは新川の。」船頭「ハテ四の五のも入りやせん、すみ濟ましも胸にある。おめへも喜之さん私も忠だ、ハテマァ何でもお出でなせえやし。」大ぜい「コレ忠どん、おめへがまた。」船「エ、やかましい、さるぼうめら。ばかのむきみの惣菜で、芋でもくらつて屁でも放れ。」ト、廊下をばた〳〵かけ出し、はだしになつて表へ出で、山口稲荷をよこにみて、がんぎをとび〳〵川岸へおり、もやひのつなを、片手でひかへ、船頭「モシおあぶなう。」喜「たゞだんまりにて船へうつる。○跡よりあわてて家内の大勢、娘分を先として、どや〳〵がや〳〵はだしでかけ出で、「モシエ喜之さん、さうなすつちやア。コウ忠どんや、なぜお前お留め申してくれねえかな。」船頭「爰始まつてつひぞ聞かねぇ。」ト、ひとりでもやひの綱を解キ、一ッ本ンさしてのり出す。あとには大ぜい、川岸ばたを橋手前まであるきながら、申しわけやら云ひわけやら、大ぜいの聲「ベチヤクチヤ〳〵〳〵。ガヤ〳〵〳〵〳〵〳〵。ベチヤクチヤベチヤクチヤ〳〵〳〵。ハイさやうなら〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵。」ト、いふこゑばかり。（作者曰）此のおなじく〳〵〳〵〳〵といふ文字を横から見れば浪のかたちになる、是れ則ち古市場の道具立で△ムり升。△船は新市場の中程へいたる。懐中より起請を出して上の包を引きほどけば、みす紙を五六まいかされて、紅筆にてかき付けたる文字あり、仔細ぞあらんとおし開けば、跡や先なる女の文章。

用事のみしめしまゐらせ候。扨とよけふしの事一々御はら立ちの御心のほど、かね〴〵かくごの前に御座候。此のわけ合ひはどうも〳〵も申しわけもなき事ながら、少々のあやあることと御すゐにも御さつし下されかし。くどうは申さず候まゝ、今一度御腹だちを御かんにん被成候て、何とぞ何とぞ此の所書の許へ一寸御はこばせ願ひまゐらせ候。とてもこなたへは御入らせもあるまじく、また忠どの事もきつくはら立ちのやうすにさつしまゐらせ候。これとても無理ならず候。たゞ何事も申譯のかず〳〵御めもじのうへにて、めんぼくもなく御恥かしく存じながらも、此のわけ一通りを申し上げたく候へば、何とぞ〳〵書き添への所まで御入らせかならず〳〵御まち下され候やうねがひ上げまゐらせ候。其のふしにてかれこれともに筋の立ち候事に御座候。氣強き女と思召しのほどいくへにも御はづかしく、たゞ〳〵おもふにまかせぬ身にし候へば、しみ〴〵じれつたく、心のうちにてふさぎをりまゐらせ候。しんにけがらはしき畜生とも思召して、一たび御たち歸りのうへならば、委しく〳〵わが身むねの中御あかし申し上げ度、それのみ念じまゐらせ候。わからぬ奴と御つもらせもあらんなれど、かやうにまでも申し上げ候へば、ぜひ〳〵一たびは御歸らせ、神かけ祈りまゐらせ候。筆すゐながら此のわけを忠どのへも鳥居町の八五郎さま、きやうもじ樣へもよしなに御申しわけ下されかし。申し上げたき御事も此の中にて候へばあら〳〵しめしまゐらせ候めでたくかしこ。

喜「ハテナこりやこれ今の樣子とは、雲泥の相違。ムさはさりながら彼奴が心底、よもや斯うとは

おもへども、夫れといはれぬあの場の一埒。只何事もおとなしく、つき出されたのが後篇の種。とはいへ、まざ〳〵どの面で、又三編目に、ア、イヤ〳〵〳〵互の心の眞中へ、ぴんとおろした錠前も、明けていはれぬ胸と胸、ナニ〳〵處は七軒堀。」ト、ひとり手をくみ、思あん　船頭忠「此の意趣ばらしは今夜を過さず、理みちで行かずば腕づくで。」折ふし新市場の二階「ハテなんにもいふな、人では無えわ。テンテテ、、、、、引。」（わかれ三重）

是より第五齣

辰巳七軒堀おとま親里の世界

附言　抑〳〵おとまが性質行狀善なるか、かつ惡なる乎、いまだ知るべからず。前編長五郎に偕老の約を契つて二客を廢し、後編藤兵衞に同穴の情を通じて箇の壯夫を倍秉す。必竟する處正に是れ「きれてみれんでトツチリ頓。」に立ちかへるの心なるべし。吁薄情浮虛一三昧。

船頭深話　大尾

前編ノ二一書盛二行二于世一。其ノ蕭洒亦殆ド盡セリ焉。雖モ然リト觀ル者尙未ズ二以テ爲サ足レリト。故ニ搜二索ノ其ノ餘零ヲ一以テ獻ズト二河東遊戲之士一云々。

船頭部屋序

船頭部屋とは何ぞや。風の夜雨のふる市場、石にたつ矢の虎よりも、念力通す猪の牙の舟の、爰に臥猪の牀なれば、假に部屋とも呼ぶならし。されば家鴫は枕筥から飛んで出で、柏餅は船打場をや夢みらく、河岸番よく艫をあつかへども遣ぐ事を知らず。起番よく夜船をこげども後朝の草履を違へず。客廻りの子の送り舟は傘をさして一本綱をわたるより速く、ぶんながしの迎船は干潮にながるゝ木瓜よりも遅し。チヨット作者の傭船はずるけるにあらねども、其の後編のおそなはり、やうやくつゞりて三篇目、おふねができましたようと云爾。

山下亭上に於て醉中毫を採つて

猪牙散人述

見番凡例

○船頭部屋と號するは、舟頭の寐る處にて、亦子どもの客を送つて出た後で、色よりかはいい抱火鉢の眞な噺をするなれば、船頭深話のはやり子に、後をつけ後篇の南一片三編とす。

○前篇の二書に古市場の穴を穿ち、風俗言語の趣は盡したれば、おとまが眞實を主とし、聊か流行をくはふ。前後參考して其の花實を知り給ふべし。

○おとまが客喜乙助、長五郎、藤兵衞、三人の達引、此の本にそのいきさつをわけて、全部三冊まるめてしまふ。尤も客のもめやひは、娘分、船頭、幷に作者の掛りあひなり。オヤきつい苦勞性サ。

以上

船頭深話後編　二篇目

辰巳　船頭部屋　三篇目

鳥居町舟宿の套
七軒堀親里の套
鶴ケ岡山本の套

船頭部屋

猪牙散人著

發端

昔鎌倉の傍に手越の里といへる花巷あり、戀を賈ふ肆とて、その名も古き市場の繁昌、今復毫に云ひもつきず。そも巽の風土たるや、明の珠市に彷彿たれば、市場とは稱びなせるか。爰も都の辰巳とて、喜撰は朝茶の梅干に、榮代團子の角とれて、酢いも甘いもかみわけた、彼の喜之助が息子株は、唐の樊川、晉の謝安が風流に倣ひ、男がよくて金もちで、吳郡の張翰、賴兼公、高雄の茶店に憩ひて、比日の眼を覺すがごとし。店物の藤兵衛は、頗る瓜州の蕭伯梁に似て、豪風見通しを賑し、長五郎が強みは金革を衽し、比翼筵をしいて死すとも厭はず。實にはまればふかき深川に、うきかはたけの白人は多かれど、白門娘が女俠を學び、おとまが能く三個の嫖客をまはす事、宛も筥まはしの尻がるの如く、意と素足はつめたけれど、あつたかい大ふく餅、お客にぶつかけなんばんそばイそばイ引と云々。

鳥居町舟宿の套

神や佛がうそつくならば、ほれた證據をどうかこかいな、その惚れやつた起證をば、互に衣裏へか
け袋、喜之介おとまが戀中は、あまい艫杭のやうなれど、火繩をつけて枕箱とす、娯しみ又その中に
あるべし。　こゝにおとまがいろきやく喜之介は、船頭深話のきりに見えたるごとく、おとまにつき出され、くやし
くは思へども、むねをさすつて朝がへり、鳥居町舟宿八五郎がさんばしよりあがり、かし藏のひあはひ
からあしばやにかつこみ、いきなりにこたつへむぐりこむ。此の舟宿のにようぼは、辰巳で娘ぶんをしてゐたあげく
なれば、じよさいのないふうぞくにて、そうどうこのへつつひ、からかねの茶がま、しんちうやくわんをごたいさう
に、ちつぷかつぷ、といはせながら、「オヤおかへんなさいましし。」ていしゆ八五郎「おはやうございやした、きつとおずる
けだらうと思ひやした。ァ、なむめうほふれんげきやう、めうほふれんげきやう。」ト、葛西芝又村から出る帝釋天の大きな
かけものにむかひ、どてらにうづらかはのしごきをしめ、やうじをまげにさし、いけぞんざいなりで、めうほふれ
んげきやうをへしといつてる。喜之介はこたつやぐらにひたひをおしつけ、おとまときれたものおもひ。とはしらず
して「喜之さんしつかりおつかれと見えますネエ。」喜之介「ちつと考へる事があつて、かうやつてる
るのサ。ひよつと二河屋の女がこめいもんでもねえ、きたら居ねえやうにしてくんな。」ト、中じきりの
きる。船頭忠は河岸あげをしまひ、喜之介「忠こう、おとまが今朝のあんべいしきはどうだらう。」忠「アイ
あさめしをくつてる。障子ごしに、
サたいへんネ。」喜之介「かんげへて見るに、おとまがくらひよつて、いつたばかりでもなし、なにぶん
すまぬ心のうちにもしばしだ。」うた「もめでもありましたのかえ。」喜之介「イヤ一向話にならず、大ふ
印、ナウ忠こう。」忠「アイサ思ひれふんぞつてやらうと思ひやした。」うた「こんたあつき申して如

何したのだ。」忠「二番目が出ねえぢやあ分らねえ。ネエ喜之さん。」喜之介「さうよ、いま〳〵しい、ナ
ア忠こう。」うた「おじよせいもなくつてて、おめへさんなによを腹ァおたちなさりやした。ァノ子も
どうしたのだらう。」喜之介「いけふさ〳〵しいあまサ、こんどあふのが命がけだ。いつそ二河屋の河岸
をかへようか、ナウ忠こう。」ト、しやうじをあけ、「なんと長棹一本バァ、引といふ目にあつたぢやァねえか。」
忠「アイサ大きにバァ、引。」ト、いひかゝつて飯がのどにつかへて一句も出でず。折しもきかゝる二河屋の女おし
か、顔見るより喜之介はしやうじをばつたりとたんのひやうし、忠はしやつくりぎつ
くりしながら、「おしかどんバァ、引。」おしか「オヤ〳〵忠どんたんとたべな。」忠「直シの茶漬ぢやァねえか。」
紛らかさんと「おしかどんバァ、引。」と笑ひながら「おかみ
めえし。」ト、しやれながら、しるをすふと、又しやつくり、せん おしか「オヤ〳〵〳〵。」こしかけて、「おかみ
忠「アイサ大きにバァ、引。」ト、いひかゝつて飯がのどにつかへて一句も出でず。折しもきかゝる二河屋の女おし
か、顔見るより喜之介はしやうじをばつたりとたんのひやうし、忠はしやつくりぎつ
くりしながら、「おしかどんバァ、引。」おしか「オヤ〳〵忠どんたんとたべな。」忠「直シの茶漬ぢやァねえか。」
紛らかさんと「おしかどんバァ、引。」と笑ひながら「おかみ
めえし。」ト、しやれながら、しるをすふと、又しやつくり、せん おしか「オヤ〳〵〳〵。」こしかけて、「おかみ
ら、ちよつとおより申します。モウ喜之さんのこつておよりよく出かけたの掛廻りか。」しか「ハイ西河岸までめるりますか
さん此間は。」うた「オヤおしかどん、よく出
ら、ちよつとおより申します。モウ喜之さんのこつておよりよく出かけたの掛廻りか。」しか「ハイ西河岸までめるりますか
いました。もちろん藤兵衛さんといふむづかしいお客のおちやひで、朝直しとなつて、おとまさんも
たよ、なぜ。」しか「喜之さんはおかひなはいましたか。」うた「河岸から直に歸りなす
醉ひきつてゐなはいましたから、チツトまちがひもございましたのサ。どうぞお出でなはるやうにお
たのん申します。」うた「ウ、イイ〳〵、喜之さんのだゝつ子も久しいものだよ、お出でなはつたらさ
う申さうわな。」しか「どうぞお頼ん申します。コレ忠どんつれ申してきてくんなよ。」忠「あかすかべ

い。」　しか「オヤ忠どん鼻の下におまんま粒がくつついてるよ、モをかしいよ、ヘ、オ、ホ、、、。
ハイさやうなら、おかみさん。」ト、いひすて、出でゆきたるあとにてしやうじをあけ、うた「喜之さん、おききなはいましたかえ。」
喜之介「ゲップアツア、引聞いてゐて氣がくさつた。いつそのくされ酒でものまう、忠こう魚太へいつてなんぞのめるものをもつてききつし。いめいましい。」忠「御酒でもあがらずばと、ふるいせりふをいふでもネイ、いつてゐるりやせう。」ト、投網町のはるやうだよ。」喜之介「なぜ〳〵。」うた「お顔つきがいつものやうでございませんからサ。」喜之介「そのわけといふは、夕ア新川の藤兵衛とおちやつて、いきはりづくの朝直しだから、ソレむづかしからうわさ。此の節藤兵衛も店をかぶつてゐるひがみから、菱垣のてんまを見るやうに、とかくぶつつかりたがる。おとまはせわになつた客の事なり、麁末にもならず、おんばが榮代をわたるやうに、氣をながく遊ばせやすなどと、おれをばちやかしておき、うつてかはつたあいそづかしサ。充滿坪の煤はきするやうに、あくたもくたをまけ出して、起請にそへた髪の毛をもけへせといふから、こいつ藤兵衛がせくなとも見たが、イヤ〳〵おれがうぬぼれはこゝだ。悟れば起請も反古一枚、髪の毛そへて紙屑籠へうつちやるよりは、とやつてしまひ、色氣をすてれば誠のお客だ、耶摩口稻荷もせうらんあれ、此の初午の仕舞にも見通しをひつくるけへし、にぎやかにあそぶがすぎで、見えにも千兩一分貳朱、三

分五厘ひけはとらぬと、一番成田屋をいふ氣になつたが、イヤ〳〵此の節不印の身で、くやしんばうとおもはれてはと、なんにもいはず人ではないわいと、五大力の源五兵衛きどりで、平氣でかへつてきたのサ。」うた「そりやア大變でござりましたネイ、さういふ事なら二河やの女におあひなはればよかつた。」喜之介「あつては内のあたりもあるやう、癪でもいつてはわるいからさ。」うた「おとまさんもあやまつてよこすほどで、お文をよこしなさりさうなものだに。」喜之介「その文がチット解りかねる、きれてしまつて舟へ乘り出し、とりかへした起請を川へながさうとおもつたら、上包にあいつが手でこれ見な。」ト、みす紙五六枚に紅筆でかいた文を出す。うた「なにかおもしろさうなお文だ、ドレお見せなさいまし。」喜之介「イヤそれから御らうじろ。」うた「アレサお見せなはいまし。」喜之介「ナニ見ずともの事サ、文句はしれた大安賣り、多少によらず御用向とかなんとか書いてありさ。」ト、ちやかしながら、火ばちへくべると、ばつともえたつ。かんきんをしまひかゝつて、
八五郎「ドロ〳〵〳〵〳〵、おとまさんが高尾で出ようといふ所だ。アハ、、、、。」うた「ヤレをしい事をなすつた。」喜之介「ナアニけがらはしい。」ト、おもひきつた顏つき。此の文の文句は船頭深話にあればこゝに畧す。うた「おとまはんの意いきがどうもわからねえよ、女に持たしてよこしさうなお文が、きれてしまつた、おまはんの手にわたるといひ、燒きすててしまひなどは、どうもあやしいネイ。」喜之介「あやしくもねえ、おもくろくもねえ文さ。チットからんだ事があつてつき出したが、七軒堀まで來てくれろ、筋道をたてる事があ

ると、書いてあつたのサ。」　うた「それでは大きに譯がありまさあ。七軒堀はおとまさんの親元、七軒堀がかんどこの文句でございますわ。」　喜之介「さてはさうかといふ、ふるてや八郎兵衛ちやァあるめいし。」　うた「オヤ書置ぢやァあるまいし。」　喜之介「無事息才ぶえんの書置サ、八五郎さまとうもじ様へもよしなに御申しわけ下されかしとか書いてあつたつけ。」　うた「それではアノ子がわたくしらにも、頼みなはるといふもの。なんにしろ七軒堀へお出でなはいませざあ、わかりますまい。おもしろくなつてめるりましたネイ。」ト、いふ所へ、船頭忠魚太のをかもちをもつてくる。おうたはどうこ火ばちへ、しうた「おねえ、忠こう一ツのんでわけて下つし。」　喜之介「猿丸太夫奥山にといふ身で、トかんけへて見てもいい智慧も出のつこんでいきなり見通しへまつすぐ、イヤ二河やの廊下はまがつてをりやしたつけ、へ、、、、。」うた「それぢやァおとまはんの顔を、ふみつけにお出でなはるやうでわりいから、先づ七軒堀へおもひざしサ。」　喜之介「うんのろにゆかれもしめえ、うつちやつてしまはうか。」　うた「ハテかはいさうに。おとまさんもないしようを通すにやァ、何か深いおはなしえひがありませう、おまはんも又、足かけ三年のおなじみぢやァございませんか、短氣にうつちやつてしまふは、惜しいぢやァございませんか。」喜之介「ナアニ袂にいれた葬禮の強飯を、おつことしたともおもはねえのさ。」　八五郎「なるほどうつちやりやすいものだが、お待ちなせい、今朝のおこりは新川の藤兵衛此の藤兵衛は辰巳婦言よりのなじみにて、おとまが一客なり。さんとやらだらう。しかし酒店の番頭衆で、大ふうをきめても、お店を出ちやァ天たうほしの河童棚から落ちたはうろくサ。なぜはうろくなら、ほた餅でも燒くばかりで、せつこんでも手は出やせん。よしんば年季をぬき、見世でも出さうが、アノ子の氣でそろばんぱちく、まじめになつてどうして守つてるやせう。鳶長がはじめからの色きやくで、達引とか、いさみとか、はだえひとか、氣ぐれるとか、いふ所でございやせうが、まかりちがつたら、地めへをかせいですごすとか、もしもなけい年季のうちどう風がかはつて、あふりを喰ふめいもんでもなしと、小股にきり出してるかもしれやせん。照降町ぢやァございやせんが、顔をふんだりさしやつたり、下駄傘の商ばいづく、てりふりなしにしてくが、どうらくものさ。チヨット湯へいつてめるりやす。」ト、いひすて、やはた屋の湯へ出てゆく。此のて、奥におもしろきしゆかうあ　忠「オツトお替りなしに心はとほりものにれば、わざとはづせしなり。　喜之介「おきやァがれ、あんまり地口が悪いかお替り目か、お銚子樣には先づ〳〵これへはどうであります。」ちつとうきやせう。」ト、さすがざしきをしてゐたそれしやのは　チヤン　うた「しみになつてては飲めませんネイ、うき世とはよくあきらめた、むりな事チ、リチヤン。」　喜之介「ありがていく。」　うた「ちつとおうたひなはいましえ。」ト、ばちでかたをぬからず、　喜之介「神や佛がうそつくならば、ほれたしようこをどうかこかいな。」つく。

ト、うたひながらさかづきをとる。うた チヤチヤン ト三味線をひざにおいてしやくをしながら、「古風なやうでも起請はよつほど意いきのいい文句さネイ。」ト、いひつゝ又三味線をとりて、「むりないひわけするすみの、ばからしいほどいとしうてならぬ○ホンニ此の唄の通りおとまはん、おまはんへ起請のいひ譯がしたからうと思つて、いつそかはいさうでありまます。」喜之介「ナァニあのべらぼうめが。」うた「むごい事ヲおつしやるよ。だまされると思つて、今から七軒堀へいつてごらうじやし、起請の譯がわかりませう。ハテ一旦は藤兵衛さんの顔を立てずにもおかれず、心にもねえあいそづかしを申しやしたが、此の上はといふお苦はんの意いきが、おもしろいとこぢやァありませんか。」喜之介「いはれを聞けばありがてえが、突き出されたとこへゆくと云ふもうんのつらしい。」うた「ハテないしよを通した文があれば、おまはんのひけにはならず、譯を聞いたうへ濟みすましはお胸に有ります。」喜之介「じよせいのねえおめへの云ふこつたから、行つても見ようが他所行きはなるめい。」うた「ハテおまはんにも似合はねえ、藤兵衛さんに用事をあびせて、寺參りとかなんとか、さんだんが有りませうわサ。」喜之介「どうせひまなからだなり、あばれ丹前で乘り出さうか、忠こう鷹橋まで舟をこしらへさつせい。」忠「また百足屋としやれやせうか。」ト、ろうすべりをかおびしめなほしはおりをきる。うた「オヤお襟がかへりません。」喜之介「オットきついせきこみやうサ。」うた「ちつと性をつけてあけまうさう。」ト、どうせなかを一ツくらはせて、はおりのえりをなほす。（劇場のしやぎりの音）ドロン〳〵ドコ〳〵〳〵

ドコ〳〵ヒヤイトロ〳〵〳〵。

七軒堀親里の套

女乞食共大勢「おやんなさいやしな、御繁昌のお家さま、お嫁子様の御初産でエござりやすわな、お祝ひでイござりやす。こんな時でなくちやァ、お貰ひにやァまゐりやせん。とらせてやつてくださりやしな、おくんなさいやし〳〵〳〵〳〵。」ト、門口にしやべつてゐる。見世のものはき耳つぶしてゐるゆゑ、三味線なら、一本はりあげ、てうしを「大ぜいぢやァござりやせん、此の人數へくだされて、たつた千兩か二千くるはせて、きざをいひ出す。兩、一萬兩とも入りますまい。けつこうなお藏づくり、鼠穴でもありさうだ。大御新造様、御隱居様おそろひなすつて御はんじやう。お心よしの胸氣もの、御嫁子さまがおいとしい。お質屋様かしらないが、流しておしまひなすつたら、七夜の祝儀も出さねえで、ろくなこつちやァござりやせん。初めてのお孫さまでござりやす、疱瘡をおしまひなさるまぢやァまゐりやせん。若旦那様ァおほふうに、女郎買ひばつかりなさりやすから、若御新造様ァ御心らうはおさだまり、店ざらしの番頭様、お圍ひものにはお情ぶかし。お若いしゆも拔けがけに、遊びにお出でなさる事もしつてをりやす。一時ほどしやべらして、まじめなつらでけつかるが、お氣の毒だからもらひやすめえ、いま〳〵しいふけィきな。ベチヤクチヤクチヤベチヤガヤ〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵。

△見せのものはもてあましてゐる所に、小ぞうしきりの札がとんでゐるを見つけ、出して見せるゆゑ、みなあやまつてチヤホヤと立ちさる。あとは大わらひとなる。（喜之介）は折しもこゝにきかゝりて、ガヤ〳〵いふがみゝにとまり、〇につくい口をききをるが、又よく聞けば尤もだ、こゝの息子もおれがやうに、女郎買が好きゆゑ、あいらが耳にも入り、人非人にさへさげすまれるやうになつては、世間の人の思はくはどうだらう。勘當されたおれが身もおなじ事、親の意見もうはの空、こんなにあそびあるいては、番頭はじめ氣をわるくし、みせの者もうはきになるやうでは、あいらが云つた通り、身上の瘠衰したぢ、おれが心一つから、女房子を泣かせるも、不孝の罰、非人にも劣つたか。ト、心づきはつきながら、おもひきられぬ惡緣にて、おとまが内にたづねあたる。見世はがらくたものをならべた、見たふし屋にて、おふくろはほろやをすると見え、お喜之「おとまが文にやぢはふるくぎをきたつてゐる。喜之介はふたおやに近づきになり、いろ〳〵はなしあり。こゝまでたづねてくれろといふには、譯もあらうしと、お近付ながらめゐりやした。」おやぢ「御しんせつな旦那だ。」おふくろ「あけすけにわたいがおはなし申シやせう、おとまが病氣でひつこんでゐる時、見舞にめゐりましたら、泣き事ばつかり申しました。」板頭になつて人めへはいいやうなものの、部屋のつきあひは張るし、苦しくつてならねいから、いつそ死んでしまひたいとて、かはいさうに泣きましたよ。」ト、なみだぐみ「とりとめたお客はなし、お名聞といふはお前さんと、藤兵衞さんと、長さんといふ三人許りだと申しました。藤兵衞さんに年季を抜いて、かこはれる所でございやしたが、ついお店をしくじつてから、おめへさんをやかましくせきなさるが、新子のときからせわになつた義理もあれば、どういふはりえひにか、おめへさんへあいそづしかをすめいものでもねえと、氣をもみきつてをりますよ。」喜之介はむねにぎつくりあたりしが、起請もほぐに「なるほど藤兵衞はわつちより前の名聞だからら、義理と下帶ははづされねえといふ場もありやせうサ。」おふくろ「お目に懸つてお噺し申していはそこでございます。憚りながらおめへさんも、此の春から、お内のめへがおわるいさうなり、その所へもちこんで、切れるのつき出すのといふ事はもつていねえ。勤めをするほど、義理といもじは外されんといひました。喜之さんが内へはひりなすつたら、そこでこそ、きれいにきれるともいたしやせうす。藤兵衞さんの方はつつておきやすが、長さんとは女房やくそくもして、藤兵衞さんに疑ぐられ、ほりものは消しは消したが、情をたつてあひやすから、三人おち合ひなすた時、いきはりづくで、けんくわにでもなつては、板頭もしてゐながら、お客の見わけもしらねえかと、帳場の前へもすまず、部屋の笑ひぐさになるがくやしいと、アノ氣だからやきもきしてをりまさア。その中でも、もしやのするにも、たのしみにおもふはおめへさん、尋ねてお出でなさる事もあらうから、お近付になつておけといひました。それにはてめへの口にはいひにくい事もあり、商賣人のやうにもねえ、やつぺしまだ娘子どもでござりますよオホ、、、、。」喜「わつちも三年ごしのなじみなれば、料簡なくてもはこびやせん。」ト、あとはたばこの煙にまぎらし、勘當の身なればのつきつた事もいひ兼ねる。

ひにござつたといふものだ。」おふくろ「とつさんおめへひつこんでゐな、モシ聾でございますから、ひやうけた事ばつかり申します。」おやぢ「旦那、何か下直にたとへるやうだが、ハテ年明きめへの古葛籠でも、ひつちやうには、れんじやくといふ親御のえんがきれちやァ、とんぢやくなしになるものサ。」ト、ふるかねの中にある五とくをとり出し、「モシ此の五徳は一本足がかけてをりやすが、たとへといはば藤兵衛さんと長さんの、二本の足をひかして、おめへお一人でも、たちもしやせうが、まるつぶしにもなりやすめい。三ツ鐵輪でうつくしく、おとまが顔も立つやうに、旦那おたのみ申しやす。」おふくろ「おとまはひとり娘でござりますが、此のおやぢがだらくで、他人の金にさせるよりはと、うち賣つてしまひましたが、今ぢやァかはゆうござります。」おやぢ「なんだ娘を賣つた。べらぼうめ、親をうらうとつて買人があるものか、モシ二そく三もんのがらくた道具屋だから、しろうと衆は見たふしやといひなさいやすが、人のしんしやうを見たふすではございやせん。見たふされるやうに、もちくづした物だから、先づへつつひの尻がくさつて、ながしのはうへゐざり出し、腰張までひつぺがしてあるから、紙屑籠は腹ァくだし、はつかけ庖丁、足のきかねえ俎板、でくのぼうの手桶、目くらのわさびおろしや、鼻ツかけの阿彌陀さま、へちやァねえかたあものを買ひこむやうなもの。先祖代々のつたはりものだとある事ゆゑ、いい物かと思へば、くすぼりきつたくり位牌、〆ていくらがものもなけれど、代呂物にしてふんで見るは、商賣冥利、おとまがやうながらくたでも、おめへさん方に掘り出されりやァ、お道具にもなりやせうが。」ト、はひふきかつち「ホイめけたらとけべいかどこへいつた。」喜之介「成程おめへのいふ通り、見たふされると思ふがわるい。商賣屋といふに心がつけば、かひかぶりもあるめえが、ほしいとおもつた道具なら、直をつけて見る氣だが、手附をうつた藤兵衛が、まるくいけばいいが。」おふくろ「藤兵衛さんともおちかづきになりやしたから、まるくをさまることならば、五とくのやうになりやせうわ。」喜之介「しかし長がところがどうだらうか。」長五郎「長たあおれが事か、どなただれだ。」ト、二かいからおりて來る顏を見て、思ひがけなく喜之介は、どうしてこゝにときかれもせず、あきれかへつてことばもなし。長五郎「長とよびなすつたァおめへかえ。二河屋の廊下や小便所で見申したおかほだ、喜之さんといふはおめへだネ。」ト、ていふ故、喜之介「アイわつちさ。」ト、いつたばかり大ぶうにたばこをのんでゐる。「さやうならチットきせるを下において聞いてくんなせいし。チットおたのみがございやす、おとまがことさ。三年このかた名剔みこんで、友達や子分にものろく思はれる程だから、ぜつぴ女房にしねえぢやァ、組合へも立ちやせんから、おめへさんさのみをしくもねい事なら、きれいにおとまをわつちにおくんなせいし。」喜之介「跡からあがつたわたしなら、おとなしく名代をとるか廻しになりとしやせうわ。」長五郎「見通しでもらひかけやァしめいし、革羽織の紐を見るやうに、よぢくれた挨拶をしなさらずと、いやならいやでようござえすわ、吾妻ツ子のやうにもねえ。わ

つちもちやうがゝへをしてゐやすから、なんかんおにぶをいふでもごぜいせんが、おめへの出やうがおもしろくねえ。鷹橋へ引つかけた車力ぢやァねえが、横つたふしにのつかけるのだ。金比羅さまが羽團扇づかひをするやうに、高慢はよしにしやれ、癪だよ。石尊さまの大太刀ですつぱりはらつた貌だらうが、二河屋の帳場ぢやァ、糞のごとく云つてゐらァ。屋郎はちつと下卑てるが、おめへが藝者を一組よびやァ、こつちやァ二組三組もみこみに口をかけ、座敷をする女どもや、かしば箱廻シいきわたりよくしておきやァ、大纏のばれんよりやァふりまはすも手がるいよ。極樂の東門の建てめへ、龍宮の火の見やぐらの足代までかけたのと、見えをならべる、さんしたな屋郎たァちがふによ。しんなはなしえひをするのだ。モウこれからァおとまがからだは、箱入りのびんづる尊者ではねいが、しまつておき、手もつけさせる事ちやァねえ。腕づくでもなく、みゝづくでもなく、縁づくだ。いさくさなしに二親ならべ、のし水引で貰ふのだ。とつさんおふくろ、マァさう思つてくんねいし。」おやぢおふくろは顔をそむけてだまつてるゆゑ、喜之介はがてんゆかず。さては長とおとまもぐるになつて、あぢな新手をかきまはすなめつたな事はいはれぬとかんがへてゐる。長五郎「此の臺所唐人め、たばこばかりくらつて挨拶もしねえ、口がきけざあ松茸か赤貝でも出しやァがれ。いい子のふりはよしにしや、どんたくれめ。いめいましいわエイ。」ト、たばこぼんをとつて落開へはふり出す。喜之介「高があそびのうりものかひもの、斷りなしに御勝手さ。」ト、きせるをしまつてそこそこにはづしかゝる。長五郎「喜之さんちつとおまちなせい

し。お届けものがありやす。」ト、柔らかに聲かけられ、たちどまつて何だと見れば、またゝくちよつとしめしたり。御まへさま御かへらせのあとへ、長さま御出でにて、とくしんづくにてうつくしくきれ候まゝ、くはしきわけは、長さまより御聞き下されかし。けさほど藤兵衛さまにせかれてつき出し申し候まゝ、やうなることにて、さぞかし御はらだちもあらんなれど、おんまへさまの男をつぶして、男をたてさせ申す致しかた、御目にかけたく、藤兵衛さまを山までつれ出しまるり居り候まゝ、長さま御事を少しも御うたがひなく、山本まで早々御出でまちあけ〳〵めでたく。

喜之介「よみもをはらず」にこりとなり、此の文の文句では長さんおめへは。」長五郎「さつぱりと思ひきりやしたのさ。斯う許りではわかりやすめい。わつちも金毘羅さまへ大願があつて、一生好きの女郎買をたちやした。しかしこれまではりやつて、藤兵衛に引つこぬかれちやァ、あいつにけされたお苦が腕の長といふ名がすたりやす。此の意趣がへしに藤兵衛がつらをふんで、おとまがつき出すはなしえひもして來て、おめへのお出でをまちうけて居りやした。けんのみでぶつつかつたは、おめへのお氣をす引いて見たのサ。情のあんなさるを見こんで、おとまがおせわをおたのんまうしてい。おりよぐわいを申しやしたは御めんなさいやしく。」ト、かたの手ぬぐひを取喜之介「長さんなんにも申しやせん。誠に新手さ。」

ト、つむりをさげる。　おふくろ「ヤレ〳〵どうかとあんじやしたにサア〳〵お煮花。」おやぢ「とほけきつた御つさんも娘がかはいさ。」ト、そばにある五とくをひつくりかへし「此のとほりまるくおたのみ申します。」長五郎「ときにモシ藤兵衛をつれ出して、おとまが胸ははなやかに、つき出す所は山の耶摩もと。座敷をへだつて見物しやせうぢやアねえか。」喜之介「前篇につき出された、その後篇の意趣ばらし。」長五郎「藤兵衛に見せつける。諸事きやう言の山もとで。」喜之介「のみのすくねとしやれやせうか。」（靈願の鐘）ボオン。

鶴ケ岡耶摩元の套

拳「ヤイ、ハマリヤンでえリウでえ引〳〵。」いたこ「なりたやさんのおかいちやうなら、はやりやんすでござりやす。サアサア、サ、〳〵、ちよいときなせ。ヤレこれコレハイどつこい。」藤兵衛「ひつくりけへるほどさわけとのおゆるしだ。女藝者どもの尻をまくらせて、惣をどりとやらかさう。」おさま「血みちがあがらあよしねえな。」梅吉「ソラさわぐなとサ。」傘吉「だまつてしやれるがいい。」松藏「女藝者どもまアさわがねえとよ、どうしよう。」時大夫「藤さんはさわけといはつしやる。おとまさんはさわぐなとか、こいつアむづかしいわえ。」三木藏「さうさ彦兵衛、いい智慧はねえか。」彦兵衛「チョツトうちへいつて、かゝあに聞いてこようか。」二河やのお八重「いさくさなしに酒

としねえな。」船頭熊「ヤットいいちゑが出たの。」皆々「アハ、、、、。」松藏「尻をまくらねえかはり、梅吉と傘吉にくすぐり飲みつめりのみをさせよう。」三木藏「梅吉でも傘吉でもより取りみゝかきが四文四文。」八重「おてうしがないよチョン〳〵。」女「およびなはいましたかえ。」ト、いそがしさうに来る。八重「そして大どんぶりへ水ウといふ所だ。」てうしを出しながら、六はどうだ。」三「つぶなまでいふの。なまなかまみえ物思ふ。イヤ此奴もなまにえだ。」彦「なまにえといふもなアよく酒をのむぢやアねえか。」松「何よオいはつしやる。しかし地口のにえツこじれたあ、藝者の身にとつちやア、寝てもねつかれません。」藤兵衛　をりしもとなりざしきへ、きや　喜之介　がこゑ　にて、「泉水築山を見たところは見通シよりのめやすぜ。」長五郎　がこゑにて、「おさしきはせめいが、二人一座で廻シをとつたとおもやアいいぢやアねえかネイ。」おさま「ト、絲がはへ立つて行く。（藤兵衛）は喜之介へあてをつけんとてうづにさ。」　くがはひる。藤兵衛がきき耳、　はふたりがこゑを聞き　藤兵衛「どこへゆくのだ。」おさま「おつけてつつと立つを、「みんなはなんと思ふかしらねえが、あとは口々しやれるなかに、色男氣どりて遊ぶ奴は、おらあきついきらひだ、云はうなら蝮といふものだ。」三「ナゼ蝮でござりますす。」藤兵衛「ハア色さへなまつちろけりやアいいかと思つて、手も足もねえくせに、ひかりたがらア。花を出す所も目鼻があかねえ、むめんもくな所がなんと蝮だらう。」松「いかさまネ、そんなお客は鹽花をふつてとけさせてやりやせう。」藤兵衛「そのまた蝮をのみたがる蛙のやうな客がある奴

よ。」時「ハテネ。」藤兵衛　長五郎にあ「ひきいる」てつけて、「蟇といふやつあ、中ばらで飛び出したがるが、錢がねいからしやあしやあまじく〳〵、グウのねも出ねえ奴さ、やにでもなめさせて遣りてい、蛙のやうな客もあるぢやあねえか。」彦「けいるのやうなお客には、仕合とまだ出た事はござりません。」藤兵衛「生ころしの蛇といふ子もあるものよ。爲になる客にはかまはず、ぬらりくらりと穴ばひりをしたがるかいるは、蛇にのまれてゐるたァしらず、蛇もわれしらず蝮にとけてしまふ、えらいべらぼうハ、おれもよつぽど御くらうしやうだ。」八重「おとまはんマアなんだえ、誰がへびをつかひますえ。」登「赤がいるなら付焼きにしてかんどこでもふつきらせやせう。」梅「其のなかでもなめくぢりは色男だネイ、わつちやあまるのみにしてえよ。」皆々「フハ、オホ、、、、アハ、、、ハ、、、、。」ト、をかしくもねえ事を大わらひにするところへ、おとまはつきそでにつまをもち、すこしこゞみすがたにてきたり、ぶにんさうに藤兵衛がそばへすわる。藤兵衛「ひさしいものよ、蟲がかぶるなら一ッぺいのみなんだの。」おとま「さはり用事になつたからサ。」藤兵衛「いやむまくいふぜ。」皆々「わつちやアけふから酒だちさ。」藤兵衛「のみやアがれ。」ト、さかづきをなげ付けると、おとまがむおとま「オヤきついしやれさ。」らさきちりめんのひざへざつぷりかゝる。藤兵衛「でいぶ平氣孫左衛門だの、その筈よ、とぼけてゐざアなるめえ。ゆうべおれにいぢめころされ、ぜひなく喜印をつき出して、おれにむまく見せかける、その慾ばつたつらァ見ろ。もとでもねえ智慧をふるツて、わいらが相場をくるはせても、買ひこむやうな藤兵衛ぢやあねえ。髷の一が出すぎりやァ廻シがあるわえ、チョットよび出しやァ、どの客だとさとつてるながら、大目に見るのだ。長印をも切れるといつたが、突き出す事は怖からうが、はたらきのねえ根性骨で、板頭もすさまじいわえトサ。ぶう〳〵をいふのではねえ、利害をいつてきかせるのだ。垢のへひつた腐縁、ちよきめにたりめにたやまめトサ。こむづかしくひねるでもねえ、喜印も長印もいりやせん、藤兵衛さんおせわをお願ひ申しますと、ほんとにいやァすましてやるわさ。」（おとま）はぬきんの襟をなめながら、すましてきいてゐたるが、すひものわんをとつてつとつぎねえ。」ト一ッぺいうけてむいきにぐつとのみほし、「藤兵衛さんあけやまらねえ杯サ、ちつとあたらしからうネ。ハテ一旦おめへの顔をたつて、喜之さんをつき出したらいいぢやァねいかえ。それにしちこぜいをいひなはるは、店衆のあくがぬけねえのだ。おじよせいもねえと申していが、おめへもよつほどなけい氣だ。わたいがやうな情のねえ、いつこくものになじんだおめへが御そさうサ。おめへのおほふうにあぶらげを喰ふ子もござせいせうか、わたやァあきれけへつておさらばだよ、こつちからさがりやす。杯はさしやすて、ドレ座敷をかへてのみなほさう。」ト、いひずてにたちあがるを、藤兵衛おとまがおびをつかんでひきたふし、左のうでをまくりあげ、ほりもののけした上へ、ちがひだなのすゞり引きよせ、二人命とかいて、藤兵衛「藤兵衛はきれてやる、となりのからかみをさつとあけて、おしこむゆゑ、「喜之勝手なとこへうしやァがれ。」ト、おとまをひつたて、（藤兵衛）しきるごしにすわり、

さん、長さん、二河やで落ち合ひましても、あぢなものでものをも申しませなんだが、あらためておはしめえと思ひやしたのに、のつきつた事をしやした。しくじつてる藤兵衛を、たつた所はかたじけねいが、譯のある喜之さんを、藤兵衛にかへて突き出すには、此の仕返シがあらうかと、わるずるやうから、聞いてお出でなすつたらう。今おとまをきれた譯は、私も親方へ歸參がかなひました。夫れとしつて、りつぱに藤兵衛を突き出シたは、さすがにおとま、喜之さんの起請、長さんのほりものまで、むね氣をして、けさせやしたは、店ものやほと御免なさいやし。手代敵の藤兵衛が、實にかへるも勸善懲惡、貸本で見やしたが、しやれ本のやうなホンノ遊びでござります。」喜之「さすが御支配人ほどあつて、きれはなれのいいおさばきやく、大きに承知いたしやした。」長五郎「出入りいさくさなしにすんだ上は、けしてしまつたおとまが腕の、二人命の一點は。」ト、手ぬぐひぴきならぬ、そのうでづくにあるこつた。」ト、おとまが手をとつて喜之介がひざへつきたふす。「どうらくもモウ是れ切り、なにかのお禮は二河やで、お八重さきへいつて指和屋の板を買ひきつておきや。」男ゆいしや口々「ヤンヤヤンヤ、一ツしめませうシャン〳〵。」梅笠「わざつと。」ト、しう岩にあそぶやよろづ代の、龜はぎを置く。みなかみきよむなる、鶴の羽がさね千秋の、枝をならさぬみよなれや、ばんぜいらくとぞ舞ひをさむ

ツ、ンツンチヤン。

船頭部屋

大尾

船頭深話後編船頭部屋

やまあらし自序

山嵐と題號するは、康秀が古詠を慕ふにあらず、一日街上に、豪猪といふ優揚戯を見るに、畫工異獣を丹青し、内に猪一蹄をつなぐ。是れこの冊子に相似たり。ナゼナラバ、文面に古文の看板を出し、不佞種彦木戸番となつて、鐵鏈を鳴らし侍るてふなど云ふ和語を號ばして、俗眼を惑はすといへど、實はかの豚にして、人を化かす術もなく、人を噛む害も無し。讀んで益なく、讀まぬで事かけず と、大半二が徒のかた老爺に譏られんを恐れ、看板に空言なしを、龜の毛をもて筆をゆひ、兎のつの屋にしるす。